

地下生活者の手記

З а п и с к и и з п о д п о л ь я

フョードル・ドストエーフスキイ

青空文庫

第一 地下の世界

この手記の筆者も『手記』そのものもむろん、架空のものである。が、それにもかかわらず、かかる手記の作者のごとき人物は、わが社会全般を形成している諸条件を考慮にとり入れてみると、この社会に存し得るのみならず、むしろ存在するのが当然なくらいである。わたしはきわめて近き過去の時代に属する性格の一つを、普通よりも明瞭に、公衆の面前へ引きだしてみたかったのである。それはいまだに余喘よぜんを保っている世代の一代代表者なのである。『地下の世界』と題するこの断章において、この人物は自分自身とその見解とを自己紹介し、あわせてかかる人物がわれわれの周囲に現われた理由、いな、現われなければならなかった理由を、闡明せんと欲しているかのごとくである。次の断章においては、この人物が自己の生活中のある事件を叙述した本当の『手記』が始まるのである。

フョードル・ドストエーフスキイ

1

わたしは病的な人間だ……わたしは意地悪な人間だ。わたしは人好きのしない人間だ。これはどうも肝臓が悪いせいらしい。もつとも、わたしは自分の病気のことなど、これっからさきもわかっていないし、それに自分の体のどこが悪いのか、それさえ確かなことはわからないのだ。わたしは医術や医者を尊敬してはいるけれど、医療というものを受けていない。またこれまでもかつて受けたことがない。その上おまけに、わたしは極端に迷信家なのである。まあ、いわば、医術など尊敬する程度のかつぎ屋なのである（わたしは迷信家にならないですむくらいには、十分教育を受けているのだけれど、それでもかつぎ屋なのである）。なに、意地でも、医者の治療なんか受けたくない。これなぞは、確かに諸君の理解を絶したことに相違ない。ところが、わたしにはそれがわかつているのだ。この場合、わたしがこんな意地をはって、いつたいだれに面当てしようというのか、その辺はわたしもむろんうまく説明ができない。わたしが医者の治療を受けないからといって、それでやつらを「困らせる」わけにはゆかないのは、自分でもよく承知している。そんなこ

とをして損をするのは自分一人だけで、ほかのだれでもないということ、百も承知なのである。が、それにしても、わたしが治療を受けないのは、やはり意地っ張りのためなのだ。肝臓が悪いのなら、もつともつと、うんと悪くなるがいい！

わたしはもう前からこんな生活をしている、——かれこれ二十年にもなろう。いまわたしは四十だ。以前は勤めていたが、いまは浪々の身の上だ、わたしは意地の悪い役人だった。人に乱暴に当たつて、それをもつて快としていた。なにしろ、わたしは賄賂を取らなかつたのだから、せめてそれくらいの報酬は受けてしかるべきだったのである（これは悪い洒落だが、わたしはこれを消さないことにする。これを書く時には、なかなか辛辣にゆきそうな気がしたものだ、今になってみると、ただ醜いから威張りいばがしたかつたにすぎない、——が、意地にでも消さないでおく！）。わたしの陣取つていたテーブルの傍へ、人民どもがいろんな問い合わせなどに寄つてくると、わたしはがみがみと、噛みつかないばかりにどなりつけて、うまくだれかを取つちめた時などは、抑え切れないほどの満足を感じたものだ。しかも、それは大ていうまくいった。彼らはおおむね臆病な連中ばかりだった。いわずと知れた請願人気質というやつである。が、ダンディ連の中には一人我慢のならない将校がいた。こいつはいつかな降参しようとししないで、虫唾むしずが走るほど軍刀をが

ちやがちや鳴らす癖があった。わたしはこの軍刀のことで、やつと一年半ばかり戦争をつづけたが、とうとう勝利はこつちのものになった。やつとこさん、がちやがちやをやめてしまった。ただし、これはまだわたしの若かった頃の話である。しかし、諸君、わたしの天あまのじやく、
邪鬼のおもなる点がどんなところにあつたか、諸君に想像がつくだろうか？ そうだ、もつとも肝要なのは、——一ばんいまいましい話というのは、ほかでもない、わたしは単に意地悪な人間でないばかりか、世を拗ねた人間でさえもなく、ただいたずらに雀のような連中を驚かして、ようやくみずから慰めているにすぎないということを、一刻一分のやみ間なく、——思いきり癩癩を破裂させた瞬間でさえ、羞恥の念をいだきながら自覚する、その点にあつたのである。たとえ口から泡を吹くほどいきり立っていても、もしだれかがわたしに玩具の人形でも当てがってくれるか、お茶に砂糖でも添えて持って来てくれたら、それでわたしはおとなしくなかなない人間なのだ。それどころか、心底から歓喜の念を禁じ得ないであろう。そのくせ、きつと自分で自分に齒がみをするくらい腹を立てながら、恥ずかしさのあまり、何か月も何か月も、不眠症でくるしむに相違ないのだ。それがもうわたしのきまつた癖なのだ。

さつきわたしが意地の悪い役人だったといつたのは、あれは自分で自分を中傷したのだ。

依怙地になってわざと中傷したのだ。わたしは請願人や将校を相手に、ただの悪ふざけをただけなので、本当のところ、一度も意地悪になれたためしがない。それどころか、まるで反対の要素が、自分の内部にあまるほど充満しているのを、ひっきりなしにかんじた。そいつが、その正反対な要素が、わたしの体の中でうようよしているのだ。これが生涯、わたしの内部でうようよしながら、どうかして外へ出ようとしていたのは、自分でもちゃんとわかつていたけれど、わたしはそいつを出さないように抑えていた。わざと外へ出さないようにしていたのだ。それが恥ずかしくて、顔から火が出るほど苦しんだ。体じゅう瘻癩で慄えるほどの苦しみだった。それでも、——結局あきあきしてしまった。それこそうんざりしてしまつたのだ！ しかし、諸君、いまわたしは何か後悔して、諸君にゆるしても乞うているように思われはしないだろうか？……きつと、そう思われるに違いない……もつとも、誓つていうが、たとえそう思われたつて、わたしには同じことなのだが……

わたしは単に意地悪な人間ばかりでなく、結局なものにもなれなかつた。悪人にも、善人にも、卑劣漢にも、正直者にも、英雄にも、虫けらにもなれなかつた。今やわたしは自分の片隅に最後の日を送りながら、賢い人間は本気で何かになることはできない、ただ馬鹿が何かになるばかりだという、なんの役にも立たない毒々しい気やすめで、自分で自

分を愚弄している態^てたらくだ。そうだ、十九世紀の人間は精神的な意味で、もつぱら無性格な存在たるべき義務がある。ところで、性格を有する人物、すなわち活動家はもつぱら浅薄な存在でなければならぬ。これは、わたしの四十年来の持説である。わたしはいま四十だが、しかし、四十年といえは、これはもう人間の全生涯だ。それこそもう大変な老齢である。四十年以上も生き延びるのは無作法だ、卑劣だ、不道德だ！ いったいだれが四十以上も生きている？ 正直に誠実に答えてみたまえ。では、わたしがそれに答えよう。馬鹿とやくざ者が四十以上も生きるのだ。わたしはありったけの老人どもに、面とむかつてそういつてやる。世の尊敬を受けている、鬢髪に霜をおいた、芳香馥郁たる老人どもにいつてやる！ 世間のやつら一同に、面とむかつていつてやる！ わたしはこういう権利をもっているのだ。なぜなら、わたし自身、六十まで生き延びるからだ。七十までも生き通すからだ！ 八十までも生きつづけるからだ！……ちよつと待ってくれたまえ！ まず息をつがせてもらおう……

諸君、おそらく諸君は、わたしが諸君を笑わすつもりでこんなことをいうのだ、と思つていられるだろう。とんでもない間違いだ。わたしは諸君の考えていられるような、或いは諸君の考えられるかもしれないような、そんな暢気千萬な男ではけつしてない。もつと

も、こんな饒舌に癩癩を起こした諸君が（どうもわたしの直感では、諸君は癩癩を起こしていられるらしい）、いったいお前は何者だ、と尋ねる気持ちになられたら、わたしは一個の八等官だとお答えしよう。わたしは食わんがために（ただそのみのため）、勤務していたが、去年遠い親戚の一人が六千ルーブリの金を遺言して死んでくれたので、わたしはすぐに辞表を提出して、自分の小さな片隅に閉じこもってしまった。わたしは前からこの一隅に住んでいたのだが、今度はそこに閉じこもってしまったのだ。わたしの部屋は汚いやくぎなもので、町はずれにあるのだ。女中は田舎出の婆さんで、馬鹿なために意地が悪く、おまけにいつもいやな臭いをぶんぶんさせている。わたしは、ペテルブルグの気が健康に好くないし、わたし風情の貧弱な資力でペテルブルグ住いをするのは非常に骨が折れると、人から注意を受けるのだが、そんなことは自分で百も承知している。それをもっともらしく忠告する、経験と知恵の塊りみたいな連中よりも、ずっとよく心得ているが、それでも、わたしはペテルブルグに踏みとどまっているのだ。ペテルブルグを出て行きはしない！ わたしが出て行かないわけは……ええ！ わたしが出て行こうと行くまいと、そんなことはまったくどうでもいいではないか。

それにしても、ちゃんとした人間が心から、満足しながら話すことができる話題という

のは、そもそもなんだろう？

答、——自分自身のことである。

では、わたしもひとつ自分の話をしよう。

2

ところで、諸君、わたしはいま諸君が聞くことを望むにしろ、望まないにしろ、なぜわたしが虫けらにさえなれなかつたかというわけを、話して聞かせたいとおもう。堂々といつてのけるが、わたしは今までなんと虫けらになりたいと思つたかしれない。けれども、わたしはそれにさえ値しない人間だったのだ。諸君、誓つていうが、あまり意識しすぎるということとは、それは病気なのである。間違いない本ものの病気なのである。人間の日常生活にとつては、ありふれた世間なみの意識だけでも、十分すぎるくらいなのだ。つまり、不幸なわが十九世紀に生まれ合わせて、しかもその上に、地球上で最も抽象的な作為的都市であるペテルブルグに住むなどという、とんでもない不幸を持ちあわせた、教養の高い人間に与えられた意識量の、半分どころか、四分の一もあつたらたくさんなのだ（実

際、街にも作爲的なのと、そうでないのがある)。たとえば、いわゆる直情径行の人とか、活動家などが生活の資としてしているような、あの程度の意識があつたら、十分なのである。わたしはかけでもするが、諸君はわたしがこんなことを書くのを、から威張りのためだ、——活動家のことで警句を吐くために、悪趣味なから威張りをして、例の将校のように、軍刀をがちやつかせているのだと、こう考えていられるに相違ない。しかし、諸君、自分の病気を自慢するものがどこにあるう？ しかも、それを種に威張るなんて、もつてのほかの話である。

もつとも、わたしはいつたいなにをいつているのだ？ だれだって、それをやっているではないか。つまり、病気を自慢しているのだ。わたしなどはおそらくその最たるものだろう。とにかく、議論はよそう。わたしの抗弁などは馬鹿げて聞こえるから。が、それにしても、わたしは心から確信している、——意識の過剰どころか、どんな種類の意識でも、意識はすべて病気なのである。わたしはそれを主張する。けれど、この問題もしばらく措くことにして、ひとつこういう疑問に答えてもらいたい。どういうわけでわたしはいつも、最も大切な瞬間に、つまり一時われわれの間でやかましくいわれた「すべての美しくして高遠なるもの」のあらゆる微妙な陰影を意識するのに、最も適当な心的状態に置かれた瞬

間に、それを意識しようとはしないで、あのような見ぐるしい所業をやつてのけるような仕儀になつたのか？ しかも、それは……まあ、それはひと口にいえば、みんながやつてゐることもかもしれないけれど、わたしとしてはけつしてやつてはならないと十二分に意識してゐるその瞬間に、当てつけがましくわざわざ頭に浮かんでくるのである。わたしは善だとか、例の「美しくして高遠なるもの」だとかを、はつきり意識すればするほど、いよいよ深く自己の内部の泥沼にはまりこんで、まるで抜きも差しもできなくなつてしまふのだ。なによりも困つたことは、それがすべて偶然でなく、どうしてもそうならざるをえないように思われる点なのである。いわば、まるでこれがわたしのノーマルな状態であつて、けつして病気でもなければ変態でもないらしいので、結局この変態と戦おうなどという気持ちだが、すっかりなくなつてしまつたのだ。で、わたしはどどのつまり、おそらくこれを自分のノーマルな状態のように、ほとんど信じかねないばかりになつた（ことによつたら、本当に信じ切つたかもしれない）けれど、初めしばらくの間は、この闘争のために、わたしはどれくらい苦しんだかしのれない！ わたしは、だれでもみんなそうだとは思わなかつたので、その後ずつとこのことを、まるで大秘密のように秘しかくしていた。わたしはそれを恥じた（もしかしたら、今でも恥じてゐるかもしれない）。それが嵩じてくると、な

にか常軌を逸した、下劣な、秘密の快樂めいたものをかんじるようになった。どうかすると、あのなんともいえない、いまわしいペテルブルグの夜に、自分の侘び住居へ帰ってきてながら、今日もまた陋劣なことをやってのけた、しかしできたことは取り返しがつかないと、一生懸命に意識の中でくり返しては、心ひそかに自分を責めさいなみ、われとわが身を噛み裂き、引き撈るのだ。そうするとしまいにはこの意識の苦汁が、一種の呪わしい汚辱に満ちた甘い感じに変わって、最後にはそれこそ間違いのない真剣な快樂になつてしまふ！ そうだ、快樂なのだ、まさに快樂なのである！ わたしはそれを主張する。わたしがこんなことをいい出したのは、ほかの人にもこんな快感があるものか、それを確実に知りたくてたまらないからだ。わたしは諸君に説明しよう。この場合の快感は、あまり強烈に自己の屈辱を意識するところから生じたのだ。つまり、自分がどんづまりの壁にぶつかって、その苦しさを痛感しながら、しかもほかにどうもしようがない、のがれるべき途がない、今さら別人になるわけにはゆかない、よしまた何かほかのものに変わり得るという信念もあり、時間の余裕があつたとしても、おそらく自分からそんな変化を望まなかつたに相違ない。それに、そんな気を起こしてみたところで、結局どうもしなかつたらうと思われる。なぜなら、変わるべき目標がないからである。——こんなふうに見えるところか

ら、一種の快感が生ずるのだ。しかし、もつとも肝要な最後まで煎じつめた要点は、ほかでもない、こんなことはすべて、強烈な意識に含まれているノーマルな根本法則と、その法則から直接に生ずる惰力によつて行なわれるのだから、したがつてこの場合、何かに変わるなどということはおろか、もうてんで手も足も出ないのである。たとえば、強烈な意識の結果として、こんなことがいえるのだ。もし本人が本当に自分を卑劣漢だと感じているなら、卑劣漢であるのも正しいことだ。そして、それが卑劣漢にとつて気休めになるのだ。しかし、もうたくさんだ……ああ、さんざしやべり散らしはしたものの、いったいなにを説明することができたろう？……わたしのいう快感はどう説明されたのだ？　しかし、わたしは説明してみせる！　わたしはいやでも最後までけりをつけずにはおかない！　わたしが筆をとつたのも、つまりそのためではないか……

早い話が、わたしは恐ろしく自負心が強い。まるで背むしかこびと小人のように、猜疑心が強くて、怒りっぽい。けれど、本当のところをいうと、もしかりに平手打ちでも喰わせられるようなことがあつたら、わたしはかえつてそれを喜んだかもしれない、そういつたような時が、わたしにはよくあるのだ。真面目な話、わたしはそんな場合でも、一種独特の快感を見つけたに相違ない。むろん、それは絶望の快感である。絶望の中にも焼けつく

ように強烈な快感があるものだ。ことに自分の進退きわまった窮境を痛切に意識する時などは、なおさらである。で、その平手打ちを喰った場合は、自分が二度と世間へ顔出しができないほど、面目をまる潰しにされたという意識が、いや応なく頭からのしかかって来るわけである。とにかく、肝腎な問題は、なんと理屈をこねてみたところで、結局、要するに、わたしがいつもすべての点において、第一ばんの悪者になってしまふということなのだ。何よりも癩に障るのは、罪もないのに、いわば自然の法則で、悪者になってしまふことである。まず第一に、わたしは周囲のだれよりも賢いのが悪いのだ（わたしはいつも周囲のだれよりも賢いと自認して、ときには、諸君は本当にされないかもしれないが、それをきまりわるく感じるくらいだった。少なくとも、わたしは一生妙にそつぽばかり見えて、けつして人の顔をまともに見たことがない）。第二には、たとえわたしに高潔心があつたにもせよ、それがなんの役にも立たないと意識することによって、かえつてよけいに苦しい思いをするばかりなので、それもわたしが悪いことになるのである。わたしはおそらく自分の高潔心から、何一つしでかすことができないだろう。ゆるすこともできない。なぜなら、無礼者がわたしを殴つたのは、たぶん自然の法則に従つたものだろうが、自然の法則をゆるすなどということは不可能だからである。それかといって、忘れることもで

きない。たとえ自然の法則とはいいながら、それでもやはり癩だからである。最後に、たとえわたしが全然高潔ぶろうなどと思わないで、無礼者に復讐しようと望んだにもせよ、結局、だれにも何ひとつ復讐することができなかつたろう。なぜなら、よしんばできることであっても、きつと何一つ決行する気になれそうもないからである。どうして決行できないか？ このことについて、わたしはとくに一言したのである。

3

自分の恨みを晴らしたり、全体に自己の主張を通したりするような人間は、——たとえば、どんなふうにするのだろうか？ 思うに、彼らは復讐の念に駆られると、その時は彼らの全存在に、この感情以外の何も残らなくなってしまうに相違ない。そんな連中は、まるで猛り立った牡牛のように、角をぐつと下のほうへ傾けながら、まっしぐらに目的を指して突進するので、壁にでもぶつつからない限り、引き止めることはできない（ついでにいつておくが、こんな連中、つまり、直情径行の人だの活動家だのは、壁にぶつつかると、真つ正直に兜をぬいしてしまうのである。彼らにとっては、われわれのように考えてば

かりいて、したがってなんにもしない人間とちがって、壁は方向転換の理由でもなければ、途中から引り返す口実にもならない。われわれのような連中なら、普通、自分ではそんな口実など信じないくせに、いつもそれをもつけの幸いにしたがるものなのだが、直情径行派はなかなかどうして、真つ正直に兜をぬいでしまうのである。壁は彼らにとって、なんとなく心を落ちつけるような、道徳的な解決を与えるような、決定的な、というより、ほとんど神秘的な意義を有しているのだ……しかし、壁のことは後廻しにしよう)。さて、こうした直情径行的の人間を、わたしは本当のノーマルな人間だと思う。これこそ慈母のごとき自然が、わたしらをいとも優しく地上に生みおとす時、かくあれかしと望んだような人間なのである。わたしはこういう人間を見ると、腸が煮えくり返るほど羨しくなる。こういう連中は頭が鈍い、それはわたしもあえて争わない。ノーマルな人間は馬鹿なのが本当かもしれない。諸君はなぜかそのわけをごぞんじのことと思う。それはきわめて立派なこととさえいえるだろう。わたしがこのいわば一種の疑念に類したものを、ますます堅く信じこんでしまったのは、ほかでもない。もしかりにノーマルな人間のアンチテーゼ、即ち自然の懐から出たのでなしに、蒸溜器レトリートから生まれたような（これはもうほとんど神秘主義に属するが、諸君、わたしはそれをも多少信じている）、強烈な意識を有する人間を

例にとつてみると、このレトルトの人間がどうかすると、自分のアンチテーゼの前に兜を脱いでしまい、強烈な意識を有しているにもかかわらず、好んで自分を二十日鼠かなんかのように考えて、人間扱いをしなくなるのである。たとえ強烈な意識を有する二十日鼠にもせよ、要するに鼠は鼠である。ところが、一方は人間だから、したがってその他のいっさいが備わっているわけだ。しかも、肝腎なのは彼が自分で自分を二十日鼠扱いにしていることで、だれもそんなことをたのみはしないのだ。これが重要な点なのである。ところで、今度は、この二十日鼠の行動ぶりを一見しよう。かりにこの鼠も同様に侮辱を受けて（こいつはほとんど年じゆう、侮辱を受けているのだ）、やはり復讐を念じているとしよう。この鼠の心中には、おそろく [l'homme de la nature et de la vérité]（自然と真理の人）よりも、もつと憎悪の念が、つもりつもっているに相違ない。おなじ悪をもつて敵に復讐しようという穢らわしい下等な欲望が、鼠の腹の中では、ロンム・ド・ラ・ナテユール・エ・ド・ラ・ヴ 自然と真理の、エリテ 人よりも、もつと醜悪なたちでひしめきあっているかもしれない。というのは、ロンム 自然と真理の人は生まれつき愚鈍なために、自分の復讐をただお手軽に正義と考えているからである。ところが、二十日鼠は強烈な意識のためにこの場合、正義などというものを否定してしまう。そして、結局、仕事そのもの、復讐行為そのものに走つ

てしまうのである。不幸な二十日鼠は、最初しでかしたたった一つの穢らわしい行為のほかに、いろんな問題や疑惑といった形で、さまざまな穢らわしいものを、自分の周囲に早くも山のごとく積み重ねてしまった。数限りない未解決の問題を、一つの問題にもつていつてしまうので、そのまわりには何かしら宿命的なごった汁ができあがってしまう。このごった汁というのは、鼠自身の疑惑や煩悶を初めとして、裁判官や独裁官といった体裁で、その前に威風堂々と控えながら、健康なのを一杯に拵けて、からからと笑い飛ばしている直情径行的な人間どもの唾、——こういうものでできている悪臭ふんぷんたる溝泥どぶみたいなものなのだ。もちろん、鼠はただいっさいを無視するように手をひとつ振って、自分でも信じていない付け焼刃の軽蔑の微笑を浮かべながら、自分の穴のなかへ見苦しく潜り込むよりいたし方がないのである。そこで悪臭ふんぷんたるいまわしい床下で、侮辱と冷笑に打ちのめされたわが二十日鼠は、さっそく冷たく毒々しい、しかも永劫消えることのない憎悪に浸るのだ。四十年くらいぶつつづけに、自分の受けた浅ましい侮辱をきわめて零細な点まで、残りなく思い起こすのだ。そうして、その度にいつそうあさましいデテールを勝手につけ足しながら、自分の空想で意地悪く自分を嘲弄し、いら立たせるのである。われとわが空想を恥じながらも、やはりいっさいのことを思い起こして、再三再四こころ

の中で捏ね返したあげく、こんなこともやはり起こる可能性があったのだというのを口実に、とんでもないことを考えだして、自分で自分を侮辱する。こうして、何一つ容赦しようとしなさい。たとえ復讐を始めるにしても、こちよこちよと小出しにこっさりやるので、自分の復讐の権利もその成功も、まるで信じてはいないのだ。そして、自分の復讐の試みのために、相手よりもかえって自分のほうが百層倍も苦しんで、先方はけろりとすましているに相違ないのを、前からちゃんと同じ抜いているのである。臨終の床に横たわりながら、またしても、根こそぎありつたけのことを思い出すが、今度は長年の間にもつりつもつた利息までが、おまけにくつついているのだ、そして……けれども、つまりこの冷ややかな、いまわしい、半ば絶望的な、半ば希望を蔵しているような状態の中に、——自棄半分に四十年間も意識的に自分を床下に生理めにしたという事実の中に、——強いて造り出してはみたものの、多少怪しいところのあるこうした救いのない境遇の中に、内証してしまつた満たされざる欲望の毒素の中に、躊躇ののちに永久変わらぬ決心を取つたと思う間もなく、すぐ次の瞬間に湧き起こる悔恨の中に、——こうした熱にでも浮かされたような混沌のなかに、さつきわたしのいった不思議な快感の真諦が蔵されているのである。それは、きわめて微妙な、時とすると、意識で捕捉できないようなことがらなので、少しでも

頭に融通の利かない人間や、太い神経の持ち主などは、この問題になると、てんで何が何やらわからないのである。『ことによつたら』と、諸君はにやにや齒をむきながら、自分の意見をつけ加えるだろう。『一度も平手打ちを喰つたことのない連中も、やつぱりよく飲みこめないでしょう』こういつたわけで、わたしが今までの生涯で、おそらく平手打ちの一つくらい喰つたものだから、そこでこの問題の通人らしい口をきくのだろうという意味を、婉曲に当てこするに相違ないのだ。諸君がそう思つていられるのは、賭けをしてもいくらいである。しかし、諸君、乞う、意を安んぜよ。わたしはまだ平手打ちを受けたことはないのだ。もつとも、この点、諸君がなんと思おうと、わたしにとつてはまったくどうでもいいことなのだけれども、わたしはことによつたら今までの生涯で、自分から人に平手打ちを喰らわせる度数が少なかつたのを、残念に思っているかもしれないのだ。しかし、もうたくさんだ。諸君にとつて並み並みならぬ興味を有するこの主題については、これ以上もう一言も語らないことにしよう。

そこで今度は、快感のもつある種の繊細味を解しない神経の太い人間のことを、冷静に語りつづけるとしよう。こうした連中は、ある場合に際会すると、たとえば牡牛のごとくのど一杯に咆え散らして、そのために非常な名誉を勝ち得るには相違ないだろうけれども、

しかし前述したごとく、彼らは不可能事にぶつつかると、すぐおとなしくなってしまうのだ。不可能事、——これは即ち石の壁なのか？ では石の壁とはどんなものなのか？ それはまあ、いうまでもなく、自然の法則であり、自然科学の結論であり、数学である。たとえば、人間は猿から進化したのだと証明されたら、もう顔を顰めたって始まらないから、そのまま頂戴しておかなければならない。また、自分自身の脂肪の一滴は本質的に見て、同胞の脂肪の数万滴よりも貴重であらねばならぬ。したがって、あらゆる善行も義務も、その他あらゆる偏見も世迷い言も、この結論を基礎として解決さるべきである、とこんなふうに証明されたら、もはや仕方がない、やはりそのまま受け取らねばならない。なにしろ、それは二二が四であり、数学なのだから、うっかり口答えでもしようものなら、それこそ大変だ。

『とんでもない』とみんな叫び出すだろう。『反抗なんかするわけにはゆきません、これは二二が四なんだから！ 自然はきみの意見なんか聞きやしません。自然はきみの希望がどうだろうと、自分の法則がきみの気に入ろうと入るまいと、そんなことは無関心なんです。きみは自然があるがままに受け容れるべきで、したがってその結果をもすべてありがたく頂戴しなければなりません。壁はとりもなおさず壁なんですよ……しかしか云々』え

えじれつたい、わたしにはなぜかこの法則や二二が四が気にいらぬのに、自然律だの数学だのに、なんの係わりがあるというのだ？　むろん、わたしは自分の額でこの壁を打ち抜くことはできない。そんな力は本当に持ち合わせがないのだから。けれども、わたしはけっしてこの壁と和睦しやしない。なぜといって、わたしの前に石の壁が突っ立っていて、しかもわたしにそれを打ち抜く力がないという、ただそれだけの理由でたくさんなのだ。

こうした石の壁は本当に鎮静剤か何かで、じじつ平和をもたらす一種の呪文を含んでいるように、世間では考えられている。それはこの石壁が二二が四であるという、ただそれだけの理由にすぎないのだ。おお、なんとという愚の骨頂だ？　それに比べると、いっさいを理解し、いっさいを意識し、すべての不可能事や石の壁を達観しながら、もし妥協がいまわしく思われたら、その不可能事や、石の壁のどれ一つとも妥協しないほうが、どれだけ堂々として立派かわからない。どうしても避けることのできない論理的なコンビネーションの道を辿りながら、この石壁についてもなぜか自分に罪がある、などという永久不変のテーマに溺れて、思いつきりいまわしい結論に到着する（もつとも、自分に何一つ罪がないのは、ここでも火を見るより明瞭なだけだ）。その結果、無言のまま力ない歯がみをつづけ、腹を立てようにも、結局、相手が無いのをぼんやり考えながら、蕩然と惰性

の中に感覚を麻痺させてしまうのだ。実際、怒ろうにも相手がない。或いは永久にそんなものは出て来ないのかもしれない。これは、いかさまカルタ師がやるような札のさし変えに類した手で、何かごまかされているのだ。これはもうなんのことはない、本当の溝泥だ、どぶ——何がなんだかだれがだれだか、まるつきりわからない。しかし、こうしたごった返しやさし変えにかかわらず、やはりある痛みを感じる。そして、わけがわからなくなればなるほど、ますます痛みがひどくなつて来るのだ。

4

『はっ、はっ、なるほど！　してみると、きみは歯痛にも快感を見つけたぞうというんだね！』と諸君は笑いとともにかう叫ぶだろう。

『それがどうしたのだ？　歯痛にだつて快感はありますよ』とわたしは答えよう。『わたしはまるひと月、歯痛に悩んだことがあるから、確かに快感のあることを知っていますよ。この場合はむろん、黙つてぷりぷりしているのじゃなくつて、唸り声を立てるのだけれども、その唸り声は真つ正直なものじゃない。それは意地悪を伴つた唸り声なんで、つまり

その意地悪の中にこそ、曰くがあるのです。この唸り声の中にこそ、苦しめるものの快感が表現されるのです』もし快感を覚えなかったら、——当人おそらく唸りはしなかったろう。これはいい例だから、諸君これをひとつ発展さしてみよう。この唸り声のなかには第一、当人の意識にとつて屈辱的な苦痛の無目的が表現されている。つまり、それは自然の合法性であつて、そんなものは諸君にとつて一顧の値打ちもないけれど、やはり諸君はそのために苦しんでいる。ところが、自然は平氣なんだからね。そこで、敵はどこにもいないのに、痛みは存在するという意識が表現されるわけだ。つまり、諸君はありとあらゆるヴァーゲンハイム（ドイツ人の名齒科医）も十把ひとからげにして完全に自分の齒の奴隷となつていて、もしだれかがその氣になれば、齒痛は止まってしまふけれど、もしその氣にならなかつたら、まだ三か月もいたみとおすのだ。そして、諸君がいつまでもそれを納得しないで、相変わらず反抗をつづけるとすれば、諸君はただ気休めに自分で自分をぶん撲るか、拳固をかためてこつぴどく邪魔物の壁を叩きつけるか、それよりほかの手はまるで残されていない、——こういったような意識の表現なのである。さて、こんな血の滲むような屈辱感や、たれのとも知れない嘲笑がもととなつて、ついには情欲のきわみに達するほどの快感が始まるのだ。諸君、わたしは諸君にお願いがある。いつか十九世紀の教養

人が歯痛に苦しめられて、唸っている声に耳を澄ましてもらいたい。それも痛み出してから二日目、ないし三日目あたりがよろしい。その時は初めの日に唸ったのとは、大分ちがった唸り方をするようになる。つまり、単に歯が痛いからといって、がさつな百姓男が立てるような唸り声ではなく、ヨーロッパ的文化の洗礼を受けた発達した人間のような唸り方、つまり、今のはやり言葉を使っていえば、「祖国の土と国民的本質から絶縁された」人間のような唸り方をするのである。彼の唸り方はなんとなくいやな、胸の悪くなるほど意地悪い調子になって、それが毎日毎晩ひっきりなしにつづくのだ。そんなに唸ったところで、なんの役にも立たないことは、当人もちゃんと心得ているのみならず、ただいたずらに自他の精根を疲らせ、いら立たしい気持ちにさせるばかりなのを、だれよりもよく知り抜いているのだ。彼がそれを目当てに骨折って自分の苦痛を見てもらおうとしている公衆も、家族ぜんたいも、彼の唸り声を聞きながら、今ではもう嫌悪の念さえいなくようになり、その真実さをこれからさきも信じないで、妙な節をつけたり技巧を凝らしたりしないで、もつと率直に唸ることができそうなものだ。あれはただ面当てから意地になって、悪ふざけしているだけの話さ、などと腹の中で考える、——それも当人はすっかり知り抜いているのである。まあ、こういうさまざまな自意識や屈辱の中に、情欲にも似た快感が

含まれているのだ。いつてみれば、『わたしはあなた方を悩まして、みんなの心を掻きむしっている。そして、家中の者を寝させないようにしている。だから、みんな眠らないでいなさい。わたしは歯が痛いんだということを、あなた方も一刻一刻やみ間なしに感じるがいいんだ。以前わたしはあなた方の目に英雄らしく見られたいと思ったものだけれど、今ではもうそれどころか、ただの穢らわしい人間で、一個の無頼漢にすぎない。なあに、それならそれでかまわないさ！ あなた方がわたしの本性を見破ってくれたので、わたしは結句ありがたいくらいだ。あなた方はわたしの下品な唸り声を聞くのがおいやなんですよ。ふん、それなら勝手にいやがるがいい、今にもっといやなやつを、節をつけて聞かしてやるから……』諸君、諸君はこれでもまだわからないだろうか？ 駄目だ、この快感のありとあらゆる陰影を解するためには、深く深く徹底的に精神的発達を遂げて、底の底まで自覚しつくさなければならぬらしい！ 諸君は笑っていられるのか？ それならこちらも愉快だ。諸君、わたしの洒落はむろん下品などころがあつて、なだらかではなく、筋を外しがちで、おまけに自分で自分を信じないような調子だが、しかしそれというのは、わたしが自己を信じないからである。いったい自意識の発達した人間が、いくらなんでも自己を尊敬するなんてできるものだろうか。

5

さて、借問するが、自分自身の屈辱感の中にさえ、快感を見いだそうなどと企らむような人間が、はたして多少なりと自己を尊敬し得るものだろうか？ わたしが今こういうのは、変に甘ったるい慚愧の念などのためではない。それに、全体からして『ごめんなさい、パパさん、これからはもういたしません』などというのが、わたしは我慢のできない人たちだった、——それも、わたしにそれがいえないからではない。それどころか、あまりいえ過ぎるためかもしれない。まったく大いにいえるのだ！ わたしはてんで夢にも悪いことをした覚えがないような時に、よくわざとへまなことをやってのける。それが何より一番いまわしいのだ。そうすると、わたしはまたしても心しんから感激して、後悔の涙を流したものである。むろん、わたしは自分で自分を欺いたのだが、何もけっして芝居を打ったわけではない。ただなんとなくわたしの心がそんないやな真似をさせるのだ……この場合、自然の法則さえも責めるわけにはゆかない、もつとも、この自然律はなんといつても、一生涯の間、こっぴどくわたしを侮辱しつづけたのだけれど。こんなことは思い出すのも穢ら

わしい、それに、その当時だって穢らわしかった。実際ものの一分もたつと、わたしはもう毒々しい気持ちをいだきながら、こんなことはみんな嘘だ、いまいましい嘘だ、とつてつけた嘘だ、こんな後悔も、感激も、更生の誓いも、みんな何もかも嘘だと考え直すのである。そもそもわたしはなんのために、ああ自分で自分をひん曲げたり、苦しめたりしたのか、ためしに聞いてみるがいい。その答えは、——ぼんやり懐手をしているのが退屈でたまらなかつたので、それでいろんな軽業を試してみたのだ、とこう来るに違いない。まったくそのとおりなのだ。諸君、よく気をつけて自分を観察して見たまえ、なるほどそのとおりだと合点がゆくから。つまり、なんとかして生きてゆくためには、自分でいろいろな冒険を案出して、人生を創作しなければならなかつたのだ。まあ、早い話が、わたしはいままでどのくらい腹を立てたかしのれない。それも理由あつての話ではなく、ただなんということなしに、わざとやるのだ。自分でも腹を立てるわけではないと承知しながら、自分で自分に油をかけて行くうちに、とうとうまったく心底から腹を立てるようになってしまった。わたしはどうも、一生涯、こういう芝居を打ちたい気もちに取りつかれて、しまいにはもう自分で自分の意志を支配することができなくなった。いつかは無理に恋をしようと思つたことさえある。しかも、それが二度まであつたのだ。正直なところ、諸君、わた

しはずいぶん苦しんだ。魂の奥底では、自分が苦しんでいるなどとは信じられない。むしろ冷笑の気分が動くのだけれど、それでもとにかく苦しんだ。本当に正真正銘の苦しみをした。嫉妬の念に駆られて、前後を忘れたこともある……それもこれも、みんな退屈から出たことなのだ。諸君、すべては退屈から生ずるのだ。惰性に圧倒されてしまうからだ。実際、意識というものから直接生ずる合法的な結果は、ほかでもない、この惰性なのだ。いい換えれば、意識的な拱手傍観の生活である。このことはもう前に述べておいた。くり返しているが、とくに強調してくり返しておくが、すべて直情径行的の人間や活動家は、彼らが鈍感で浅薄な人間であればこそ、そのために実行的にできているのだ。これをどう説明したらよからうか？ そうだ、こういったらいい。彼らは自分の浅薄な性質のために、もつとも手近かな第二義的原因を根本的なものと取り違えて、自分の仕事の絶対不変の基礎を発見したと、恐ろしくせっかちに、気軽に確信してしまって、そこでほっと安堵の息をつく。それがもつとも大切な点なのである。実際、活動を始めようというのには、まずあらかじめ安心し切っていて、それこそなんらの疑惑も残らないようにすることが必要である。ところで、たとえばわたしなどは、どんなふうに自分を安堵させることができるだろう？ 自己の支柱とすべき根本的理由はどこにあるのだ、肝腎かなめの基礎はどこ

にあるのだ？　どこからそれをとって来たらしいのだろうか？　わたしは思索の自己鍛錬をしているので、したがって、一つの根本的原因が更に以上根本的なやつを引きだしてくる、これが無限にどこまでもつづくのだ。これがすなわちすべての意識とか、思索とかいうものの本質なのだ。してみると、もうこれこそ、例の自然律というやつに違いない。そうすると、最後は結局どうなるのだろうか？　やはり同じことなのである。ついさつき、わたしが復讐のことを話したのを思い出してもらいたい（諸君はおそらく、ろくすつぽ聞いているいられなかったのだろう）。前にもいったとおり、人が復讐するのは、そこに正義を見いだすからである。つまり、彼は根本的な理由、いい換えれば正義を見いだしたわけだから、したがって、あらゆる点において安心を得たことになる。そこで、潔白な正しい行為をしているという確信をいだきながら、落ちつき払って復讐の目的を達することができる。ところが、わたしはその行為に正義も発見しなければ、徳行などもいっこうに見いださないの、もし復讐するとすれば、要するにただ面当てのためにすぎない。この面当てというやつは、もちろん、疑惑にしろ何にしろ、いっさいのものを克服する力があるのだから、したがって、立派に根本的原因の代わりを勤めることもできたはずなのである（というのは、そんなものがなんの原因でもないからである）。しかし、もしわたしに面

当ての気持ちなどまるでないとしたら、いったいどうしたらいいのだろう（わたしはさつきここから議論を始めたのであった）。憤怒はここでもまた、例のいまわしい意識の法則の作用で、化学分解的にばらばらになってしまふ。みるみるうちに、肝腎の対象がちりぢりになって論証は霧のごとく消え失せ、責任者は見つからないで終わってしまふ。そして、侮辱はもはや侮辱でなく、宿命みたいなものになってしまふのだ。いわば、だれを責めることもできない歯痛のようなものになるのである。そこでまたしても、やはりたった一つの方法しか残らないことになる。つまり、壁をこつぴどく撲りつけることなのである。

まあ、こういうわけで、結局、諦めてうちやらかすより仕方がない。なぜなら、根本原因が見つからなかったからである。かりに根本原因も理屈も抜きにして、ちよつとのま意識をおつ払いながら、盲目的に自分の感情に引き摺られてみるのもよからう。ただ腕組みしてぼんやり坐っていないために、憎むなり愛するなりしてみるのだ。そうすると、どんなに遅くも三日目ごろには、自分で自分を軽蔑するようになるだろう。つまり、みすみす自分で自分をだましたからである。その結果として残るのは、ただしやぼん玉と惰性ばかり。ああ、諸君、わたしがわれから賢者をもつて自認しているのは、生涯に一つ始めることも、完成することもできなかつたからである。なに、わたしがおしやべりだつてかま

わない、みんなと同じような毒にも薬にもならない厄介なおしやべりだって、少しもかまうことはない。しかし、もしあらゆる賢者の直接にして唯一の使命が饒舌にあるとしたら、語を変えていえば、故意に空虚な議論をこね廻すことだとしたら、なんともいたし方がないではないか。

6

おお、もしわたしの無為が単に怠惰のためであつたら、ああ、そのときわたしはどんなに自分を尊敬したかわからない。たとえ怠惰にもせよ、あるものを自己の内部に持つことができたという、その点に対する尊敬なのである。つまり、たとえ一つだけでも、自分で確信のできるような、積極的な性質を持つことになるではないか。あれはいったい何者だと人がたずねた時、なまけ者だと答える。自分に関してこんな評言を聞くのは、きつといい気持ちのものに相違ない、『なまけ者！』これは実に一個の肩書であり、使命であり、履歴であるのだ。冗談じゃない。まったくそのとおりなのだ。その時こそ、わたしは第一流のクラブの堂々たる会員で、絶えず自分自身を尊敬するだけが仕事なのだ。わたしはあ

る紳士を知っていたが、その人は赤葡萄酒ラフイットの通であることを、一生自慢にしていた。そして、これを押しも押されもしない人間的長所と心得、かつておのれに疑いをさし挟んだことがない。彼は穏やかな良心どころか、さながら勝ち誇れるがごとき良心をいだいて死んでいったが、それはまさに当を得たことといわねばならぬ。もしそれがわたしだったら、ちやんと生涯の方針を立てたに相違ない。わたしはなまけ者の大食らいではあるけれど、ありふれたものとはちがつて、日くつきのもの、たとえば、すべての美しくして高遠なるものに同情するなまけ者の大食らいなのである。諸君、如何です、これはお気に入りませんか？ わたしはもう前からこれを夢想していたのだ。この「美しくして高遠なるものは、四十年間おそろしくわたしのうしろ頭を抑えつけていた。しかし、それはわたしの生涯の四十年間だけれど、その時は、——おお、その時はすっかり話が別だったに相違ない！ わたしはさつそくもつと適当な活動を見いだしたことと思う。ほかでもない、すべて美しくして高遠なるものの健康のために、祝盃を挙げることである。わたしはあらゆる機会にしがみついて、まず初め自分の盃に一滴の涙をそそいだ後、すべての美しくして高遠なるもののために、それを飲み乾したに相違ない。その時は、この世のいっさいを美しくして高遠なるものに変えてしまい、思いつきり穢らわしい疑う余地のないやくぎなもの

中にも、美しくして高遠なるものを見つけだしたろう。わたしは濡れた海綿のように、涙っぽくなつてしまつたろうと思う。たとえば、一人の画家がゲー（ニコライ・ニコラエヴィチ。ロシアの画家、一八三一—一九四年）そのけの画を描いたとすれば、わたしはさつそく、そのゲーそのけの画を描いた画家の健康を祝して飲むだろう。なぜなら、すべての美しくして高遠なるものを愛するからである。一人の作家が『みんなそれぞれ好きなように』という本を書けば、わたしはいきなり、「だれのためかまわず」健康を祝して飲む。なぜなら、すべての「美しくして高遠なるもの」を愛するからだ。わたしはそれに対して、他人の尊敬を要求し、わたしに敬意を表さないものを懲らしめてやるつもりだ。平静に生きて莊重に死んで行く、——これは素敵ではないか、実に素敵なことではないか！

わたしはそのとき、思いつき大きな腹をつき出し、顎を三重になるほど太らせて、赤っ鼻をうんと脂ぎらせてやるのだ。すると、出あう人がみんなわたしを見て、『なるほど、これは有益な材だ！なるほど、これこそほんとに肯定的な現象だ！』というに違いない。諸君、諸君はなんといわれようとも、この否定的な時代にこうした評言をきくのは、実にこよなく愉快なことなのである。

7

しかし、それはみんな、おめでたき空想にすぎない。ああ、いったいだれが真つ先にあんなことをいい出したか、それを聞かしてくれ。人間が穢らわしい行為をするのは、ただ自己の真の利益を知らないからである、などといったのは、いったい何者だ？ この手合いの考え方によれば、人間というものはその知性を啓蒙してやって、本当のノーマルな利益に目を開いてやったら、すぐに穢らわしい行為をしなくなつて、善良潔白な人間になりすますに相違ない。なぜなら、啓蒙された知性を持ち、自分の本当の利益というものがわかつたら、善行のうちにおのれの利益を見いだすからだ。どんな人間だつて、みすみす自分の利益に反するような行為をするはずがないから、いわば必然的に善を行なうようになるわけだ、とこうなのである。ああ、なんとという子供らしい考え方だ！ ああ、まるで純潔無邪気な赤ん坊の夢だ！ 第一、開闢以来ただの一人でも、単におのれの利益のみのために行動した人間があるだろうか？ 人間というものは、みすみす自分の本当の利益を承知しながら、それを二の次にしてしまつて、だれにも何ものにも強制されているわけでもないのに、別な冒険の道へ突進してゆく。これを証明する無数の事実を、いったいどうし

たらしいというのだ！ 人間は指定された道を正直に踏んでゆくのがいやさに、それと違った骨の折れる馬鹿馬鹿しい道を、ほとんど暗闇で手探りしないばかりの苦勞を重ねながら、われから好んで強情に開拓して行くのだ。してみると、この強情とわがままは間違いなしに、どんな利益よりも気持ちがいいわけである……利益！ そもそも利益とはどんなものか？ 人間の利益ははたして那邊に存するか？ それを諸君は絶対正確に定義し得る自信を有していられるか？ ところで、もし万一人間の利益なるものが、自己に有利なことでなく、不利を欲することに帰着するとしたら、いったいどんなものだろう。もしそうとしたら、もしこの万一の場合ばかりがおこるものとしたら、すべての法則は木っぴ微塵に消し飛んでしまうわけだ。いったいこんな場合がちよくちよくあるものか。諸君はどう考えられますか？ 諸君は笑っていますね。笑いたまえ、諸君、しかし、ただ一つお返事が聞きたい。いったい人間の利益というものは、絶対正確に計量されているだろうか？ 今までのいかなる分類にも当てはまらなかつたのみならず、全体に当てはまり得ないような利益が、はたして存在しないだろうか？ 諸君、わたしの承知している限りでは、實際のところ、諸君は人間の利益台帳を編成するのに、統計表の数字や経済学的方式の平均数をとって来たのではないか。諸君の利益というのは、ほかでもない、幸福とか、富とか、自由

とか、安寧とか、まあ、そういうたようなものをさすので、したがって、こういったような利益の台帳を無視して、意識的にそれに逆行する人間は、諸君の考えによると、いや、もちろん、わたしの考え方によつたつて同じことだが、そんな人間は頑迷固陋な非開化主義者か、それとも真正銘の気ちがいということになるのだろう。そうではないか？ けれど、ここに不思議なことがある。こうした統計学者や、賢人や、人類愛を標榜する連中が、人間の利益を算出する際に、いつも一つの利益を見落としているのは、いったいどういふわけだろう？ 当然とり入れなければならぬはずなのに、それを勘定に入れようと思わない。ところが、そこで全体の帳尻がすつかりくるつてくるのだ。ちよつと考えれば、なにも大したことではないから、その利益を取り上げて、表に記入さえすればよさそうに思われるが、ただこの厄介な利益が、いかなる分類にも当てはまらないし、どの表にも入らないので、そこに難関が存するわけである。たとえば、わたしに一人の友だちがある……あつ、諸君、この男は諸君にとつても友人なのだ。それに、だれだつてこの男の友人でないものはない！ この先生は、仕事に取りかかるに際して、さつそく立て板に水を流すごとく滔々と、理性と真理の法則にしたがつて行動するには、どうしたらいいかということ、諸君に説明して聞かせるだろう。のみならず、本当のノーマルな人間の利益を、興

奮と熱情に満ちた調子で弁じ立てた上、自分の利益も徳行の真意義も解しない近眼者流の愚輩を、軽蔑したり非難したりするに相違ない。ところが、——やつと十五分くらいしか経たないうちに、突然これというきつかけもなく、ただいっさいの利益よりも強い力をもつた一種の内部衝動に駆られて、まるつきり別な突飛な芸当を演じるのだ。つまり、たつたいま自分がしゃべったこととは明瞭に正反対なことをやり出すのである。理性の法則にも、自分自身の利益にも、それから、——ひと口にいえば、あらゆるものに反したことをやり出すのである……断わっておくが、わたしの親友というのは集合名詞的存在だから、この男一人だけを責めるのは、ちよつと具合がわるい。諸君、つまりこのとこなのである。事実、ほとんどすべての人にとつて、最上の利益よりもまだ貴いような何ものかが存在していないだろうか？ それとも（論理を犯さないようにいい直せば）、——何より最も有益な利益が存在するだろうか。これは、さつきいった一般に見落とされている利益であつて、ほかのいかなる利益より最も大切であり、有利なのである。この利益のためには、人はもし必要とあれば、いっさいの法則に逆行することを辞さない。つまり、理性、名譽、安寧、幸福、——ひと口にいえば、こうしたすべての美しく有益なものに逆行しても、ただ自分にとつて最も貴重なこの根本的な、最も有利な利益を獲得することさえできればい

いのだ。

『ふん、それならやつぱり利益には違いないじゃないか！』と諸君はわたしの言葉をさえぎるだろう。しかし、失礼ながら、われわれはお互いにまだ十分話し合わなければならぬ。それに、問題は地口じゃない。この利益の特色は、いつさいの分類を破壊し、人類愛論者が人類の幸福のために設けた体系を、残らず叩き壊してしまうところにあるのだ。要するに、この利益はすべてのものの邪魔をするのだ。しかし、この利益の名を諸君に明かす前に、わたしは自分で自分の信用を傷つけるのもかまわず、大胆に宣言しておくが、こうしたさまざま美しい体系は、——人類に本当のノーマルな利益を説明して『これを獲得することに努力さえすれば、すぐさま、善良かつ高潔な人間になるぞ』といって聞かせよう。そのような理論は、目下のところ、わたしにいわせれば、ただのへぼ論理にすぎない！ さよう、へぼ論理なのである。実際、自己の利益などという体系によって、全人類を更生させようという理論を肯定するのは、それはわたしにいわせれば、ほとんど……たとえばバツクル（イギリスの文明史家、一八二一—六二年）の尻馬に乗って、人間は文明のおかげで温良化し、したがって残虐性を減じて、だんだん戦争などができなくなると、こんなことを肯定するのと同じではないか。論理を押しつめてゆけば、彼の所説はこんなことにな

るらしい。しかし、人間というものは、体系とか抽象的機能とかに執し過ぎて、ただ自分の論理を是認せんがためには、見れども見えず、聞けども聞こえずというようなやり方で、故意に真実を曲げることさえしかねなくなつてしまった。わたしがこの例を引くのは、それがあまりに明瞭な実例だからである。まあ、ひとつ自分の周囲を見廻してみたまえ。血潮は川をなして流れているばかりか、おまけにシャンパンかなんぞのように、さも愉快らしく噴き出しているのだ。これが諸君の讚美する十九世紀であり、バックルの生きていた時代であるのだ。まだナポレオン、——かの偉大なる現代人ナポレオンも控えているし、永遠の連邦国たる北アメリカという例もある。それから最後に、かの滑稽画めいたシュレスヴィツヒ・ホルシユタイン問題……いったい文明は、人間の内部のいかなる性質を和げるといふのだ？ 文明はただ感覚の多面性を発達させるばかり……それ以外の何ものもありやしない。この多面性の発達を突きつめてゆくと、人間はおそらく血の中に快感を発見するようになるだろう。いや、実際そのとおりになつたのだ。諸君は気がおつきになつたか知らないが、最も洗練された流血魔は、ほとんど一人の例外もなく、最高の文化に浴した連中ばかりで、こんなのに比べると、かの盛名を馳せているアツチラ汗^{カン}とか、スチエンカ・ラージンなどといったような手合は、まるで足もとにも追つつかない場合も珍しくな

い。ただこの連中がアツチラ汗やスチエンカ・ラージンほど、華々しく人目につかないのは、要するに、彼らがあまり頻繁にその辺をうろろうろしているの、見馴れ過ぎて当たり前のようになってしまったからである。少なくとも文明のおかげで、人間がいつそう血に飢えて来たといわれないうちでも、確かに昔より穢らわしい飢え方をして来た。昔は流血の中に正義を見出して良心のやましさを感じることもなしに、当然制裁すべき人間を殺戮したものだ。ところが、いまわれわれは流血を穢らわしいことと考えているくせに、やはりその穢らわしいことをやっている。しかも、昔よりもっと大仕掛けにやっているのだ。いったいどちらが悪いか？ それは諸君のご判断におまかせする。伝うるところによれば、クレオパトラは（ローマ史などから例を引くのをご容赦ねがいたい）好んで女奴隷たちの胸に金の針を突き刺し、彼らが叫び声を立てたり身をもがいたりするのに、快感を覚えたそうである。諸君はこれに対して、そんなことは比較的に見ると、野蛮時代のことだといわれるだろう。それに現代だって（やはり比較的に見れば野蛮時代だから）、いまでもやはり人の体に針を立ててもいる。そのうえ人間は、野蛮時代よりはつきり物を見ることを覚えたとはいいいながら、いまだに理性や学問の示すとおりに行動することを、いつこうに習い覚えていないのだ、とこんなふうにいわれるに相違ない。しかし、それにしても諸君は

心の中で、古い悪習がなくなつて、常識と科学が人間の本性を完全に再教育し、定式どおり指導するようになったら、必ず習い覚えるに違いないと確信をいだいておられるはずである。諸君の確信にしたがえば、そのときには人間がみずから好んで過誤を犯したり、自分の意志をノーマルな利益と、撞着させたりするようなことは、自然なくなるはずである。そればかりか、諸君にいわせれば、その時は科学そのものが人間を教導して（もつとも、わたしにいわせれば、それはあまり贅沢すぎる話だが）、人間はかつて自由意志も気まぐれも持たなかつたように、すっかりそういうものが影を潜めてしまい、人間自身はピアノの鍵盤か、オルゴールの釘みたいなものになつてしまう。それどころか、この世界には自然の法則というやつが厳存しているので、人間が何をしてみても、それはけつして自分の意欲によつて実行し得るのではなく、自然の法則によつておのずとできてゆく、とこういうことになるのだ。したがつて、ただこの自然律を発見しさえすれば、もう人間は自分の行為に責任をもたないですむから、生活が恐ろしく楽になつてしまう。その時はすべての人間の行為が、自然とこの法則によつて、数学的に分類され、まるで対数表かなんぞのようになつて、その数およそ十万八千にのぼり、年鑑の中にも編入される。それとも、もつと良い案としては、今の百科辞典式の公益を慮る出版物が現われて、人生のことをいつさ

い正確に計量し、明示してくれるので、もうこの世には行為もなければ、突発事件もないことになってしまうのだ。

その時こそ、——これはみんな諸君の言葉を代弁しているのだ、——数学的な正確さで計算された据え膳式の新しい経済関係が始まって、問題は瞬時にして、一切適切消滅してしまう。それというのも、すべての問題に対するレディメードの答えを、見つけることができるからである。その時には、水晶の宮殿が建立されるわけである。その時は、——まあ、ひと口にいえば、その時は鳳凰が舞い下りるわけである。むろん（これはすでにわたし自身の意見としていうのだが）、たとえば、そのとき恐ろしい倦怠がおそって来ないとは、いっこうに保証しかねるのである（なぜなら、すっかり何もかも表に計上されてしまったら、何もすることがないではないか）。その代わり、いっさいのものが非常に合理化されて来る。もちろん、退屈まぎれにどんなことを考えださないとも限らない！ まったく金の針を刺すのも退屈さましのためではないか。しかし、そんなことは別に大した問題ではない。ただ一ついけないのは（これもやはりわたしの言い分なのだが）、ひよつとしたら、その時は金の針を刺されて喜ぶようになるかもしれない、その点なのである。なにしろ人間は馬鹿なのだ。あきれ返るほど馬鹿なのだ。いや、けっして馬鹿ではないのだけ

れども、その代わりまたと類がないほど恩知らずなのである。だから、たとえば、何かこう恩知らずな、というより、退歩的な、人を小馬鹿にした顔つきの紳士が、出しぬけになんのきつかけもなく、見渡すかぎり分別で充満しているような未来の世界のただ中で、両手を腰に当て肘をはりながら、一同に向かつて、『どうだね、諸君、この分別くさい世界をひと思いに足で蹴飛ばして、木っば微塵にしてみました？ それもほかに目的があるわけではない、ただこの対数表を悪魔どもの餌食にしてみました、また自分の馬鹿げた意志通りに生活してみたいからだ！』などといい出したにしても、わたしはいつこうに驚かないつもりだ。実際、これくらいなら、大したことはないのだけれど、必ず模倣者が出てくるに違いない、それが困りものなのである。また人間はそういうふうにできているのだ。これというのも、みんな口にする価値さえないさそうに思われるほど、くだらない原因から起こるのだ。ほかでもない。人間はたとえ何者であろうとも、時と場所とを問わず、自分のしたいように振舞うのが好きなので、理知や利益の命ずるところにしたがうのは、けっして本望ではないからである。意欲するということは、自分自身の利益に反してもできるばかりか、時によると、断然そうしなければならぬことがある（これはもうわたしの思想なのだ）。自分自身の自由勝手な意欲、たとえどんなに突拍子もないことでもかまわな

い、とにかく自分自身の気まぐれ、時には気持ちがいめくほど興奮したものでかまわない、ともあれ自分自身の空想、——これこそすなわち、世人の見のがしている最も有利な利益なのであって、こればかりはどんな分類にも当てはまらず、またこいつのために、いっさいの体系や理論が、木っば微塵になつてしまふのである。あの賢人などという連中が、たれも彼も、人間には何かしら常軌になつた徳行的な意欲が必要だと決めこんでいるのは、いったいどこから割り出したのだろうか？　なんだつて彼らは判で押したように、人間には必ず合理的に有利な意欲が必要だなどという、変な妄想を起こしたのだろうか？　人間に必要なのは、ただ独立不羈の意欲だけであつて、この独立不羈なるものがどんなに高価にしようとも、どんな結果をもたらそうとも、かまつてはいられないのである。いや、まったくこの意欲というやつは、途方途轍もないしろ物なのだ……

8

『はつ、はつ、はつ。だつて、意欲なんていうものは、本当のところ存在しやしないんだ、もしお望みなら申しますがね！』と諸君は大声に笑いながら、こうさえぎるだろう。『科

学は今日でさえ人間をすっかり解剖し尽くしたので、今ではもう周知の事実になってしまったじゃないか。意欲とか、いわゆる自由意志とかいうものは、ただその……』

——諸君、待ちたまえ、わたし自身もそういうふうに切りだそうと思つていたところだ。正直なところ、わたしはぎよつとしたくらいなのだ。わたしはたった今、意欲なんてまったくえたいのしれないものに左右されるしる物だが、しかしそれも結局、好都合かもしれない、とこうどなろうと思つただけれど、ふと科学のことを思い出したので、それで……やめてしまった。ちょうどそこへ諸君が話したというわけだ。まったくそうじゃありませんか。ね、もし本当にいつかわれわれの意欲や気まぐれ全部の方式を発見してしまったら、つまり、それらのものが何に左右されるか、いったいどういう法則によつて発生するか、どんなふうに蔓延するか、またかくかくの場合にはいかなる方向に進んで行くか、といったような問題について、本当の数学的な方式を発見してしまったら、——その時はおそらく人間はすぐに意欲することをやめてしまうだろう、いや、確かにやめてしまうに相違ない。ね、表ひょうによつて意欲するなんて、何が面白いものかね。そればかりでない、そのとき人間はさつそく人間でなくなつて、手廻しオルガンの釘か、ないしそれに類したもものになつてしまうだろう。だって、希望も意志も欲望もないような人間は、手廻しオルガ

ンのシリンドーについている釘でなくって、いったいなんだというのだ？ 諸君はいったいどう思う、そんなことが起こり得るかどうか、ひとつ可能性を数え上げてみようじゃないか？

『ふむ……』と諸君は結論を下すだろう。『われわれの意欲は、われわれの利益に関する誤った見解のために、大部分は間違っているのだ。われわれが時として、とてつもない馬鹿げたことを望むのは、つまりわれわれが馬鹿なために、何か前もって仮定した利益を獲得する一番らかな道筋が、この馬鹿げた行為の中にあるように思うからだ。そこで、こういうことがすっかり説き明かされて、紙の上で計算されてしまったら（こういうことも大いにあり得る話だ。なぜとって、ある種の自然法則はけっして人間に知られる時がないなどと頭から信じ切ってしまうのは、いまましいことでもあり、無意味なことでもあるのだから）、その時はもちろん、いわゆる欲望なるものは存在しなくなるだろう。もしいつか意欲が理性とこっさり談合し完全に合意してしまったら、われわれはそのとき意欲しないで、理性の働きに従うだろう。というのは、たとえば、理性を完全に保ちながら無意義を欲するのは、みすみす理性に逆らって自分の害になることを望む結果になるので、そんなことをする馬鹿はないからである……まったくいつかそのうちには、いわゆる自由意

志の法則が発見されるだろうから、すべての意欲や理性判断が本当に細かく計上されるかもしれない。すると当然、冗談は抜きにして、本当に何か表のようなものができあがるかもしれない。すると、われわれは本当にこの表通りに意欲するようになる。たとえば、わたしがある人に赤んべをして見せたとする。そうすると、それはわたしが赤んべをしないでいられないからそうしたので、しかも必ずあるきまつた指を使わざるを得なかったのだというふうに、正確な計算の上で証明されるとすれば、その時はいったいどんな自由がわたしに残されることになるだろう。ことにわたしが学者で、どこかの学校の課程を終了していたら、なおさらおかしい話ではないか。実際そうなれば、自分の生涯を向こう三十年間くらい、きちんと割りだすことができようではないか。ひと口にいえば、もしそういうことが実現されるとすれば、われわれはもうなんにもすることがなくなってしまふ。どちらにしても、理解だけはしなければならぬのだ。それに全体として、われわれは倦むことなしに、こういうことをしじゅう腹のなかでくり返していなければならぬ。——これこの瞬間に、これこれの状況においては、自然がわれわれの意向など顧慮してくれないから、こつちで勝手に空想しているようなふうでなく、あるがままに自然を受け入れなければならぬ。で、われわれが本当にこうした表や、年鑑や、それから……例の蒸溜器レトルトさ

えも、目標として進んでゆくものとすれば、仕方がないから、レトルトさえも受け容れるべきである！ でなければ、レトルト自身諸君を煩わさないで、勝手に納まりこんでしまおうだろう……』

まさにそのとおり。だが、つまりこのところで、わたしにとってはコンマが入るのだ！ 諸君、わたしが調子に乗ってへぼ哲学を捏ね廻すのを、どうかゆるしてもらいたい。

なにしろ四十年間、地下生活をしてきた人間なのだ！ 少しばかり空想を逞しゅうさせてもらおう。さて、諸君、理性はけっこうなものに相違ない。それには議論の余地がないけれど、理性は要するにただ理性であって、単に人間の理知的能力を満足させるにすぎない。ところが、意欲は全生活の発現であって、理性も卑近な生理的作用をも含む人間全生活の発現なのだ。この発現におけるわれわれの生活は、かなりしばしばやくぎなものになることがあるけれど、それでもやはり生活であって、単なる平方根を求めするような仕事とは違う。早い話がわたしにしても、単に自分の理知的能力、すなわちわたしの生活能力の僅か二十分の一くらいのを満足させるためでなく、生活能力の全部を満足させるために生きたいと思うのは、あまりに自然すぎる話ではなからうか。理性はそもそも何を知っているというのだ？ 理性はただ今まで認識できたものを知っているにすぎない（ことによつ

たら、ある種のことからは永久に知り得ないかも知からない。これは悲しむべきことではあるが、それだって率直にいつてはならぬという法はあるまい？)。ところが、人間の自然性は、自分の内部に存するいつさいのものを挙げて、意識的に或いは無意識的に全一的の活動をしているのだから、見当違いもあるけれど、とにかく生活をしているわけだ。諸君、どうやら諸君は気の毒そうな目つきをして、わたしを見ていられるらしい。諸君はまたくり返してこういわれるだろう、——知性の発達した教養のある人間、つまりひと口にいえば、未来人としての資格を有する人間が、みすみす自分の不利益になることを望むわけがない、それは数学的に明瞭なことだ、と。重々ごもつとも、それはまったく数学的に明瞭である。しかし、くだいようだが、くり返していつておく。この世にはたった一つ、たった一つだけ人間がわざと意識して、自分の不ためになるような馬鹿げたことを、この上なしの馬鹿げたことさえ望む場合がある。というのは、賢明なことよりほか望んではならないという義務に縛られないために、この上もない馬鹿げたことさえのぞむ権利を持ちたいからである。諸君、まったくこの馬鹿げきつた行為、つまり、自分自身の勝手な気まぐれこそ、われわれのような人間にとつては、この地上に存するいかなるものにもまして、本当に尊い有益なものかもしれないのだ。ことにある場合などは、なおさらなのである。

部分的にいえば、かかる行為がわれわれに明瞭うたがいなき害毒をもたらし、利益にかんするわれわれの理性の健全なる結論に矛盾するような場合でさえ、それはいつさいの利益を束にしたよりもつと有利なものかもしれない——なぜなら、それはいづれにしても、われわれにとつて最も重要で貴重なもの、すなわちわれわれの人格と個性とを保持してくれるからである。なかにはこう主張するものがある、なるほど、これこそ人間にとつて何より尊いものだ。意欲というものは、その気にさえなれば、当然理性と合致することができる。もしそれを濫用しないで、適度に利用してゆけば、ことにしかりである。そうすれば、単に有益であるのみならず、時とすると、賞讃に値することさえある。しかし、意欲という言葉はきわめてしばしば、というより大ていの場合、強情と思われるほど完全に理性と撞着するものだ。そして……そして——そして、ごぞんじかしらないが、これも単に有益なばかりでなく、時によると、大いに賞讃に値するくらいである。諸君、かりに人間は馬鹿でないと仮定しよう（実際、人間のことをそんなふうにするのは、断じて不可能である。なぜなら、もし人間が馬鹿だとすれば、そのときはいったいだれが利口ものなのだ？　これだけの理由でも、明瞭なことではないか）。しかしたとえ馬鹿でないとしても、やはりあきれ返るほど恩知らずである！　類がないほど恩知らずである。わたしはこんなふう

さえ考える。人間というものの最も適切な定義は、二本足で歩く恩知らずの動物なり、ということになる。けれども、これではまだ全部をつくしているのではない、これはまだ人間の主なる欠点ではないのだ。人間の最も主なる欠点は、ほかでもない、永遠不変な不徳義である。人類史の大洪水時代からはじめて、シュレスヴィツヒ・ホルシュタイン事件にいたるまで、常に変わることもなき不徳義である。この不徳義から当然の結果として、無分別というものが出てくる。なぜと云って、無分別が不徳義の結果にほかならぬということ、とうの昔から知れ渡っている話だ。試みに、人類の歴史に一瞥を投じて見たまえ。いったい諸君はそこに何を見いだすか？ 莊嚴といわれるか？ 或いはじじつ莊嚴かもしれない。たとえば、ロードス島の巨像（多島海中の二島嶼に両足を踏んで立っていたといわれる伝説の像）だけでも、どれだけの価値があるかしかない。アナーエフスキイ氏（アフナーシイ・エヴドキーモヴィチ、文学史上で有名な文学狂、一八六六年没）がそれについて、ある者はそれを人工によつて造られたものだといひ、またある者は自然そのものの創造物のごとく主張すると述べているのは、故なきことではないのである。——それとも、あまり雑然とし過ぎるというか？ 或いはじじつ雑然としているかもしれない。あらゆる時代あらゆる国民の武官や文官の着用していた礼服を調べてみるだけでも、それだけでも

なかなか大したものである。もしそれに略服まで勘定に入れるとしたら、それこそ五里霧中に彷徨してしまい、どんな歴史家だつて、悲鳴をあげずにはいられないだろう。それとも、すべては単調なのだろうか？ いや、おそらく単調でもあるだろう。闘争、闘争。人は今でも戦っている、昔も戦っていた。今後も戦うだろう、——ねえ、これではもうあんまり単調すぎるではないか。要するに、世界歴史に関しては、どんなことでもいえるのだ。混乱し切った頭脳にうかんでくるどんなでたらめの想像でも、これに当てはめることができるくらいだ。けれど、ただ一ついえないことがある、——それは分別に富んでいるということだ。そんなことをいおうものなら、最初のひと言で舌が纏れてしまうだろう。それどころか、こんな妙なことさえしよつちゆう持ちあがっているのである、——この世の中には非常に徳操の高い、分別に満ちた人たちや、えらい賢人や人類愛論者などが、ひっきりなしに現われてくる。彼らはできるだけ徳行と賢慮とに満ちた行動を取つて、いわば自分の徳によつて隣人のために道を照らすことを、生涯の目的としている。それというのも、つまり、この人生は、實際徳行と賢慮とによつて暮らし得るものだということを、世人に示さんがためなのである。ところが、どうだろう？ 周知のごとく、こうした人類愛の先生たちは、大ていおそかれ早かれ生涯の終わりになつて、何か変てこな逸話を製造し、自

分自身に裏切るような結果におわつてしまふ。しかも、その逸話たるや時とすると不作法
この上ないものさえあるのだ。そこで、今度は諸君におたずねするが、こういう奇妙な性
質を賦与された動物としての人間から、いったい何を期待することができよう？ まあ、
試みに、ありとあらゆる地上の幸福を人間に浴びせかけ、幸福というものの中に頭ごとず
んぶり沈めてしまつて、その幸福の表面に、まるで水面みのもにうかぶ泡のようなものが、ぶく
ぶくと浮きあがるような目にあわして見たまえ、また人間に十二分の経済的満足を与えて、
ただぐうぐう寝たり、生姜餅を食つたり、世界歴史の永續を心配したりするよりほかに、
仕事がないような境遇に置いて見たまえ、——それでもやつは、その人間先生は、ただ恩
知らずな気持ちのために、穢らわしい天邪鬼あまのじやくのために厚顔無恥なことをしでかすに相違
ない。生姜餅の幸福さえも棒にふる覚悟で、わざわざ身の破滅になるような、思い切つて
非経済的な、馬鹿げたナンセンスを欲求するに相違ない。それもただ、この道理づくめの
分別くさい世界に、破滅と幻想の分子を混和させたいというだけの話である。まったくこ
うした突拍子もない空想や、俗悪きわまる馬鹿げた欲望を、どこまでも失うまいと望むの
だ。それもただただ人間はなんといいつても人間であつて、ピアノの鍵盤ではないというこ
とを、自分で自分に、確認させたいがためにすぎない。ピアノの鍵盤を叩くものは、自然

の法則そのものには違いないが、こいつがあまり調子にのって弾きまくると、もう表を無視しては何一つ意欲することができなくなるおそれがある、そのことを自分に警告したいのだ（まるでそんなことがこの上もない必須事か何かのようにさ）。そうだ、そればかりではない、人間はたとえ本当にピアノの鍵盤にすぎないとして、それを自然科学で数学的に証明された場合でも、それでもなかなか目がさめないで、かえってわざと何か変なことをしでかすに相違ない。要するに、単なる忘恩の気持ちから自己を主張したいというだけの目的なのだ。もし適当の手段がない場合には、破壊と混沌とを考えだし、さまざまな苦痛を考案し、それでもとにかく自我を主張し通すのだ！ そのとき人間は全世界に呪詛を放つだろう。呪詛というやつは、ただ人間のみに与えられた能力なので（これこそ主として、人間を他の動物から区別する特権なのだ）、おそらくただの呪い一つだけで、自分の目的を達するだろう。すなわち、自分が人間であって、ピアノの鍵盤でないということを、本当に確信するだろう！ 諸君はことによつたら、そんなものはみんな、混沌も、暗黒も、呪詛も、すべて表によつて計算できるから、この予備的計算の可能ということだけでも、いっさいを阻止することができ、結局は理性の勝利に終わるだろう、などといわれるかもしれないが、——そうすれば、人間はわざと気がいいになって、理性をもたないようにし

てでも、自分の主張を貫徹するだろう！ わたしはそれを信ずる。わたしはそれを保証する。なぜと云って、人間は絶えず自分が人間であつて、単なる釘でないことを証明したがるもので、人間の仕事は実際のところ、ただそのこと一つに尽きているからである！ たとえ自分が痛い目をして、とにかく証明しようとしたのだ。よしんば穴居生活などという形式によつても、それを証明しようとしたのだ。こうなつてみると、そんな表は存在しない。意欲はまだ今のところえたいの知れないものに左右されていると、度し難い主張を試してみたくなるのも、一概に無理とはいえない。

すると、諸君はこう叫ぶだろう（もし、諸君がわたしなどに声をかける値打ちがあると認めるならば）、だれもきみの意志を奪おうというものはありやしない、ただなんとかしてきみの意志がみずから進んで、きみのノーマルな利益や、自然の法則や、算術などと合致するように、うまく仕組みたいと心配しているだけだ、と。

——えいつ、諸君、何をいうのだ、問題が表や算術なんてところまで行つてしまつて、ただ二二が四だけ幅を利かすようになったら、もう自分の意志も何もないじゃないか？ 二の二乗は、わたしの意志なんかなくなつて、やっぱり四になるんだからな。自分の意志となると、そんなものじゃありやしないんだ！

9

諸君、わたしはもちろん、冗談をいつているのだ。これが悪い洒落だということとは、自分でも承知している。けれど、それかといって、何もかも冗談にしてしまうわけにはゆかない。ことによつたら、わたしは齒を喰いしぼりながら、冗談をいつているのかもしれない。諸君、わたしは多くの問題に苦しんでいる。どうかそれを解決してもらいたい。早い話が、現に諸君は人間を旧習から解放して、科学と常識の要求通りに人間の意志を強制しようとしている。しかし、人間をそんなふうに変造できるといっただけでなく、またそれが必要だなどということ、いつたい諸君はどうして承知しておられるのか？ 人間の意欲はどうしても匡正せねばならないなどと、諸君はどこから割りだしたのか？ 手っ取り早くいえば、こうした匡正がじつさい人間に利益をもたらすなんてことを、どうして諸君は心得ていられるのだ？ また、こうなつたら何もかもいつてしまふが、理性や数学の推論によつて保証された本当のノーマルな利益に逆行しないということが、いつも人間にとつて真に有利であり、かつ全人類の服膺ふくようすべき法則であるなどと、どうして諸君はそれほ

ど確実に信じ切つていられるのか？ そんなことはまだ今のところ、単に諸君の仮定にすぎないではないか。かりにそれが論理の法則であるとしても、けっして人類の法則ではないかもしれない。諸君、諸君はおそらくわたしを気がいだと思つていられるだろう？ ここに一言留保をさせていただきたい。わたしは諸君のご意見に同意しよう。人間というものとは主として創造的動物であつて、意識的に目的にむかつて突進し、土木技師の事業に従うべき運命を担つている。すなわち、よしや行く手はどこであらうとも、絶えず永久にこのれの道を切り拓いてゆくのだ。けれども、つまりこの道を切り拓くべき運命を担つているがために、人間はどうかすると、ちよつと脇道へそれたくなるらしい。それに、直情徑行的な活動家はかなり愚鈍なものだが、その彼らさえ時々、自分の道がほとんど常に出たらめな方向をさしているということを、思ひつかべるのである。肝腎な問題は、その道がどこをさしているかではなくて、とにかくただつづいていさえすればいいので、模範的な子供は土木技師的な仕事を蔑視しないで、恐るべき怠惰に身をまかせないことが必要である。この怠惰というやつは、周知のごとく、あらゆる悪徳の母なのである。人間は創造を愛し、行路の開拓を好むもので、それは議論の余地がない。しかし、また人間が破壊と混沌をも前後を忘れるほど熱愛するのは、いったいどうしたわけだろう？ これにひとつ

答えてもらいたいものだ！ けれど、このことについては、わたし自身もとくに一言したいと思う。人間がそれほど破壊と混沌とを愛するのは（それは今さら論ずるまでもないことで、人間はどうかすると、夢中になるほど破壊を愛する。それはまさにそのとおりなのだ）、ほかでもない、つまり目的を達して、自分の造っている建物を完成するのを、本能的に恐れているからではあるまいか？ 諸君はごぞんじないかもしれないが、人間は自分の建物をただ遠くのほうから愛するだけで、けっして近く寄って愛玩するものではないらしい。人間はそれを建設することのみ愛を持って、その中に住むことを好まないのかもしれない、建ててしまうと、後はその建物を *aux animaux domestiques*（家畜どもに）たとえば蟻とか、羊とか、そういったようなものにまかせてしまいたいらしい、現に蟻などは、ぜんぜん変わった好みをもっている、彼らはこれに類した一つの驚くべき建物、永久に壊れることのない建物をもっている。——つまり蟻塚をさすのだ。

この尊敬すべき蟻どもは、まず蟻塚からことを始めたので、またきつと蟻塚で終末をつけるに相違ない。それは彼らの堅忍不拔の精神と確実性とを証明することで、非常な名譽といわなければならない。けれど、人間というやつは軽薄で下品な動物だから、ちようど将棋さしと同じように、ただ目的に達する径路を愛するのみで、目的そのものはどうでも

いいらしい。実際、全人類が精進している地上の目的なるものは、あげてことごとくこの目的獲得の絶えざるプロセス、すなわち生活そのものの中に含まれているのであって、目的それ自身のなかには存在しないのかもしれない（それはだれしも保証のできないことである）。目的なるものはいうまでもなく二二が四で、公式以外の何ものでもない。ところが、諸君、二二が四はもはや生活ではなく、死の始まりにすぎないのである。少なくとも、人間はいつも妙にこの二二が四を恐れていたが、わたしは今でも恐れている。よしんば人間はこの二二が四の発見を唯一の仕事にして、この探求のために大洋を泳ぎ渡ったり、生命を犠牲にしているにもせよ、本当にさがし当てること、発見することは、——誓っているが、なんとなしに怖いのだ。つまり、発見してしまえば、もうそのときは何もさがすものがなくなる、と直感するからである。労働者なら仕事を終えると、少なくとも金をもらって、居酒屋へ出かけて行き、そのあとで警察のご厄介になる、——これでまあ、一週間ぐらいの暇潰しにはなろうというものだ。ところが、人間はいつたどこへ行つたらいいのだろうか？ 少なくとも、そういったふうの目的を達するたびに、そのつどなにか具合の悪いところが感じられる。人間は到達を好むには相違ないけれども、しかし、完全に到達してしまうのは考えものなので、これはむろん、恐ろしく滑稽なことに相違ない。手っ取

り早くいえば、人間は滑稽にできあがっているのだ。これにはどうやら地口が交っているらしい。しかし、二二が四というやつは、なんといつても、実に我慢のできないしろ物である。二二が四、これなどはわたしにいわせると、ただ人を馬鹿にしたしろ物なのだ。二二が四は、おつちよこちよいのような恰好をして、両手を腰にあてたまま、人の行く手に立ちふさがりながら、ぺつと唾を吐いているという感じだ。二二が四が立派なものだということには、わたしも異存がないけれど、しかしいつそ何もかも賞めることにするならば、二二が五も時によると、愛嬌のあるしろ物なのだ。

いったい諸君はどういうわけでそれほど堅く、しかも勝ち誇ったような態度で、ただノーマルな積極性をもったもの、——ひと口にいえば、——ただ安寧無事というものだけが、人間にとつて有利だなどと、信じ切つて疑わないのだろうか？ いったい理性は、断じて利害の判別を誤らないだろうか？ じつさい人間が愛しているのは、安寧無事ばかりではないかもしれないのだ。人間は苦痛というものも、やはり同じくらいに愛しているのではあるまいか？ ことによつたら、苦痛も人間にとつては、安寧無事と同じくらいに有利なものではあるまいか、人間はどうかすると夢中になるくらい、恐ろしく苦痛を愛するものだ。それは間ちがいのない事実である。この場合、今さら世界歴史など調べるまでもない。も

し諸君が人間で、いくらかでも生活したことがあるなら、自分の胸に聞いてみるがいい。わたしの意見はどうかといえ、ただ安寧無事のみを愛するのは、何となく不しつけにさえ思われる。善いにせよ悪いにせよ、何かぶち壊すということは、時によると、やはり愉快千万なものである。わたしはこの場合、なにも特別に苦痛の肩をもつでもなければ、安寧無事の弁護をするわけでもない。わたしが主張するのは……自分の気まぐれというものと、その気まぐれがいつでも、必要な時に、間違ひなく保証されているということである。苦痛というやつは、たとえば、ボードビルなどにはご採用にならない。それはわたしも承知している。水晶宮の中となると、そんなものはてんで考えることもできない。苦痛は疑惑であり、否定であるが、疑惑の余地があるようなものだったら、それはもはや水晶宮でもなんでもないのだ。ところで、わたしは確信しているが、人間は本当の苦痛、いい換えれば、破壊と混沌とをけつして拒もうとしないものである。苦痛——これこそ実に自意識の唯一の原因なのだ。わたしはこの手配の初めで、自意識は人間にとつて最大不幸であると、ご吹聴申し上げたけれども、人間がその不幸を愛して、いかなる満足にも見替えようとしないので、わたしはちゃんと知っている。自意識というものは、たとえば、二二が四よりも無限に優れているのだ。二二が四のあとでは、もういうまでもなく、何一つ

ることがなくなるばかりか、知ることさえ尽きてしまうのだ。その時になってなし得るすべてのことは、ただ自分の五感を塞いで、瞑想に沈むだけのことだろう。ところで、自意識を保つていれば、結果からいえば同じになつてしまふけれど、つまり、やはり何もすることがなくなつてしまふけれど、少なくとも、時々自分で自分をぶん撲ることはできる。これはなんととっても、多少気付けにはなるのである。退嬰的ではあるけれど、それだつて何も無いよりはましに違いない。

10

諸君は永遠に不壊ふえの水晶宮を信じていられる。つまり、内証で舌を出して見せたり、袖のかげでそつと赤んべをしたり、そんな真似のできない建物を信じていられる。ところで、わたしはそれが水晶できていて、永久に不壊のものであり、おまけに内証で舌を出して見せることもできないので、そのためにこの建物を恐れるのかもしれない。

そこで、こういうことを考えてみてもらいたい。もし宮殿の代わりに鶏小屋があつて、そこへ雨が降つてきたとしたら、わたしはおそらく体を濡らさないために、鶏小屋の中へ

這いこんだろう。しかし、それでも鶏小屋を宮殿などとは考えはしない。というのは、雨宿りをさしてくれたことに對する感謝のためである。諸君は一笑に付してしまつて、この場合、鶏小屋も宮殿も同じことだ、とこんなふうにさえいわれるだろう。すると、わたしはこう答える、さよう、もしただ濡れないためのみに、生きなければならぬとしたら。

けれど、もしわたしが、人間はただそれのみのために生きてゐるのではない、いつそ生きるくらいなら、宮殿で暮らすのが本當だ、などという妄想を起こしたとすれば、いったいどうしたものだろう。それはわたしの意欲なのだ。それはわたしの願望なのだ。諸君はわたしの願望を取り替へた時に、はじめてこの考えをわたしの頭のなかから削り取ることができるのだ。さあ、取り替へてもらおう、代わりのものでわたしの目を眩ましてもらおう、別の理想を当てがつてもらおう。が、今のところ、わたしは鶏小屋を宮殿に受け取りなんかしやしない。たとえ水晶宮が空中樓閣で、自然の法則から見てそんなものはあり得ないとしてもかまわない。そんなものはわたし自身の愚かさのために、現代の古くさい非合理的な習慣の結果、わたしが自分で考えだしたものであつてもかまわない。しかし、そんなものがあるはずはなくなつて、わたしにはなんの関係もないことだ。よしんばそれがわたしの願望の中に存在してゐるとしても、ないしはより正確にいつて、わたしの願望が

存在する間だけ存在しているにしても、どうせ同じようなものではないか？ 諸君はまた一笑に付してしまわれることだろう。どうか遠慮なく笑ってもらおう。わたしはあらゆる嘲笑を甘受するが、それにしても飯が食いたいときに、わたしは満腹ですなどとはいわげにいかない。とにかく、わたしにはわかつている。わたしは単に自然の法則によつて、実際に存在しているからというだけの理由で、いい加減な妥協や、無限の循環零の上に胡坐をかいてはいられないのだ。わたしはむこう千年間の契約で、貧乏な間借人に貸す部屋をたくさん仕切つて、万一の場合のためには、歯科医ヴァーゲンハイムの看板をかけた、素晴らしく大きなビルディングを持つて来られても、それを自分の欲望に与えられた月桂冠としては、受け取らない。どうかわたしの欲望を殲滅し、わたしの理想を抹殺した上で、何かより以上すぐれたものを示してもらいたい。そうすれば、わたしは諸君の後からついて行くだろう。諸君はことによつたら、そんなことにかかわり合うだけの値打ちはない、といわれるかもしれない。けれど、そうなればわたしだって、同じ言い草で答えることもできるのだ。われわれは真面目に考察しているのに、諸君は「お前のいうことなどに注意を向ける価値がない」という態度をとられる。それならわたしもお慈悲など願ひはしないつもりだ。わたしにも自分の地下の世界があるのだから。

とにかく、わたしも今のところまだ生きていて、自分の欲望を働かしている。——だから、もしわたしがそんな宏壮な建築を手伝うために、たとえ煉瓦一つでも運ぶようなことをしたら、その手が腐つてもいいくらいに思っている！ わたしがさきほど自分でこの水晶宮を否定する時に、唯一の理由として、舌を出してからかうわけにゆかない、ということとをあげたが、どうかその点にあまりこだわらないでほしい。わたしがああいっただのは、舌を出すのが好きでたまらないからではさらさらしない。ただ舌を出さないですむような建物が、今まで諸君の造ったあらゆる建物の中に、一つとして見たらないので、そのことに腹を立てただけかもしれない。それどころか、もし二度と舌などだす気にはならないように、この世の中がうまくいったら、わたしは感謝の念だけでも、自分の舌をすっかり切り取らせてもいいほどに思っている。そんなふうにはうまくゆかないから、せいぜい間借人向きのアパートで満足しなければならぬなんて、そんなことがわたしになんのかかわりがあるというのだ。いったいなぜわたしはこんな希望をもつように創られたのだろう？ まさかわたし自身を構成しているものが、ただのごまかしにすぎないという結論に到着するため、ただそのためのみに、こんなふうに創られたわけでもあるまい。まさかそれが目的の全部ではあるまい。わたしはそんなことなど信じない。

もつとも、こういうことも考えている。わたしの確信によれば、われわれ地下の住人は、ちやんと轡をはめて、抑えておく必要がある。彼らは四十年でも無言の行をすることがでるけれど、もし万一世の中へ出ようものなら、まるで堰が切れたように、それこそしゃべつて、しゃべつて、しゃべりまくるのだ……

二

諸君、とどのつまり、なんにもしないのが一番いいのだ！ 瞑想的惰性が一番いいのだ！ だから地下の世界万歳というわけである。わたしは癩癩が立ってじりじりするほど、ノーマルな人間を羨むとはいったけれど、しかし、わたしが現に見ているような彼らの状態そのままでは、その仲間入りをしたくない（ただし、それでも相変わらず羨みはするけれど。いや、いや、地下の世界のほうがいずれにしても有利だ！）。そこでは少なくとも……ちよつ！ ここでもまたわたしは出たらめをいつている！ たしかに出たらめだ。なぜなら、けつして地下生活が一番いいのではなくて、わたしの渴望しているのは何かしら別なもの、まるつきり別なものだということを、二二が四というほどはつきり知ってい

るからだ。ただそれがどうしても発見できないのである。地下などくそ喰らえだ！

それからまだ、こんなこともけつこうだと思ふ。ほかでもないが、わたしがいま書いたことの中で、何か一つでも自分で信じてきたことができたなら、どんなにいいかしれない。諸君、誓つていうが、わたしはいま書き散らしたことを、ひと言も、それこそただのひと言も信じてはいないのだ！ というより、信じているのかもしれないけれど、どういうわけか、自分ではずうずうしいほらを吹いているような感じがする、そんな気がしてしようがないのだ。

『では、なんのためにこんなことを書いたのだ？』と諸君はこういうだろう。

『なに、わたしは諸君をもの四十年も、いつさい仕事をさせないで閉じこめた上、四十年の期限が切れた時、諸君がどういふ結果に到達されたか、それを伺いに地下へお訪ねしてみたいと思ふのです。いったい四十年も人間をたった一人で、仕事もさせずにうちやつておいていいものでしょうか？』

『それは恥ずかしいことじゃないかね、それは卑怯なことではないかね！』おそらく諸君は蔑むさげすように頭を振りながら、わたしにむかつてこういうだろう。『きみは生活に渴しているものだから、自分で人生の諸問題を混乱した論理で解決しようとしているのだ、きみ

の突拍子もない言い草は、いかにも小うるさくって生意気千万だけれども、同時に、きみは実に戦々兢兢としているじゃないか！ きみはばかなことばかりいって、それで満足しているのだ。きみは不敵なことを口にしながら、しかも、のべつそれをびくびくして、言いわげばかり、しているではないか。きみはなんにも怖くないと広言を切っているくせに、それと同時に、われわれの歓心を買おうとしている。きみは切齒扼腕してると主張しているが、同時にわれわれを笑わすために、くだらぬ駄洒落を振りまわしている。きみは自分の洒落が、洒落になつていないのを承知しながら、しかも見受けたところ、その文学的価値に大満悦のていだ。きみは本当に苦しんだことがあるかもしれないが、自分の苦痛をいささかも尊敬していないのだ。きみという人には真実はあるけれども、処女性がない。きみは思い切り小っぽけな虚栄心に駆られて、自分の真実を見せびらかしに市場へ持ちだして、恥さらしをしている……きみは本当に何かいいたいくせに、危惧の念のために最後の言葉をかくしているのだ。それというのも、きみはそれをいい切るだけの決断力がなくて、ただ臆病なずうずうしさしか、持ち合わせていないからだ。きみは自意識を自慢しているが、本当はただ、狐疑逡巡しているだけだ。なぜって、きみの内部では理性こそ働いているものの、心は淫蕩に曇らされているからだ。純潔な心がなかったら、完全な正しい意識

もありはしない。きみはなんといい煩い男だろう。きみは実に押売りばかりしたがって、芝居じみた真似をしたがる人間だ！ 虚偽、虚偽、ことごとく虚偽だ！』

もちろん、こういった諸君の言葉は、みんなわたしがいま自分で創作したのだ。これもやはり地下生活から生じたのである。わたしはそこで四十年間ぶっとおしに、こういったふうな諸君の言葉を、ものの隙間からこっそり盗み聞きしていたのだ。わたしはそれを自分で考えだしたのだ。事実、こんなことばかりが頭にうかんでくるのだから、自然そらで暗記されて、文学的な形式をとるようになったのも、あながち不思議ではないのだ……

しかし、はたして諸君は、わたしがこれをすっかり印刷して、おまけにそれを諸君に読ませるつもりなどと、そんな想像をするほど、軽はずみな人たちだろうか？ それからもう一つわたしには疑問がある、本当にわたしはなんだってあなた方を『諸君』などと呼ぶのだろうか？ またなんだって本当の読者にでもむかうような態度を、あなた方に対してとっているのだろうか？ わたしがこれから叙述にかかろうと思っっているような告白は、印刷すべきものでもなければ、他人に読ますべきでもない、少なくとも、わたしはそれだけの確固たる意志を持っていない、また持たなければならんとも考えていないのだ。しかし、実のところ、わたしの頭に一つの空想がうかんできたので、是が非でもそれを実現したい

と思う。それはこういうわけなのである。

どんな人の追憶のなかにも、少数の親友を除いては、だれにもうち明けたくないようなことがあるものだ。それどころか、親友にもうち明けることができないで、ただ自分自身にだけ、しかもごく内緒に告白すればするような、そんなことすらもあるのだ。ところが、さらに一歩すすめて、自分自身にさえうち明けるのを、恐れるようなことさえある。そういうことは、どんな身分のいいちゃんとした人でも、いい加減たくさん殖えてゆくものである。というより、むしろちゃんとした人であればあるほど、ますますそういうことが多くなるのだ。少なくともわたし自身なども、過去に起こったある種の出来事を追想してみようと決心したのは、つい近頃のことだ、それすら今日にいたるまで一種の不安さえ感じながら、いつも避けるようにばかりしていたのだ。ところが、単に追想するばかりでなく、手記に残そうとさえ決心した今となっては、はたして自分自身に対して完全に赤裸々な態度をとり、いつさいの真実を恐れないということができるかどうか、それを実験してみたいのである。ついでにいつておくが、ハイネの断言するところによると、正確な自伝というものはあり得ない、人間は自分自身のこととなると、間違ひなく嘘をつくものだそうである。彼にいわせれば、たとえば、ルソーなどもその懺悔録の中で、いつも必ず自己中傷

をやっている、虚栄心のためにわざと嘘をついているのだ。わたしはハイネの説を正しいと信じる。わたしにはよくわかつているが、時によると、ただただ虚栄心のためだけに、大それた犯罪を捏造して、それを自分の仕事にすることもある。そして、これがいかなる種類の虚栄心であるかも、十分に了解ができるのである。しかし、ハイネは公衆の面前で懺悔する人間のことを論じたのだが、わたしはただ自分自身のためのみに書いているのだ。そこで、きつぱり断わっておくが、わたしは読者をまえにおいたような書き方をしているけれども、それはただ見てくれだけの話で、つまり、そうしたほうが書きいいからである。それは形式、ほんのつまらぬ形式だけである。わたしにはけっして読者などできっこないのだ。このことはもうちゃんと声明しておいた……

わたしはこの手記の体裁については、いっさい何ものにも拘束されたくない。順序とか体系とかいうものも取り入れない。ただ思い出すままを書きつけてゆくのだ。

ところで、諸君はわたしの言葉尻をつかまえて、たとえば、『もしきみが本当に読者を念頭においていないとすれば、順序も体系も取り入れないとか、ただ思い出すままを書き留めるのだとか、そういったような条件を自分一人で、おまけに紙のうえで取り決めるのは、いったいなんのためだろう？ どういうつもりできみはそんな説明をするのだ？ ど

ういうわけでそんな言いわけをするのだ?』と、尋ねるかもしれない。

『さあ、それはどうも』とわたしは答えるだろう。

もつとも、これには込み入った心理があるのだ。ことによつたら、それは単にわたしが臆病者だということかもしれない。が、またことによつたら、わたしのこの手記をしたためる時、できるだけ作法を守るために、わざと自分の眼前に公衆を想像しているのかもしれない。とにかく、原因は無数に存在し得るのだ。

しかし、まだこういうことがある。いったい私はなんのために、どういう目的で書くとしているのだろうか? もし公衆のためでないとしたら、何もわざわざ紙に移したりしないで、心の中ですつかり思い起こすだけでさし支えないではないか?

それはなるほど、そのとおりだが、しかし紙に書く、なんだかずつと荘重になつてくるようだ。そうすると、なにかもつともらしく見えるし、自己批判も行き届くだろうし、うまい言葉もおのずと出て来ようというものだ。そればかりでなく、わたしは手記を書いてゆくとということによつて、じつさい気持ちが軽くなつてゆくのである。早い話が、現に今日もある古い追憶が、かくべつわたしの心を押しつけるのだ。それはもう二、三日前からはずきりと記憶によみがえつて、それ以来まるでうるさい音楽の節のように、こびりつ

いて離れようとしな。ところが、こいつは振り離してしまわなければならないのだ。わたしには、こういった追憶が何百となくあるのだが、どうかすると、そのたくさんな中から、何か一つひよっこり浮かび出して、わたしの心を圧迫するのだ。わたしはどういうわけか、それを紙に書きつけたら、自然と離れてゆくものだと思っている。だから、それを試してみてもよいではないか？

最後の理由として、わたしは退屈なのだ。わたしはいつもなんにもしていない。ところが、物を書くということは、本当に仕事らしく感じられる。仕事をしていると、人間は善良で正直になるとい。まあ、少なくとも、これは一つの好機会だ。

いま雪が降っている、べたべたに濡れた、黄いろい、濁ったようなやつだ。昨日もやはり降ったし、二、三日前もやつぱり降った。わたしはこのべた雪の連想から、いまわたしの頭にこびりついて離れない例の逸話を思い出したらしい。そこで、これはべた雪の連想からできた物語としておけ。

第二　べた雪の連想から

わたしが迷いの闇のなかから

火のごとき信念にみちた言葉で

その淪落の魂をひきだしたとき

お前は深い悩みにみちて

双の手を揉みしだきつつ

身を囲んでいる悪趣を呪った

そうして追憶の鞭をふるって

忘れやすき良心を罰しつつ

お前は過ぎこし方の身の上を

残らずわたしに語ってくれた

と、不意に両手で顔をおおって

恥と恐れにやるせなく

お前はわつと泣きだした

悩みもだえ身をふるわし……

云々 云々 云々

N・A・ネクラソーソフの長詩から

1

そのころわたしはやつと二十四だった。わたしの生活はもうその時分から、陰気くさい、だらしないもので、野生に近いくらい孤独だった。わたしはだれとも交際しないで、話をするのさえ避けるようにしながら、しだいしだいに、自分の片隅の世界へ閉じこもっていった。勤務先の役所でも、だれの顔も見ないように努めていたほどである。わたしははつきり気がついてしたが、同僚たちはわたしを変人扱いにしていたばかりでなく、さもい

とわしそうな目つきでわたしを眺めていたらしい、——どうもそんな気がして仕方がなかった。よくわたしの頭にこんな考えがうかんだものである。自分が人からいとわしそうな目つきで見られているらしいなんて邪推が、なぜわたしだけを例外にして、だれの頭にも浮かばないのだろうか？ 役所の同僚の一人は、見るも気持ちが悪いくらいな、ひどいあばた面で、おまけに強盗のような人相をしていた。もしわたしがそんな不しつけ千万な顔をしていたら、おそらくだれの顔も見上げる勇氣があるまい、と思われるほどであった。もう一人の同僚は、傍へ寄るとぷんといやな臭いがあるほど、さんざんに着古した制服を着ていた。ところが、この先生方はどちらも平気なもので、服のことも、顔のことも、また何か精神的な意味でも、いっこうにきまりの悪そうな様子を見せなかった。彼らほども、自分が人からいとわしそうな目つきで見られているとは、夢にも考えなかった。またそんな考えを起こしたにもせよ、彼らにとっては風馬牛であった。ただ上官から睨まれさえしなければいいのだ。いまになってみれば、もはや明々白々の事実なのだが、わたし自身、方図のしれないほど虚栄心が強く、したがって自分自身に対する要求が厳格なために、ほとんど嫌悪の念に近いくらい気持ちがじめた不満をいだきながら、自分自身を眺めることも珍しくなかった。そのために、わたしは心ひそかに自分の観察眼を、すべての

他人に当てはめようとした。たとえば、わたしは自分の顔を憎んで、それをいまわしく感じたばかりか、そこには何となく下劣な表情があるのではないかと、そんなひがみさえ起こしたほどである。だから、いつも役所へ出勤する時には、人がわたしの下劣さを感じないように、できるだけ独立不羈の態度をとり、顔にはできるだけ上品な表情をうかべようと、一生懸命に苦心したものである。『顔は美しくなくなつてかまわない』とわたしは考えた、『その代わり上品で、表情に富んでおればいい、それに第一、飛び離れて賢そうであればならない』けれど、こうした完成の美は、とうてい自分の顔で表わすことができないのを、わたしは確実に知っていたので、そのために苦しい思いをした。しかし、何より恐ろしいことには、わたしは自分の顔を間違いなく馬鹿つ面と感じたのである。でも、自分は賢いということになれば、それでわたしは完全に諦めたはずである。それどころか、下劣な表情といわれても、納得したかもしれない。ただそれといっしょに、わたしの顔をすばらしく賢いものと見てもらおう、という条件つきである。

むろん、わたしは役所の同僚たちを、一人残らずことごとく憎みかつ軽蔑していた。けれど同時に、彼らを恐れているような具合でもあった。どうかすると出しぬけに、わたしは彼らを自分よりえらいもののように考えることもあった。当時は他人を軽蔑したり、自

分よりえらいもの扱いにする気持ちの変化が、妙に唐突に起こってくるのであった。頭腦の發達した、ちゃんとした人間は、自分自身に対して無限に厳格な要求をいだし、時とすると、憎悪に達するほどの自己輕侮を感ずることなしには、虚榮的な人間になり得ないのである。しかし、輕蔑するためか、自分よりえらいもの扱いにするためか、とにかくほとんどいかなる人に出会っても、わたしは必ず目を伏せてしまったものだ。わたしは実験までもして見た。自分は今だれその視線を受けているが、はたしてそれを持ちこたえることができるだろうか、とこう自分の心に問うてみたけれど、いつもわたしのほうがさきを目を伏せるのであった。そのために、わたしは気が狂いそうなほど煩悶した。それからまたわたしは、滑稽に感じられるということも、やはり病的なくらい恐れていたもので、すべて外面上のこととなると、奴隷じみるほど常套を盲拝していた。わたしはほとんど愛の感情さえもいだきながら、世間の軌道に合致することに努め、すべて異常なことを心底から避けるようにしていた。しかし、わたしなどにどうして最後まで持ちこたえることができよう？ わたしは、現代人として当然なことではあるが、病的に頭腦が發達していたのだ。ところが、同僚たちときたら、みんな鈍感で、まるで羊の群れのように、お互い同士似かよっている。ことによったら、役所に勤めている連中のなかでも、自分は臆病者で奴隷み

たいな人間だと絶えず感じているのは、わたし一人だけかもしれない。つまり、それがために、自分は頭脳の発達した人間だと感じられたのだろう。しかし、それはただわたしの気のせいばかりでなく、本当にそのとおりだった。わたしは臆病者で奴隷なのだ。わたしはこれを別に悪びれもせずについておく。すべて現代のちゃんとした人間は、臆病者で奴隷なのである。またそうでなければならぬ。これが現代人のノーマルな状態なのだから。わたしはそれを深く確信している。現代人はそういうふうに作られている、そうなるように仕組まれているのだ。それはあえて現代のみならず、また単なる偶然の事情によるばかりでなく、概してあらゆる時代においても、ちゃんとした人間は臆病者であり、奴隷であるのが当然なのだ。それはこの土地におけるいつさいの相当な人間の自然律である。たとえば彼らのだれかが、なにかで武勇を示すようなことがあるにせよ、そんなことで得意になったり、夢中になったりしないほうがいい。どうせほかのことでは尻っ尾を出すに決まっている。これが唯一にして永久不変の結果なのだ。えらがるのはただ驢馬とその亜流くらいなもので、それさえ何かある障壁にぶつかったら、もうおしまいなのである。そんなものには、注意を払う価値がない。なぜと行って、彼らはてんでなんの意味も持ち得ないからだ。

当時またある一つのことを、わたしを苦しめていた。ほかでもない、だれもわたしに似ている者もなければ、わたしもまただれにも似ていないということである、『わたしは一人きりなのに、やつらはみんながかりだ』とわたしは考えた。——そして、すっかり考えこんでしまった。

これから見ても、わたしがまだからつきし小僧つ子だったということが、明瞭なわけである。

かと思うと、また正反対のことも起こった。実際どうかすると、役所へ通うのが、どうにもいやでたまらなくなつた。ついには半病人になつて、勤めから帰ってくるようなことも、珍しくないほどになつた。けれど、不意になんのきっかけもなく、懷疑と無関心の時期がおそつてくる（わたしのはなんでも、むらになつて起こるのだ）。ところで、当のわたしが自分で自分のせつかちと氣むずかしさを冷笑し、自分で自分のロマンチズムを非難するのだ。時には、だれとも口をききたくなくなるかと思つと、また時には、夢中になつてしゃべり込むのみならず、おまけに、友だちづきあいまでしようという氣になるくらいである。氣むずかしさは、なんのきっかけもなく、忽如として消えてしまう。もしかしたら、そんなものははじめつからなかつたので、書物から取ってきた借りものだったのか

もしれない。わたしはいまだにやつぱり、この問題を解決できないでいる。一度などは、すっかりやつらと仲好しになりすまし、その住居を訪問したり、かるたを闘わしたり、ウオート力を飲んだり、昇進を取り沙汰したりしたものだ……が、ここでちよつとわき道へそれるのをゆるしてもらいたい。

われわれロシア人の間には、概括的にいって、ドイツふうや、ことにフランスふうの現実離れのしたロマン派は、かつて存在したことがなかった。この手合は、どんなことがあつたつてびくともしない。よしんば、大地が足もとで裂けようと、フランス中の人間が防塞の上で死んでしまおうと、彼らは依然としてもとのままである。ほんのお体裁にも変わろうとしないで、相変わらず自分たちの現実ばなれのした歌を、死ぬまで歌いつづけるだろう。それというのも、彼らが馬鹿だからである。しかるに、わがロシアの土地には馬鹿がない。それは周知の事実であつて、つまりそこにこそ、ほかのドイツ的な土地との相違点があるのだ。したがつて、わが国には現実ばなれのした人間も、純粹の形では存在していないのである。ただ当時の「実証的な」わが社会評論家や批評家連が、その頃コストンジョーグロ（ゴーゴリ『死せる魂』の人物、善玉的性格）や、ピョートル・イヴァーヌイチ叔父などの後を追っかけ廻して、馬鹿正直にそれをわれわれの理想のように思いこん

だために、ロシヤ・ロマン派をドイツや、フランスのと同じような現実ばなれ人種とみなして、とんでもない捏造をしたにすぎない。ところが、事実はその反対である。わがロシヤのロマン派の特質はヨーロッパの現実ばなれ人種とは対蹠的なもので、ヨーロッパ的尺度はいっさいここへ当てはまらないのである（どうかわたしにこの「ロマン派」という言葉を使うのをゆるしてもらいたい、——これは古風な押しも押されもせぬ立派な言葉で、だれにでも耳馴れているのだ）。わがロシヤのロマン派の特性は、すべてを理解し、すべてを見ることである。わが国で最も実証的な頭脳を有する人々よりも、しばしば比較にならぬほど明瞭に見ることである。何人とも何もものとも妥協しないが、同時になにひとつ毛嫌いしないで、すべてのものを迂回し、すべてのものに慇懃に譲歩することである。つねに有益な実際上の目的（たとえば官舎、年金、勲章など）を見失わないで、それを抒情詩集や感激を通して眺めながら、同時に「美しくして高遠なるもの」を生涯のおわりまで、神聖不可侵なものとして保存したうえ、ついでに自分自身をも、まるで宝石を綿のなかへしまっておくように、完全に保存することである。それはたとえば、例の「美しくして高遠なるもの」を益するためとしてもよろしい。わがロシヤ・ロマン派は多面的な人間であって、わが国のありとあらゆる悪漢のなかでも、指折りの悪漢である。わたしはそれを：

…経験上からでも、諸君に誓うことができる。もちろん、それらはすべてロマン派が聡明な場合の話である。だが、いったいわたしは何をいつているのだ！ ロマン派はいつだって利口なものに決まっている。ただ、わたしがいいたかつたのは、わが国にも馬鹿なロマン派がいたにはいたけれども、それは勘定にはいらないうことである。そのわけはほかでもない、この連中は、まだ力の張り切っている最中に、すっかりドイツ人に生まれ変わってしまったて、自分の大事な宝石を保存するのに都合がいいように、ドイツの国はどこか、といつてもおもにワイマルか、シユワルツワルドあたりへ越して行つたからである。わたしなどは早い話が、自分の役人生活を心の底から軽蔑していたが、必要上やむを得ず、後足で砂をかけずに我慢していた。なぜなら、自分がお役所へ納まつて、そのために金をもらつていたからである。その結果として、——よろしいか、——とにかく後足で砂を引っかけなかつたわけだ。わが国のロマン派は、もしほかに、人生活動の目当てがなかつたら、後足で砂など引っかけないで、むしろ癡狂するほうが勝ちである（もつとも、そういうことはごくたまにしかないけれど）。また役所のほうでも、けつしてわがロマン派をお払い箱にするようなことはない。ただ「スペインの王様」（ゴーゴリ『狂人日記』の主人公）といったような名前をつけられて、瘋癲病院へ送りつけられるくらいなものだが、そ

れも発狂の度がひどかった場合に限る。けれども、ロシヤで発狂なんかするのは、ただ白っぽい髪の毛をした腺病質の連中に限るのだ。しかし、数え切れないほどようよしているロマン派どもは、やがてその中に相当な官等に昇つてゆく。実に並み並みならぬ多面性といわねばならぬ！ まったく相反した感覚を味わう点で、実に驚くべき能力をもっているのだ！ わたしはその当時からこの点に喜びを感じていたが、いまでもやっぱり同じ考えでいる。このためにこそ、ロシヤには「広汎なる天性」の所有者が多いわけである。彼らは墮落のどん底に落ちた時でさえ、けつしておのれの理想を失わない。たとえ、彼らが金箔つきの強盗や泥棒であつても、また自分の理想のために指一本うごかすだけのことをしなくても、とにかく有難涙の溢れるほど自分の第一義的な理想を尊敬しているのです。その心中たるや、きわめて潔白なものである。さよう、ただロシヤにおいてのみ、金箔つきの紛れもない悪党が完全に、高遠なる意味において潔白な魂をもち得るのである。そのくせ、同時に依然たる悪党であることをいっこうに妨げない。くり返していうが、わがロマン派の中からは、ひっきりなしに腕つききの悪玉ができて（わたしは「悪玉」という言葉が好きで使うのだ）、俄然おどろくべき現実に対する敏感さと、実証的なものに対する知識を示すので、呆気にとられた警察や世間のものは、ただ茫然として舌打ちをするばかり

りである。

この多面性は真に驚嘆に値するほどで、次に展開される状況のなかでいかなる変化をとげるか、また将来どう落ちつくかということは、ただ神さまばかりがごぞんじである。こんなものもなかなか悪くない材料といえよう！ わたしがこんなことをいうのも、あえて滑稽な、古臭い愛国心などのためではない。もつとも、諸君は今度もまたわたしが茶化しているのだと、てつきり考えていられるに違いない。しかし、或いはその正反対で、わたしが本当にこういう考えでいるものと、思いこんでいられるかもわからない。それはだれにも保証できることではない。いずれにしても、諸君、わたしはこの両様の意見をどちらにも光栄とし、特別な喜びと考えるだろう、どうかわき道へそれたことをゆるしてもらいたい。

わたしは自分の仲間とは、もちろん、交遊をつづけることができないうで、きわめて僅かな間に後足で砂をかけてしまった。そして、当時まだ若くて無経験だったために、まるでぷつりと糸でも断ち切ったように、彼らに会釈することさえもやめてしまった。ただし、これはわたしの生涯でたった一度しかなかった。概して、わたしはいつも一人ぼっちだったのである。

第一、家にいるとき、わたしは何よりも一ばん読書に耽った。つまり、内部に絶えず湧

き立つてくるものを、外部から受ける感覚で紛らしたかったのである。外部から受ける感覚の中で、わたしの力に及ぶものといつては、ただ読書よりほかになかった。むろん、読書は非常に役に立った、——興奮させたり甘美な気持ちを与えたり、苦しめたりした。が、それでも時には、うんざりするほど退屈になった。なんといつても、動きが恋しくなってくるのだ。で、わたしは急に地下生活者らしい、暗澹とした、いまわしい淫蕩に耽った、——というより、淫蕩の真似事に沈湎したのである。わたしの哀れな情欲は、いつもの病的ないら立たしい性質のために、焼きつくような鋭さを持っていた。その発作はヒステリイじみている、涙や痙攣を伴うのであった。読書のほかには、どこへも行くところがなかった、——といって、当時わたしの周囲には尊敬に値したり、牽引を感じたりするようなものが何もなかったのだ。おまけにふさぎの虫が暴れ廻った。矛盾とコントラストを渴望するヒステリイじみた欲望が頭をのぞける。そこでわたしは淫蕩にむかって飛びこんだのである。わたしがいまこんなに多言を弄したのは、けっして自己弁解のためではない……が、しかし、ちがう！ わたしは嘘をついた！ ほかならぬ、自己弁解がしたかったのだ。諸君、これはわたしが自分のためにちよつと断わっておくのだ。わたしは嘘をつきたくない。もう前に誓ったとおりだ。

わたしは夜々そつと、内緒で、恐る恐る、穢らわしい淫蕩に耽った。羞恥の念は、思い切り醜悪な行為をしている瞬間にも、わたしの心を離れることがなかった。そんな時は、ほとんど呪詛の気持ちにさえ達するほどであった。わたしは早くもその頃から、心の中に地下心理を蔵していた。わたしは何かの拍子で人に見つかりはせぬか、だれかに出会いはせぬか、顔を見分けられはせぬかと、恐ろしくびくびくものだったのである。わたしはいつでもできるだけ曖昧な場所を、所々方々とあさり歩いた。

ある夜、とある安料理屋の前を通りかかったとき、煌々と輝く窓ごしに、客が玉突台の傍で、キューを持つて撲り合っているのを見た。やがてそのうちの一人が窓から突き出された。これがほかの時であつたら、わたしはたまらないほどいまわしくなつたところなのだろうが、その時はふと妙な気持ちにおそわれてわたしはこの窓から突きだされた客を羨ましく思った。なんともいえないほど羨ましくなつたので、わたしはその安料理屋の玉突部屋へ入つて行つたくらいである。『ひとつおれも喧嘩を試してみるかな。そしたら、同じように窓から突き出されるかもしれない』といったような気持ちなのだ。

わたしは別に酔つてはいなかつたが、しかしなんともいたし方がない、——ふさぎの虫というやつは、こんなヒステリイじみたことをさせるほど、人の心を喰い破るものだ！

が、何事もなくてすんだ。で、自分は窓から飛び降りるだけの能もない人間であるとわかったので、わたしは喧嘩をしないで、すぐそこそこを出て行った。ここへ入ると早々、わたしの度胆を抜いたのは、一人の将校だった。

わたしは玉突台の傍に立つて、作法を知らないために、通り道をふさいでいた。その将校はそこを通り抜けなければならなかったので、いきなりわたしの両肩をつかんで、無言のまま、——前触れもしなければ言いわけもせずに、わたしを立てていた場所からほかの場所へ据え直した。そしてご当人は、まるで気もつかぬような顔をしながら、そのまま向こうへ行ってしまった。よしこれがぶん撲られたのであっても、わたしはゆるしたかもしれないけれど、彼はわたしを道具のように据え直して、しかもてんで気のつかない顔をしている。これはどうにも勘弁ならない。

わたしはその時、もつと正則な、もつと作法にかなった、いつてみれば、もつと文学的な本当の喧嘩をするためなら、それこそどんな代償を投げだしたかしのほどである！わたしはまるで蠅のような取扱いを受けたのだ。この将校は六尺ゆたかな大男であったが、わたしはまた背の低い貧弱な体をしている。もつとも、喧嘩をするもしないも、わたしの自由だった。ちよつとたてついてゆきさえすれば、むろんわたしは窓から突き飛ばさ

れたのだ。けれども、わたしは考え直して、むしろ……むかつ腹を立てたまま、こそそと姿を消すことに決めたのである。

わたしはぼつの悪いような、興奮した気持ちで料理屋を出て、まっすぐに家へ帰ったが、その翌日はなお臆病な、意気地のない、わびしい気持ちで、例の哀れな淫蕩をつづけた、——まるで目に涙を宿したような有様ながら、それでもとにかくつづけたのである。もつとも、わたしが臆病なためにあの将校を恐れたなどとはどうか考えないでほしい。わたしは行為の上でこそ、絶えずびくびくはしていたけれども、心の中ではけっして臆病ものではなかった。しかし、笑うのは少々待つていただきたい。これにはわけがあるのだ。わたしには何にでもわけがあるのだ。どうか信じてもらいたい。

ああ、もしこの将校が、決闘を承諾するような人間だったら！ しかし、駄目だ、——それはキューを振りかざしたり、或いはゴーゴリの描いたピロゴフ中尉（『ネーフスキイ通り』中の人物）のように上官に告げ口したりするような、そんな手段を選ぶ連中の一人だった（悲しいかな！ 疾くに消えてなくなっただけ）。彼らは決闘などには応じなかった。それに、われわれ文官仲間を相手の決闘は、いずれにしても、無作法なものと考えたに違いない、——概して、彼らは決闘というものを、何かフランス輸入の自由思想的な、

考えることも許されないようなものと見なしていた。そのくせ、自分のほうではかなりよく人を侮辱したもので、六尺ゆたかな大男の場合などは、なおさらの話である。

わたしがそのとき臆病風を吹かしたのは、何も卑怯なためではなくて、方図の知れない虚栄心から出たことなのである。わたしは六尺ゆたかな背丈を恐れたのでもなければ、こつびどく殴りつけられて、窓からほうりだされるのが怖かったのでもない。まったくのところ、肉体上の勇氣にはことを欠かなかつたらうけど、精神的の勇氣が不足していたのである。わたしが恐れたのは、ほかでもない、そこに合わせた連中が、生意気なゲーム取りを初めとして、脂じみたカラをつけた太鼓持ちのような、にきびだらけのみじめな腰弁にいたるまで、だれ一人としてなんの理解をも持つてくれないで、もしわたしが彼らに楯ついて、文学的な言葉でしゃべり出そうものなら、たちまち笑い草にされてしまうということだった。なぜなら、名誉の点に関しては、つまり、単に名誉に関してではなく、名誉の点 (point d'honneur) に関してはロシアでは今日にいたるまで、文学的以外の言葉では話ができないのである。人間なみの言葉では「名誉の点」について語るわけにはゆかない。わたしは心底から確信していたが（いくらロマンチズムで一杯になっても、現実に対する敏感性というものがある！）、彼ら一同はいきなり抱腹絶倒するに違いない。将校

などはただ単純にわたしを殴りつけるばかりでなく、つまりいい加減人を小馬鹿にした殴り方をするばかりでなく、必ずわたしの尻を膝小僧で蹴ちらしながら、玉突台のまわりをぐるりと廻ったあげく、やつとお慈悲に窓からほうりだすに違いない。むろん、このみじめな出来事は、ただこれだけで終わりを告げるわけにはゆかなかった。その後、わたしはしよっちゆう往来でこの将校に出会って、よく注意し観察したものである。ただし、先方でわたしに気がついたかどうかはわからない。きつと気がつかなかったに相違ない。これは二、三の徴候によつて結論することができるといふ。けれど、わたしのほうは、わたしのほうは憤怒と憎しみをもつて、彼をじつと見つめていた。こうして……幾年かつづいたのである！ わたしの憤怒は年とともに堅く根を張つて、しだいに成長していった。初めの間、わたしはそつとこの将校のことを探りにかかった。それはわたしにとって骨の折れる仕事だった。だれも伝手^{つて}がなかつたからである。けれど、わたしがまるで縛りつけられたもののように、見えがくれに彼の跡をつけて歩いているとき、だれかその苗字を呼びかけたものがあつたので、はからずもこの将校の姓を知つたわけである。その次に、わたしは彼の住居まであとをつけて行つて、門番に十コペイカ玉を握らせ、彼が何階のどこに住んでいるか、独身かそれとも同居人があるか、などといったようなことを、ひと口にいえば、門

番から聞きだし得るいつさいのことを、知ったのである。わたしはけっして文学者めいた真似をしたことがなかったけれど、ふとある朝、この将校を暴露小説の形式で、カリカチュアふうに描写してみようという考えを起こした。わたしは快感を覚えながらこの小説を書いた。わたしは大いに暴露した。それどころか、中傷までやった。苗字はすぐに想像がつくように作り替えたが、その後とくと熟考の上、すっかり変えてしまった。わたしはそれを『祖国雑誌』へ送ったが、当時はまだ暴露文学などというものがなかったので、わたしの小説はついに掲載されずに終わった。わたしはそれがいまいましてたまらなかつた。どうかすると、狂憤のあまり、ただもう息がつまりそうになった。とどわたしは相手に決闘を申し込もうと決心した。わたしは彼に宛てて、魅力に満ちた素晴らしい手紙を書き、哀願的な調子で謝罪を求めた。そして、これを拒絶した場合には、いよいよ決闘だということ、かなりきっぱりと匂わしてやった。手紙は素晴らしい出来ばえだったので、もし将校が少しでも「美しくして高遠なるもの」を解していたら、必ずやわたしのところへ飛んで来て、わたしの首にしがみつき、交誼を求めたに相違ないとおもわれるほどであった。もしそうなったら、どんなにいいだろう！ わたしたちはいい生活を始めるのだ、まったくどんな気持ちのいい生活を始めることだろう！ あの男はその高い官等によってわたし

を保護するだろうし、わたしは自分の教養と、それからまあ……理想によって、あの男の心を熏陶してやる、そのほか、何やかやいろんなことができるはずだ！　しかし、想像してみたいだきたい、その時は将校がわたしを侮辱して以来もう二年から経っていたので、わたしの挑戦は、アナクロニズムを掩蔽し説明する巧妙な手紙の書き方にもかかわらず、醜悪をきわめたアナクロニズムには相違なかったのだ。しかし、いいあんばいに（わたしはいまだに涙をうかべて天帝に感謝しているが）、この手紙はどうとう出さないで終わつた。もしそれを出していたら、どんなことが持ちあがつたかとおもうと、身の毛がよだつような思いである。ところが突然……まったく突然に、わたしはこの上なく簡単な、しかもこの上なく天才的な方法で、復讐を遂げたのである、わたしの脳裡に忽然と素晴らしい考えがうかんだのだ。ときどき日曜日や祭日にわたしは午後三時ごろネーフスキイ街へ散歩に出て、日当たりの側をぶらついたものである。といつても、けっして散歩気分にはならないで、無数の苦悶と、屈辱と、いら立たしい憤懣とを味わつたのだが、しかしわたしにとつては確かにそれが必要だつたらしい。わたしはあるいは將軍に、あるいは近衛騎兵に、あるいは軽騎兵将校に、時には貴婦人たちに道を譲りながらきわめて見苦しい恰好で、まるで鱈としょうのようにちよろちよろ泳ぎ廻つた。そういう時、自分の身なりの見すばらしさや、

ちよこちよこと動く自分の姿の下劣な浅ましさを考えただけで、わたしは心臓に痙攣的な痛みを覚え、背中に熱気ねつけを感じるのであった。それは不断の耐え難い屈辱の悩みで、つまりこうした社交界の人々の前に出ると、自分は一匹の蠅にすぎない、なんの役にも立たない穢らわしい蠅にすぎない、という自意識から生じるのであった。この自意識は、しだいしだいに、絶え間なく、直接に神経をつつく感覚に移るのであった。自分はだれよりも賢い、だれよりも頭脳が発達している、だれよりも高潔だ、——それはもうわかり切っているけれど、それでもものべつみんなに道を譲って、みんなに辱しめられる一匹の蠅にすぎないのだ。なんのために自分から好んで、この苦しみを背負おうとするのか、なんのためにネーフスキイ通いをするのか、それは自分でもわからない。ただなんということなしに、機会さえあればそこへ牽かれていったのだ。

わたしはもうその時から、前に第一章で述べた快感の潮来を感じるようになった。例の将校とのいきさつがあつて以来、わたしはいっそう強くそちらへ引きつけられていった。ネーフスキイ街では彼に出あう機会が一ばん多かったので、ここでわたしは彼の姿を眺めつづけたのである。相手もやはりおおむね休日にもそこへ出かけて行った。彼も將軍や高位高官の人たちの前では、やはり同様に道を譲って、まるで鱒のように、その間を縫って歩

いたが、われわれ級の仲間はいうまでもなく、それよりもっと気の利いた連中に出あった時でも、いきなり踏みつぶさんばかりの勢いだった。まるで、まえのほうは何もない空間のように、どんどんまともに歩いて来て、けっして道なんか譲ろうとしない。わたしは憎悪に燃える眼ざしで、吸いつくように彼をみつめたが、それでもいつも憎々しげに彼の前で身をおかすのだった。往来でさえどうしても対等になれないのを、わたしは心の中で苦しく思った。『どうしてお前はいつもさきに身をおかすのだ？』ときおり夜中の二時すぎに目をさまして、わたしはもの狂わしいヒステリーの発作に駆られながら、自分で自分にため寄るのであった。『なぜ必ずお前のほうがよけて、あいつがよけないのだ？ だって、こんなことに法律はないはずだ。そんなことはどんな本にも書いてないじゃないか？ まあ、礼儀ただしい人たちが出あったとき普通やるように、五分五分にしたらいじゃないか。むこうが半分よければ、こっちも半分よける。こうして、お互いに尊敬し合いながら、すれ違ふこともできるわけだ』しかし、そんなふうにはゆかなかった。やはり身をおかすのはわたしのほうで、将校はわたしが道を譲っていることにさえ、気がつかないのであった。——つまりそのとき、感嘆すべき妙案が突如わたしの心を照らしたのだ。『どうだろう』と、わたしは考えた。『もしあいつに出あった時……わきへ寄ってやらなかったら？』

たとえやつにぶつ突かるはめになるとしても、わざと脇へ寄らないんだ。そしたらいつたいどんなものだろう?』この不敵な考えが、だんだんわたしの心を支配して来て、ついにはじつとしていられないくらいになった。わたしはのべつやたらにこのことを空想した。いよいよとなった時どんなふうになんかそれを実行するか、自分ではつきり想像に描いてみるために、わたしは前より頻繁にネーフスキイまで、わざわざ行って見たものである。わたしはうちようてんになつてしまった。しだいしだいに、この目論見がまんぎらの空想ではなく、可能性をもっているように思われてきた。『もちろん、本当に突き飛ばすのじゃない』もう前から嬉しさのあまり気を好くしながら、わたしはこんなふうにかんがえた。『ただ身をかかさないために、ほんのちよつとぶつ突かるのだ。それも、ひどく痛いようにしないで、礼儀上きまつているだけの程度に、肩と肩を合わせるだけでいい。だから、むこうでこつちを押しただけ、こつちも押しかえしてやるんだ』わたしはどうとう本当に腹を決めてしまった。けれど支度に恐ろしく手間がかかった。まず第一に必要なのは、実行の場合、もう少しきちんとした恰好をしているということ、したがって着物のことを心配しなければならぬ。『いづれにしても、いよいよ公衆の中で騒ぎが起こつたら（なにしろ、あそこの公衆は余りもの^{スベルフリユ}で、伯爵夫人も歩いていれば、D伯爵もおひろいになつてゐるし、文

壇ぜんたいが練り歩いているのだからな)、相当な身なりをしていなくちやならない。それはかなり効果のあることで、上流社会の目から見ても、いきなりわれわれ二人をある程度まで対等の位置に立たしてくれるのだ』この目算のために、わたしは俸給を前借りして、チュルキンの店で黒手袋と、りゆうとした中折れとを買った。わたしは初めレモン色のに狙いをつけたが、黒手袋のほうが貫目があつて、上品に思われたのである。『レモン色はあまりぱつとし過ぎて、いかにも見てくれがしに思われていけない』で、わたしはレモン色をやめにした。白い角製のカフスボタンのついた上等のシャツは、もう前から用意しておいた。ただ外套が引つかかりになった。外套そのものとしてはさしてわるくもなく、暖かくてよかつたけれど、しかし綿入れもので、あらいくま浣熊あらいくまの襟がついていた。これなどはもう下男趣味の骨頂だ。是が非でも襟をとり替えて、将校連がしているような海狸かいりにしなればならない。そのためにわたしは ゴスチヌイ・ドヴォール 勸工場ゴスチヌイ・ドヴォール をぶらつき始めた。そして、二、三いろいろな試みをした後で、安いドイツ物の海狸に狙いをつけた。このドイツ物の海狸は非常に早く擦り切れて、実にみじめな姿になるしろ物だが、はじめ新しい間はなかなか立派に見えるのである。ところで、わたしにとつては一ぺんきり用に立てばいいのであった。値段を聞いてみたところ、やっぱり高かつた。とつくり熟考した末に、わたしは浣熊の襟

を売ることには決めた。それでも、わたしにとってはかなり大枚の金が不足したので、わたしは課長のアントン・アントーヌイチ・セートチキンから借りることに決めた。これは、温厚なたちだったけれども、真面目な手堅い人で、けっして人に金など貸さなかった。しかし、以前役所へ入る時にわたしを世話してくれた有力者が、この人に特別な紹介の労をとってくれたのである。わたしは大いに煩悶した。アントン・アントーヌイチに金の無心をするなんてことは、奇怪千万な恥ずべきことに思われたのである。わたしは二晩三晩、寝ないことさえあった。概して、その当時はあまりねむらないで、まるで熱にうかされたような具合だった。心臓がなんだかどろんと痺れたようになるかと思うと、今度は急にびくびく、びくびくと躍り出すのだ……アントン・アントーヌイチははじめびっくりしたが、その次には顔をしかめ、その次にはとくと思案をして、とにかく金を貸してくれた。むろん二週間たったら、貸しただけの金額を俸給から天引にする権利がある、という意味の証文を、わたしに書かしたのである。こういうわけで、やっとすべての準備が整った。美しい海狸が、もと見すばらしい浣熊のついた場所に、堂々たる威容を輝かすことになった。で、わたしはぼつぼつ仕事に着手していった。何しろむこう見ずにいきなり決行するわけにはゆかない。こんな仕事は巧者に、つまりぼつぼつと仕上げてゆかなければならぬ

かった。けれど、白状するが、幾度となく小手だめしをしたあげく、わたしはほとんど絶望に陥らないばかりであった。なんとしても衝突できない、どうにもならないのだ！わたしは一生懸命に心がまえをして、用意おさおさ怠りなかつたのだから、今にも間違いくぶつ突かりそうに思われるのだが、見ると、——わたしはまた道を譲って、相手はわたしなどには気も止めずに行き過ぎてしまうのだ。わたしは傍へ寄って行きながら、どうか神さまがわたしに勇気を授けてくださるようにと、心の中で祈念さえ唱えたほどである。一度などは、もうすんでのことで決行しかけたけれど、結局、相手の足もとに倒れたのが落ちだった。というのは、最後の瞬間に、あと二、三寸という距離のところで、氣力が足りなかつたのである。彼は平然と落ちつき払って、わたしの体を踏んで行き、わたしは毬のように横つちよへ飛びのいた。その晩わたしはまた熱病やみになって、しきりに讒言をいった。ところが、思いがけなく、すべては願つてもないほどうまくけりがついた。前の晩、わたしはこの自滅的な計画を中止して、いっさいを徒勞のまま放棄することに、すっかり腹を決めてしまった。こういう目的をもって、この徒勞のまま放棄するというやつを、実地に見てやろうと思つて、最後の思い出にネーフスキイ街へ出かけて行つた。すると突然、わたしは自分の敵手から三歩ばかり隔てたところで、思いがけなく決心がついたのだ。

わたしが目をつぶつたと思うと、——二人の肩と肩とがぴったりぶつ突かったのである！
わたしはちよつとも道を譲らず、完全に五分と五分で傍を通り過ぎたのである！ 彼は振り向いて見ようとししないで、なんにも気のつかないような顔をしていた。しかし、それは要するに、ただ顔をしただけにすぎない。わたしはそれを確信している。いまだに心底から確信している！ むろん、わたしのほうがよけいに痛い目をした。相手のほうがずつと強いのだから。しかし、そんなことは問題じゃない。問題はわたしが目的を達して、自己の品位を保ち、一步も敵に譲らないで、公衆の面前で社会的に彼と対等の位置に立つた、ということである。わたしはすっかり仇を打つたつもりで、家へ帰って来た。わたしはもううちようてんになつて、得々としながら、イタリア・オペラのアリアなど唄つたものだ。もちろん、その後三日たつてから、わたしの身の上起こつた顛末は改めて書きたくないことにする。わたしの手記の第一部『地下の世界』を読んだ人は、おのずと会得がゆくはずである。将校はその後どこかへ転任になつた。もうかれこれ十四年ばかり、わたしはこの男に逢わない。わが親愛なる将校先生、今頃はいつたいなにをしているだろうか？
いつたいだれを踏みつけているだろうか？

2

けれども、わたしの淫蕩時代は終わりを告げて、わたしはなんともいえないほど、くさくさしてたまらなくなつた。悔恨がおそつて来た。わたしはそれを追い退けるようにしてゐた。もうあまりくさくさしてたまらないからだ。とはいうものの、わたしはそれにもだんだん慣れてきた。わたしはなんにでも慣れていった。いや、慣れるというよりも、なんだか進んで我慢する気になるのであつた。しかし、わたしにはいつさいを諦めさせる逃げ道があつた。それはすべての「美しくして高遠なるもの」のなかへ遁れこむことであつた。むろん、空想の中での話だ。わたしはやたらに空想した。ものの三か月も自分の貝殻に閉じこもつて、ぶつつづけに空想するのだ。そしてそれこそ本当にしてもらいたいのだが、こういう瞬間のわたしは、牝鷄じみた哀れな心の狼狽にまかせて、自分の外套の襟にドイツ出来の海狸を縫いつけた先生などには、まるで似ても似つかなかつたのである。わたしは俄然英雄になつた。例の六尺ゆたかな中尉殿なんか、たとえ向こうから訪問して来たつて、そんなとき鬩を跨せることはなかつた。そういう時には、そんな男など想像に描くこともできなかつた。わたしの空想がどんなものであり、どうしてわたしがそれに満足で

きたか、——そのへんの消息は今のところいいにくいけれど、当然わたしはそれで自足していた。もつとも、わたしは今でもいくらかそれで自足しているのだ。とくに甘く強い空想が訪れるのは、みじめな淫蕩をやった後だった。それは悔恨と涙と、呪詛と歓喜とともにやって来た。どうかすると、疑いもない陶醉と幸福の瞬間が訪れたので、わたしは自分の内部にいささかの嘲笑も感じなかった。本当の話である。そこには信仰と希望と、愛とがあつた。つまり、そこなののだ、——わたしはその当時なにかの奇蹟で、何か外面的な事情の力で、こうした現状が急に開けて拡がつてゆくものと、盲目的に信じていたのである。急に働きのいのある有益な、美しい、しかも（これが肝腎な点なのだが）、すっかり準備のできた活動の領域が、開けてくるように思われた（それははたしてどんなものか、まるでわたしにはわからなかつたけれども、要はすっかり膳立てのできたものなればならない）。こうしてわたしは堂々と、ほとんど月桂冠をいただき、白馬に跨らなればかりの勢いで、いきなり世の中へ乗りだしてゆくのだ。わたしは第二流の役割など、考えることもできなかつたので、ほかならぬそのために、現実では平然として末流の役割を演じたのである。英雄にあらずんば塵ちりあくた芥、中庸などは存在しなかつた。これがそもそわたしの身の破滅となつたのだ。なぜなら、わたしは泥の中にまみれながら、ほかの

場合には自分も英雄になることがあるのだと、こんなことを考えて、自分で自分を慰めていたからである。ところで、英雄は穢れをおおいつくす力をもっている。並みの人間なら、泥にまみれるのは恥ずかしいけれども、英雄はすっかり泥だらけになってしまおうにも、あまり高いところに立っているのだから、したがって少々くらい泥をつけてもかまわないわけである。ここで注意に値するのは、この「美しくして高遠なるもの」の発作が、みじめな淫蕩の間にもわたしを訪れたことである。つまり、わたしがすっかりどん底に落ちこんでいる時、ぱつぱつと火花のように燃えあがりながら、やって来るのだった。それは自分の存在を思い出させるような形だったが、しかしその出現によって、淫蕩を揉み潰すのではなかった。それどころか、かえってコントラストの力で淫蕩を活気づけてくれる。いわばうまいソースの役目をする程度に訪れるのであった。この場合のソースは矛盾と、苦痛と、悩ましい内部分析から調査されていた。こうした苦悶や悩みは、わたしの淫蕩に一種ぴりつとした味と、ある意味さえも添えてくれた、——ひと口にいえば、完全に上等なソースの働きをしてくれたのである。これらすべてのことは、まんざら多少の深刻味がなくもなかった。まったくわたしとしては、平凡俗悪な純粹の腰弁式淫蕩に満足して、その穢らわしさをことごとく忍ぶなんて、そんなことができた義理ではないではないか！ そ

の当時、こんな淫蕩のどういうところがわたしの気に入って、よる夜中、わたしを街頭へ引つ張りだしたのだろうか？　なに、わたしは何にでも通用する上品な抜け穴を持っていたのだ……

しかし、わたしはこうした空想の中に、こうした「美しくして高遠なるもの」への逃避の中に、どれだけの、ああ、どれだけの愛情を経験したろう！　それは、幻想的な愛であり、けつして事実上なんら人間的なものに当てはまらない愛ではあつたけれども、しかしそれがあまり豊富に満ちあふれていたもので、その後、実際に当てはめようなどという要求さえも感じられないほどであつた。これはもうよけいな贅沢というものだ。とはいえ、すべてはいつもきわめて平穩無事に、ものうい陶醉的な気持ちで、芸術に移つてゆくのが幕切れだつた。それはつまり、一から十まで出来合いの美しい生存形式を指すので、詩人やロマン派から臆面もなく剽窃して、ありとあらゆる要求に、ご用を足すように順応された形式である。たとえば、わたしはあらゆる人間に対して勝ち誇つたような気持ちでいる。人々はむろん顔色なしで、わたしの備えているあらゆる完成の徳を、進んで認識せざるを得なくなる。すると、わたしは彼ら一同をゆるしてやるのだ。わたしは有名な詩人であり、侍従武官であつて、恋をしたり、巨万の富を受け取つたりする。けれど、その金はすぐ人

類のために寄付してしまつて、しかもその場で、公衆一同に自分の汚辱を告白する。が、その汚辱はむろん単なる汚辱でなく、はなはだしく多量に「美しくして高遠なるもの」、いい換えれば、マンフレッド式の何ものかを蔵しているのだ。みんなは涙を流しながら、わたしと接吻する（それをしなかつたら、やつらはあきれた間抜けぞろいだ）。ところが、わたしは飢えを忍びながら、あたらしい思想を宣伝するために、跣足^{はだし}で出かけて行く、そして、アウステルリッツの戦場で退歩主義者どもを撃破する。マーチが吹奏されて、大赦令が公表せられ、法皇はローマからブラジルへ出発を承諾する。それから、コモ湖畔にあるボルゲーゼの離宮で、イタリヤ全国民のために大舞踏会が開かれる。というのは、コモ湖がこの催しのために、とくにローマへ移転されるからである。その後は、茂みの中の場面があつたり何かして、——以下は諸君のご想像におまかせする。諸君はそれに対して、今お前が自分で告白した無量の感激や涙の後で、そんな月並みを今さら市場へもちだすのは、俗悪で下劣だといわれるだろう。だが、なぜそれが下劣なのです？ いったい諸君はわたしがそれを恥じているとも思われるのか？ これが諸君の生活の何かに比べて、馬鹿げているといわれるのか、諸君？ それに、誓つていうが、わたしの書いたものでも、多少はかなり気の利いたところがあるのだ……何もぴんから切りまでコモ湖畔の出来事で

はない。もつとも、諸君の言は正しい。実際、俗悪でもあれば低劣でもあるのだ。何よりも低劣なのは、わたしがいま諸君の前でいいわけなど始めたことだ。それより更に低劣なのは、わたしがいまこんな断わり書きをしていることだ。しかしもうたくさんだ。こんなことをしては、けつして終わりっこない。何もかも次から次へと、ますます低劣になってゆくばかりだ……

わたしは三か月より長く、ぶつつづけに空想することがどうしてもできない。そのうちに、人間社会へ飛びこんでゆきたいという、やみ難い要求を感じ始めるのだ。わたしにとって、人間社会へ飛びこむということは、課長のアントン・アントーヌイチ・セートチキン氏のところへ客に行くことを意味する。これはわたしの一生を通じて変わることのない、たった一人の知人で、わたしはいま自分でさえもこのことを不思議に思っている。けれど、わたしがこの人のところへ出かけてゆくのは、わたしの空想が幸福の頂上に達して、ぜひともすぐに世間の人々、いな、全人類と抱擁せずにはいられないような、そうした時期が到来した時に限るのである。が、そのためにはせめて一人の人間でも、現に実在している人物を持つ必要がある。もつとも、アントン・アントーヌイチのところへ行くのは、面会日となっている火曜日に限るので、したがって、全人類と抱擁する内部要求を、いつも火

曜日に当てはめなければならなかった。このアントン・アントーヌイチはピヤチ・ウグロフ（五辻）に近い建物の五階に住んでいた。それは天井の低い小さな部屋四つの住居で、いかにもしまつ屋らしい、黄いろつぽい感じを帯びていた。家族は娘二人と、いつも茶の注ぎ役になっているその伯母であった。娘の一人は十三、いま一人は十四で、どちらも鼻が低かった。わたしはいつもこの二人の娘に、ひどく間の悪い思いをさせられた。それは二人がひそひそささやき合ったり、盗み笑いをしたりするからである。主人はたいてい書齋に納まつて、われわれの役所か、でなければ、ほかの省に勤めている官吏らしい胡麻塩頭の客といつしよに、テーブルを前に控えた皮張りの長いすに腰かけていた。いつも顔ぶれの決まつた二、三人の客よりほか、わたしはかつてだれにもそこで出会つたことがない。消費税、大審院の競売、俸給、昇進、長官閣下、上官のお気に入る秘書、等々が、その話題であつた。わたしは四時間くらいぶつつづけに、間の抜けた顔をして、こういう連中の傍にじつと畏まりながら、その話を聞いているだけの忍耐力があつた。しかも、自分から話に口を入れる勇氣もなければ、それだけの働きもないのだ。わたしはぼつとなつて、幾度も冷汗をかきそうになつた。なんだか卒中の気が頭のへんを渦巻いているような気がした。しかし、これがいい気持ちであり、かつ有益なのであつた。家へ帰ると、わたしはし

ばらくのあいだ、全人類と抱擁する希望を延期したものである。

もつとも、なおそのほかに、もう一人シーモノフという知人らしいものがあつた。学校時代の同窓なのである。学校時代の友だちは、ペテルブルグにたくさんいたろうと思われ
るが、わたしはその連中と交際していなかったのみならず、往来で逢つても、挨拶ひとつ
しなくなつたほどである。わたしがほかの役所へ転任して行つたのも、彼らといつしよに
なるのがいやで、癪にさわる自分の少年時代と一気に絶縁するためだつたかもしれない。
あんな学校やあんな懲役じみた時代は呪われるがいいのだ！ 要するに、わたしは自由にな
るが早いから、さつそく学校友だちと手を切つてしまつた。けれど、それでも出会つた時
に挨拶する友が、まだ二、三人は残つていた。その中にシーモノフが入つていたので。学
校時代にはいつこうなんの特色もなく、なだらかな静かな男だつたが、わたしはこの男に
ある程度の独立独歩の気性と、廉潔心さえみとめていたのである。それどころか、彼がそ
れほど浅薄な人間だともおもわない。かつてわたしと彼の間には、かなり晴れやかな友情
の時期もあつたが、それはあまり長くもつづかないうちに、とつぜん妙な霧みたいなもの
におおわれてしまつた。彼は察するところ、この追憶を荷厄介にしているらしく、わたし
が以前のような調子に立ち返りはしないかと、絶えずびくびくしている様子であつた。わ

たしは彼に嫌われているのではないかと疑いながら、確かにそうという確信もなかったの
で、相変わらずこの男を訪問していた。

ところで、ある木曜日のこと、わたしは自分の孤独に我慢し切れなくなったにもかかわ
らず、木曜日にはアントン・アントーヌイチの客間が閉ざされているのを承知していたの
で、ふとシーモノフのことを思い出した。四階の住居へ昇って行きながら、この先生がわ
たしを迷惑がっていたことを思いだして、自分がこうして出かけて来たのはいけなかった
かな、と考えた。けれど、結局、こうした考えはまるでわざとのように、わたしを尻くす
ぐつたい立場へ追いこむのが常だったので、わたしはずんずん入って行った。この前シー
モノフに逢つてから、もうほとんど一年たっていた。

3

わたしはこの男のところで、ほかに二人の学校友だちに逢つた。見受けたところ、彼ら
は何か重大な相談をしているらしかった。わたしが入って行っても、だれ一人としてろく
すつぽ注意も向けなかった。わたしたちはもう何年と行って逢わなかったのだから、こう

した態度は不思議に思われるくらいだった。明らかに彼らはわたしという人間を、ごくありふれた蠅くらいにしか心得ていないらしい。彼らはみんな学校時代からわたしを憎んでいたものの、その頃はまだこれほどのひどい扱いはしていなかった。いま彼らがわたしを軽蔑するのは当然すぎるくらいだ、そのことはわたしにももちろんわかつていた。なぜなら、わたしが官吏生活の方面で失敗したために、すっかりふりをかまわなくなって、ひどい服を着たりしていたからである。——こういうことは、彼らの目から見ると、わたしに働きがなくなつて、つまらない人間だという看板を上げているに等しいのだ。しかし、それにしても、これほどまでの軽蔑は予期していなかった。シーモノフはわたしの来訪に、面くらつた様子さえ見せた。もつとも、彼は前からいつもわたしの訪問に面くらうらしかつた。わたしはこういう事態に出鼻を挫かれたような形だった。わたしはいくらか沈んだ気持ちで腰を下ろし、彼らの話に耳を傾け始めた。

それは、現職将校として遠い地方へ転任してゆくズヴェルコフという友だちのために、この連中が集まつて、明日さつそく送別宴を張ろうというので、真面目くさつて熱心に相談しているのであった。ムシユウ・ズヴェルコフはわたしにとつても終始かわらぬ同窓の友だった。わたしは上級になつた頃から、別してこの男を憎み出した。下級生時代には、

彼は単にかわいい活潑な少年にすぎなかつたので、みんなにかわいがられていた。もつとも、わたしは下級生時代にもこの男を憎んでいた。つまり、彼がかわいい活潑な少年だったからである。学業の成績はいつも決まつて悪く、さきへ進めば進むほどいけなかつた。そのくせ、ひきがあつたものだから、まんまと卒業することができた。学校を卒業する前に、二百人の農奴つきの領地が遺産として彼の手に入った。ところが、仲間の連中はほとんどみんな揃つて、貧乏人ばかりだったから、彼はわたしたちに対しても大風呂敷をひろげるようになった。それはもうこの上なしという俗物だったけれども、悪気のないいい男で、大風呂敷をひろげる時でさえ愛嬌があつた。われわれ仲間では、うわっ面だけの廉潔とか、名誉とかいうものについて、突拍子もない美辞麗句的な形式が喋々されていたが、それでもごく少数の者を除いては、みんなズヴェルコフの前でペコペコしていた。それで、当人はいつそう肩で風を切るようになったのである。しかし、それは何かさもしい目当てがあつて、ペコペコするのではなく、ただ彼が自然の恩恵を賦与された運命の寵児だからにすぎない。その上、どういうわけか、われわれ仲間ではズヴェルコフのことを、洗練された身だしなみとか作法とかにかけては、立派なエキスパートのように考えていたのである。このことはとくにわたしを憤慨させた。自分の価値を疑つたこともなさそうな、きん

きんした彼の声の響きや、自分で自分の洒落や警句に満足し切っている様子などを、わたしは心の底から憎んでいた。彼はしゃべるほうにかけては勇敢だったが、その洒落はいつも馬鹿げ切っていた。わたしは、美しいけれど間のぬけた彼の顔や（もつとも、わたしはいつでも喜んで自分の利口そうな顔を、その間ぬけ面と取りかえてやるつもりだが）、四十年代の遺物めいた磊落な将校式態度を、ひそかに憎んでいた。また未来における女性征服の勝利を語り（彼はまだ将校の肩章をつけていなかった）、女に手を出すのを躊躇していた、そのために、一日千秋の思いで肩章を待ち焦れているのだ）、のべつ決闘ばかりしていたといった空想を語る癖も、同様に憎らしく感じていた。今でも覚えているが、いつも無口なわたしが、突然ズヴェルコフとつかみ合いを始めたことがある。あるとき彼が放課時間に、友だちと未来の情婦のことをしゃべっているうちに、とうとう日向ぼっこをしている仔犬のように浮かれだし、自分は領地の村娘を一人だっただけではおかない、それは *droit de seigneur*（領主の権利）だから、もし百姓どもが生意気に反抗したら、そういう髻むじやの悪党どもを、一人残らず鞭で叩きのめしたあげく、年貢を倍に値上げしてやるなどと、出しぬけに宣言したからである。仲間の下司どもは拍手喝采したが、わたしは取っ組みあいを始めた。それはけっして村の娘やその父親がかわいそうだったからでは

なく、こんな青二才にみんなが本気で喝采したからである。わたしはそのとき首尾よく勝ちを制したが、ズヴェルコフは馬鹿とはいいながら、快活で達な性質だったので、笑いにまぎらしてしまった。だから正直なところ、わたしの勝ちも完全なものとはいえなかった。最後に笑っただけ彼のほうに分があつたのである。その後、彼に二、三どわたしを負かしたが、別に悪意があつたわけではなく、ちよつとついでに笑いながら冗談をしたという形だつた。わたしは憎悪の念をいさながら、その返報をしようとしなかつた。卒業後、彼は一歩だけわたしに接近してきた。わたしは悪い気持ちもしなかつたので、大してそれを拒まなかつた。しかし、間もなく、当然の結果として、二人は別れてしまった。その後わたしは、陸軍中尉としての彼の成功や、その遊蕩ぶりなどを噂に聞いた。それから、また別な噂も耳に入るようになった、——彼が勤務のほうで、成功しているという消息だつた。往來で出会つても、彼はもうわたしに挨拶しなくなつた。でわたしは、自分のようなびいびいと挨拶して、沽券を下げるのが心配なのだ、と邪推した。それから、またあるとき劇場の三階で顔をあわしたが、そのとき彼はすでに参謀肩章をつけていた。そして、ある老齡の將軍の令嬢たちに、せつせと愛嬌を振り撒いていた。三年ばかり経つと、急に風采が落ちて来た。相変わらず相当に美しく、動作も軽快だつたけれど、妙に皮膚がた

るんで、脂ぶとりに肥つてきた。三十前後にはすっかりぶよぶよになってしまふのが、目に見えるようだった。そこで、今度いよいよ転任して行くズヴェルコフのために、仲間の連中が送別の宴を張ろうとしているのである。彼らはこの三年間、絶えず彼と交遊をつづけていた。そのくせ心の中では、自分たちを彼と対等の人間だとは思っていなかったのだ。わたしはそれを確信している。

シーモノフのところにいる客二人のうち、一人はフェルフィーチキンといって、ロシヤに帰化したドイツ人であった、——背が低くて猿のような顔をしているくせに、人をだれでもおちやかす馬鹿者で、わたしとは下級生時代から犬猿もただならぬ間柄だった、——むろん、しんはみじめな臆病者のくせに、下劣な人を喰ったから威張り屋で、しかも神経質な野望をいだいている。彼は目算あつて世辞を使いながら、しじゅう金を借りだすという、そうした種類のズヴェルコフ崇拜者の一人だった。もう一人の客はトルドリユーボフといって、あまりぱつとしない先生だった。背が高く冷たい顔つきをした軍人で、かなり正直者ではあつたけれど、いつも成功というものばかりありがたがつて、ただ昇進を談ずるよりほか、なんの能もない男だった。ズヴェルコフとは何か遠い親戚関係になっていた。いうも馬鹿馬鹿しいことながら、それがわれわれの間で、彼に一種の箔をつけていた。

のである。彼はいつもわたしなどまるで眼中に置いていなかったが、応対ぶりは大して丁寧といえないまでも、まあ我慢のできる程度だった。

「よかろう、一人あたたまブルーブリ当たりとすれば」とトルドリュエボフはいい出した。

「われわれの人数は三人だから、二十一ブルーブリになる、——それなら立派な食事ができるさ。ズヴェルコフはもちろん会費なしだ」

「そりや当然だよ、われわれが招待するんだからな」とシーモノフが断案を下した。

「いったい諸君は」ご主人の將軍が持っている勲章を自慢する、厚かましい下男のような態度で、フェルフィーチキンが熱くなつてえらそうに口を入れた。「いったい諸君は、ズヴェルコフがわれわれにだけ払わせると思ふかい？ そりや礼儀上、受けるには受けるだろうが、その代わり、シャンパン半ダースくらいは提供するだろうよ」

「ふむ、われわれ四人きりで、どうして半ダースなんか」ただ半ダースということばかり気にしながら、トルドリュエボフが注意した。

「それじゃ人数は三人、ズヴェルコフを入れて四人、金は二十一ブルーブリで、場所はオテル・ド・パリ、時間は明日の午後五時だ」幹事に選挙されたシーモノフが、最後の決定といった形でこう結んだ。

「どうして二十一ルーブリなんだ？」わたしはいくらか興奮してこう口を入れた。どうやらむっとしたらしい。「ぼくを勘定に入れたら、二十一ルーブリでなくて、二十八ルーブリじゃないか」

わたしがこんなふうにとつぜん仲間入りを申し込むと、非常に綺麗なやり方にみえて、みんながたちまち兜を脱いでしまい、尊敬の目をもってわたしを見るようになるだろうと、そんな気がしたのである。

「へえ、きみもお望みなのかね？」シーモノフは妙にわたしを見ないように努めながら、不満そうな調子でこういった。彼はわたしという人間を諳そらで知っていたのである。

わたしは、この男が自分の性質を知りぬいてるのだと思うと、むらむらと癩癩が起こつて来た。

「それはなぜだね？　ぼくだってやはり同窓の友じゃないか。それに、ぼくを除けものにするなんて、正直なところ、失礼といつていくくらいだよ」とわたしはまたごて始めた。

「だって、どこへきみをさがしに行けばよかつたんだい？」とフェルフィーチキンがぞんざいな調子で口を入れた。

「きみはいつもズヴェルコフと折合いが悪かつたものだからね」とトリドリユーボフは顔

をしめながら、こういう添えた。けれど、わたしはもうすっかり喰いさがって、放さなかつた。

「そんなことは、だれもとやかくいう権利はないはずだと、ぼくは思うがね」まるで天下の一大事でも起こったように、わたしは声を慄かせながらいい返した。「つまり、むかし折合いが悪かつたからこそ、いま仲間入りがしたいというのかもしれないじゃないか」

「ふむ、きみの心持ちなんか……そんな高遠な感情なんか、だれにわかるものかね」トルドリューブフはにたりと笑つた。

「じゃ、きみも入れよう」シーモノフはわたしのほうへ振り向きながら、勝手にこう決めてしまつた。「明日の午後五時、オテル・ド・パリだから、間違わないようにしてくれたまえ」

「だが、金は！」とフェルフィーチキンが、わたしのほうを顎でしゃくりながら、小さな声でいいかけたが、急にぴつたり言葉を止めた。シーモノフでさえ、へどもどしてしまつたからである。

「もうこれくらいでよかろう」と、トルドリューブフは立ちあがりながらいつた。「それほど来たいなら、来させるがいいさ」

「だって、これは、ぼくら親友だけの、内輪の集まりじゃないか」やはり帽子に手をかけながら、フェルフィーチキンは憎々しげにいった。「何も、改まった会じゃないんだから」
「ぼくらにいわせれば、ちつともきみなんかに仲間入りしてもらいたくないかもしれないんだ……」

彼らは別れて行った。フェルフィーチキンは帰りしなに、てんでわたしに挨拶しなかった。トルドリユーボフは見向きもしないで、申しわけのように顎をしゃくった。わたしと鼻を突き合わせて残ったシーモノフは、なんだかいまいますような、合点がゆかぬといった様子で、不思議そうにわたしを見つめていた。彼は腰も下ろさず立ったままで、わたしに坐れともいわなかった。

「ふむ……そう……では、明日ね。金にいますぐ払うかい？　ぼくただちよつと、確かめておきたいので」と、彼はてれた様子でつぶやいた。

わたしはかつとなった。しかし、かつとしながらも、いつの昔からかシーモノフに十五ルーブリの借金があることを思い出した。ただし、それは一度も忘れたことがないけれど、けっして払いもしなかったのだ。

「だって、シーモノフ君、察してもくれたまえ、ぼくはここへ来るとき、そんなことを知

るはずがなかったじゃないか……いまましくってたまらないんだけど、つい忘れちゃって……」

「よろしい、よろしい、どうだっていいさ。あす食事の時に払ってくれたまえ。ぼくはただ念のために……きみ、どうぞ……」

彼は急にへどもどして、前よりもつと癩な顔つきで、部屋の中を歩き廻りにかかった。歩き廻りながら、彼は踵のほうへ力を入れて、こつこつと大きな音を立て始めた。

「邪魔じゃないだろうか？」二分ばかりだんまりでいた後、わたしはこう問いかけた。

「いいや、けつして！」彼は急にびくつとした。「いや、なに、正直なところ、そうなんだよ。実はね、ぼくまだ行かなくちやならないところがあるんで……つい近所なんだがね……」彼はなんだか詫びでもするような、また多少恥じ入ったような調子で、こういう添えた。

「や、そりや、大変だ！　なんだってそういつてくれなかったんだ！」わたしは帽子をつかみながら叫んだ。この調子は、どこから出て来たかと不思議に思われるほど、くだけたものだった。

「だって、大して遠くないんだから……ほんの一足のところでね……」まるでご当人に不

似合いなせわしない顔つきで、控え室までわたしを見送りながら、シーモノフはくり返した。「じゃ、明日は正五時だよ！」と彼は階段を降りてゆくわたしのうしろからどなった。わたしが帰ったので、しごく大満悦なのだ。わたしは前後を忘れるほど腹が立った。

「ちえつ、よくまあ、本当によくまあ、出しやばる気になったもんだ！」わたしは通りを歩きながら、ぎりぎりど歯がみをした。「しかも、ズヴェルコフなんて豚の仔みたいな俗物のためにさ。当然行かないことにするんだ。当然唾を引っかけてやるんだ。何も約束に縛られてるわけじゃあるまいし。明日はさっそく市内郵便で、シーモノフに断わってやろう……」

けれど、わたしが夢中になるほど腹を立てたのは、自分が明日は出かけてゆく、意地でも出かけてゆくというのを、間違ひなく承知していたからである。わたしの出席がまづいやり方で、無作法に感じられれば感じられるほど、なおさら出かけて行くに相違ないのだ。

それにもう一つ、わたしの出席には決定的な障害があつた。金がなかつたのである。わたしの手もとには一切切で、たった九ルーブリしかなかった。そのうち七ルーブリは、明日必ずアポロンの月給として渡してやらなければならなかつた。この下男は食事手もち、

給金七ルーブリという条件で、住み込んでいたのである。

アポロンの気性から推してみても、やらないわけにはゆかなかつた。わたしの生活の癌になつてゐるこの悪党のことは、そのうちにまた話すとしよう。

とはいえ、わたしはやはり給金を渡さないで、必ず会に出席するということを、自分でちゃんと知つていた。

その晩わたしは醜悪きわまる夢を見た。それもそのはず、わたしは学生時代の懲役人じみた生活の思い出に夜つびて悩まされ、それを振り払うことができなかつたのだ。わたしをこの学校へ押しこんだのは、遠縁にあたる親戚の連中だつた。わたしはこの連中の勝手にされてゐたのだが、そのくせ彼らとはどんな関係があるのか、いつこうなんにもわかつていなかつた。——もういいかげんこの手合いの小言にいじめつけられて、もの思いに沈みがちになり、むつつり黙りこんで、人づきの悪い目つきで周囲を眺めるようになった、その頼りない孤児のわたしを、勝手にそこへ押しこんでしまったのだ。同級生は、わたしが彼らのだれにも似ていないというので、容赦のない毒々しい嘲笑でわたしを迎えた。しかし、わたしは他人の嘲笑を我慢できないたちだつた。みんながお互いに馴れあうようなふうには、安つぽく馴れあうことができなかつたのだ。わたしはたちまち彼らを憎んで、一

同と絶縁してしまい、自尊心を傷つけられたまま、神経質に高調された限りないプライドの中に閉じこもった。彼らの粗暴さがわたしの憤懣を呼びさますのだった。彼らはシニツクにわたしの顔を笑い、わたしの粉袋みたいな恰好をわらった。そのくせ、彼ら自身がどんなに馬鹿げた顔をしていたかしのれないのだ！ わたしたちの学校へ入ると、みんなの顔の表情が格別ばかりで、生まれ変わったようになるのであった。どれだけ大勢の美少年がわたしの学校へ入ってきたかもしれないが、何年かたつうちに、見るもいまわしいような顔つきになって来た。まだ十六ばかりの年に、わたしは気むずかしい目つきで、みんなの顔をあきれて眺めたものである。もうその時分から、彼らの考え方の浅薄さや、彼らの仕事、遊戯、会話の愚かしさにわたしは一驚を吃した。彼らは必要欠くべからざるものを理解せず、感激や驚異に値する事柄に興味をもたなかったので、わたしは自然かれらを自分より低級な人間と考えるようになった。それは辱しめられた自尊心の当然な帰結などではない。またお願いだから、胸の悪くなるほど飽きあきした決まり文句、——『お前はただ空想していたばかりだが、彼らはもうその頃から、現実生活を理解していたのだ』なんて公式的な文句で、わたしにお説教しないでもらいたい。彼らは現実生活も何もまるで理解していなかった。誓つていうが、つまりその点こそ、わたしを憤慨させた最大原因な

のである。実際はその正反対で、彼らは明々白々、一見して目に映るような現実を、あきれ返るほど馬鹿げたふうに受け入れて、もうその当時から、ただ成功のみをありがたがる癖がついてしまっていたのだ。たとえどんなに正しいものでも、辱しめられ虐げられていゝるものは、なんでも情け容赦なく冷笑した。彼らは官位を叡知と見なし、十六やそこらで、もうぬくぬくと暖まれる地位を空想していた。むろん、それは少年にまぬがれ難い愚かしさや、彼らの幼年時代を絶えず圍繞していた良からぬ手本によることも、少なくなかったに相違ない。彼らの淫蕩さは醜怪なくらいであつた。むろん、そこにも外部からくつつけた人為的なシニズムのほうが多く、青春と新鮮の感じがその淫蕩の間から閃いていたのは、いうまでもないことだけれど、しかし彼らにおいては、新鮮ささえ醜い感じを与え、その現われはなんとなくいじけているのであつた。わたしは心底から彼らを憎んでいたが、或いは自分のほうがかえつて劣等だつたのかもしれない。彼らもまた同じ態度をもってわたしにむくいながら、嫌悪の情を隠そうともしなかつた。けれど、わたしはもはや彼らの愛情などを望まなかつた。それどころか、絶えず彼らの屈辱に渴していたのだ。わたしはみんなの嘲笑を回避するために、わざとできるだけ成績をあげること努め、優等生の中へ割りこむことができた。これは彼らに対して効果があつた。そのうえわたしがしだいしだ

いに、彼らの手に合わない本を読んだり、彼らが聞いたこともなければ、学校の専修科目の中に入っていないようなものを理解しているのが、彼ら一同にもわかるようになった。みんなはそれを奇怪なことのように、冷笑の目をもつて眺めていたが、精神的には屈服したのである。まして、教師たちがこの点でわたしに注意を払うようになってから、なおさら利き目があった。冷笑はやんだけれども、一脈の敵意が残った。そして、冷ややかな緊張した相互関係が固定してしまったのである。しかし、最後には、わたし自身が持ち切れなくなつて来た。年とともに人懐かしさと、交友を要求する念が、だんだん強くなつていった。わたしは二、三のものに接近しようともしてみた。けれど、この接近はいつも不自然なものになつて、自然と消滅してしまうのであつた。一時はわたしにも親友らしいものがあつた。しかし、わたしはすでに内心暴君になつていたので、無限に相手の魂を支配しようとした。わたしは周囲のいっさいに對する侮辱の念を、彼の心に植えつけようと思ひ、傲慢な態度で完全に周囲の世界と絶縁することを、彼に要求したのである。わたしは自分の熱烈な友情でこの男をびつくりさせてしまった。彼はとうとう涙を流したり、痙攣を起こしたりするまでになつたのである。それは魂までも親友に捧げつくすような、無邪気な男であつたが、彼が身も心もわたしに捧げつくした時、わたしはさつそく彼を憎み始め、

自分の傍から突き放してしまった、——それはまるで、彼という人間がわたしに必要だったのは、凱歌を奏して征服する、ただそれだけのためにすぎなかったような形なのである。とはいえ、わたしはだれも彼も征服するわけにゆかなかった。この親友はやはり仲間のだれ一人にも似ないで、稀れに見る例外現象だったのである。学校を出てから、まず第一にやったわたしの仕事は、自分の志した専門の勤めを放棄することだった。それはいつさいの絆を断ち切つて、過去を呪い、粉微塵に吹き散らしてしまうためなのである……こういうわけなのに、なぜあんなシーモノフ輩のところへのこのこ出かけていったのか、われながら気がしれない……

翌朝早くわたしはベッドから跳ね起きると、わくわくしながら飛びだした。まるで今にもすぐいつさいが成就しかかったようなあんなばいなのだ。けれども、今日は何かしらわたしの生涯における根本的な転機がやって来る、必ずやって来るに相違ない、とこんなふう信じていた。慣れないためかしらないが、とにかくわたしはずっと一生涯、どんなにつまらない外面的な事件が起こつても、すぐに何かしら生涯の根本的な転機がやって来るよな気がしてしようがなかった。もつとも、わたしはいつものとおりに勤めに出かけたが、準備のために、いつもより二時間ばかり早く抜けて帰った。何よりも肝腎なのは、第一着

に行かないことだ、——とわたしは考えた。——さもないと、うちようてんになつて喜んでいられる恐れがある。しかし、こういつた肝腎なことが山ほどあつて、へとへとなるほどわたしを興奮させるのであつた。わたしはもう一ど手ずから靴をみがき直した。アポロンは天地が引つくり返つても、日に二度も靴を磨こうとはしない。そんなことは法にないというに違いない。わたしは何かの拍子でアポロンに見つけられて、後で軽蔑されないように、そつと控え室からブラシを盗み出して、靴磨きをやつた次第である。それから、仔細に着物を点検してみた結果、何もかも着古され擦り切れているのを発見した。わたしがあまりだらしなくし過ぎたのだ。役所用の制服はきちんとしていたかもしれないが、しかし制服を着て宴会に出るわけにはゆかない。何よりも困つたことには、ズボンの膝のま上に大きな黄いろいしみがあつた。もうこれ一つだけで、わたしの尊厳が九分どおりまで帳消しになつてしまうのを、前から予感していたのである。しかし、そんなことを考えるのは実にさもしいということも、わたしはやはり承知していた。『が、いまは考えごとなどしている場合でない。これから現実がやつて来ようとしているのだからな』とわたしは考えて、意気銷沈の形だつた。また同時に、これらの事実を馬鹿馬鹿しく誇張しているということも、わたしは立派に知りぬいていたのだが、いかんともせんかたない、

わたしはもう自己制御の力がなかった。悪寒に全身をがたがた慄わせていたのである。あの「卑劣漢」のズヴェルコフが、さぞ高慢ちきな冷たい態度で、わたしを迎えることだろう。あの鈍感なトルドリユーボフが、さぞ泰然自若とした鈍い軽蔑の目でわたしを眺めることだろう。それから、あの虫けら同然のフェルフィーチキンが、ズヴェルコフのお気に入ろうと思つて、さぞ厚かましいいやらしい声で当てつけがましく、ひひひと笑うことだろう。またシーモノフは、それをすっかり心の中で十分に知りぬいているくせに、さぞかしわたしの卑小な虚栄心と浅薄な気持ちを軽蔑することだろう。——それに、何よりたまらないのは、これらすべてがいかににもみじめで、非文学的で、日常茶飯事じみていることだ。わたしは絶望の念をいだきながら、こんな光景を心に浮かべたのである。もちろん、あたまから行かないことにすれば一等級なのだ。が、それは何よりも不可能なことだった。わたしは何かに牽引を感じたが最後、もう真つ逆さまに飛びこんでしまわなければ、承知できないたちだった。『おい、どうした、おじ氣づいたんだろう、現実を恐れたんだろう、臆病者！』と、その後一生涯、自分を嘲弄するに相違ない。それどころか、あの『ごろつき』どもに、わたしはけつして自分で想像しているほどの臆病者でないということ、堂々と証明してやりたくてたまらなかった。それどころか、烈しい熱病じみた臆病の発作に

駆られながら、わたしは彼らを征服して凱歌を奏し、『高遠なる思想と疑いもない機知』のために、彼らを魅了してやりたいと、こんな空想さえ描くのであった。彼ら一同はズヴェルコフを見棄ててしまう。すると、彼は脇のほうに取りのこされ、恥じ入って黙りこんでいる。こうしてわたしはズヴェルコフを圧倒してしまうのだ。それから後で彼と和睦して、心から隔てなく、君僕で呼び合いながら乾盃してもいい。しかし、何よりも癪にさわるまいましいことは、実際のところ、そんなものはわたしにとつて毫も必要がないということを、その時からもうちゃんと知っていたのである。わたしはけつして彼らを圧倒したり、征服したり、魅了したりすることなんか、まるで望んではないのだ。たとえその目的を達したとしても、そんな結果などはわたし自身がまず第一に、びた一文にも値踏みしなかつたに相違ない、それをわたしははつきり確実に知っていたのだ。ああ、どうかしてこの一日が少しも早く過ぎてしまうようにと、わたしはどんなに神に祈ったかしれない！ 名状しがたい憂愁をいだきながら、わたしは窓に近よって通風口を開き、霏々ひひとして降ってくるべた雪の、どんよりと黄いろい薄闇を見透かしたものである……

とうとうわたしの部屋にかかっているやくぎな柱時計が、じいじいとしゃがれ声で五つ打った。わたしは帽子をとった。そして、もう朝から給金の支払いを待ち通しながら、馬

鹿の強情で自分からは切りだそうとしないアポロンのほうを、なるべく見ないように気をつけながら、傍を通りぬけて戸口を出た。わぎとなけなしの五十コペイカを奮発して、上等の辻馬車を備い、紳士然とオテル・ド・パリへ乗りつけた。

4

わたしはもう前の日から、自分が第一番に乗りつけるのを承知していた。しかし、問題は一着とか、二着とかいうことではなかった。

彼らはまだだれも来ていなかったばかりでなく、わたしたちの部屋をさがし当てるのさえやつとのことだった。テーブルの準備なども、まだまるでできていなかった。いったいこれはどうしたことだ？ いろいろとききただしたあげく、やつとボーイの口から、食事は五時でなくて、六時の注文になっていることを確かめた。食堂のほうでも、それは間違いないと断言した。もうこのうえたずねまわるのは、恥ずかしい気持ちさえしてきた。まだやつと、五時二十五分だった、もし時間を変更したのなら、いずれにしても通知してくれるのが本場で、そのため市内郵便というものもある、それなのに、わたしを自分自身に

対しても……ましてボーイたちに対しても、こんな『不体裁』な羽目に立たずとは。わたしは腰を下ろした。ボーイが食卓にクロースをかけ始めた。ボーイの手前に対しても、なんだかよけい癩にさわってくる。六時近い頃、いくつかランプのともっている部屋の中へ、更に蠟燭が持ちこまれた。が、それにしてもボーイのやつ、わたしが来た時すぐにそれを持って来ようとはしなかったのである。隣りの部屋では、見たところ怒りっぽい様子をした陰気くさい二人の客が、別々のテーブルで黙りこくって食事をしている。遠く隔てた部屋の一つはやけに騒々しくて、喚き声さえしていた。大勢の連中がどつと笑う声も響いてくるし、黄いろい声で何か下品なフランス語をしゃべるのも聞こえた。婦人連も交った宴会らしい。ひと口にいえば、むかむかしてくるほどいやらしかった。こんな気持ちの悪い思いをさせられるのは、めつたにないことだったので、正六時に仲間のものがいつせいに姿を現わした時、わたしは最初の一瞬間、さながら救い主のように彼らを喜び迎えて、当然むっとした顔つきをしていなければならぬのを、ほとんど忘れはてないばかりだった。

ズヴェルコフはいかにも指揮官然として、真つききに入ってきた。彼も、そのほかの連中も、面白そうに笑っていたが、わたしの顔を見ると、ズヴェルコフはちよつと容態ぶつて、悠々と傍へ寄ってきた。そして、しなでも作るように、軽く小腰をかがめながら、愛

想よく、といつても度をすぎないように、わたしに片手をさし伸べた。それはまるで將軍が部下に対するような、警戒の念を含んだ慇懃さで、手をさし伸べながらも、何かこう身を護るような恰好だった。ところが、わたしはその正反対を想像していたのだ。彼は入つて来るといきなり、例の細いきいきい声で磊落な笑ひ方をした後、開口一番、平凡な洒落や警句を飛ばすに相違ないと思つて、わたしはもう前日からそれに対する心がまえをしていた。けれど、こうした高慢ちきな恩寵の態度は、夢にも思ひ設けないところだった。してみると、彼は今あらゆる点でわたしより無限にえらいのだと、心底からうぬぼれているのだろうか？ もし彼がこの將軍気取りでわたしを侮辱しようとおもっているだけなら、それはまだなんでもないことだ。それなら、いい加減に唾でも引つかけてやればすむことだ、とわたしは考えた。けれど、侮辱してやろうなどという気は少しもなく、自分のほうがわたしより無限にえらくつて、わたしに対しては保護者然とした見方しかできないなどという考えが、本気である男の馬鹿頭に浮かんだとすれば？ わたしはこう想像しただけで、もう息がつまりそんな気がした。

「ぼくはね、きみが仲間に入りたいという話を聞いて、びっくりしてしまったよ」彼はしゅっしゅつと舌纏れのするような調子で、いやに言葉尻を引きながら、こういいだした。

こんな癖は前にけつしてなかったのだ。「きみとはどうしたものか、いつもかけちがつて逢わなかったね。きみはぼくたちを避けるようにしていたらしい。それはとんだ勘違いだよ。ぼくたちはきみの考えるほど恐ろしい人間じゃないからね。いや、なんにしても、旧交を暖めるのはゆーかーいだよ……」

こういいながら、彼は無造作にくるりとうしろを向いて、帽子を窓の上へ置いた。

「もう長く待ったかい？」とトルドリユーボフはたずねた。

「ぼくはきのう指定されたとおり、正五時にやって来たんだ」間近かな爆発を予報するよ
うな、いらいらした調子で、わたしは声だかにこう答えた。

「いったいきみは時間の変更を知らさなかったのかい？」トルドリユーボフはシーモノフ
のほうへ振りむいた。

「知らさなかった。忘れちゃったんだ」と、こちらは答えたが、いっこう慚愧の色もなく、
わたしにあやまろうとさえないで、前菜の注文に行った。

「じゃ、きみはもうここに一時間からいたんだね！ おやおやかawaiiそうに！」ズヴェル
コフは嘲けるように叫んだ。彼の観念によると、それは本当に恐ろしく滑稽なことに相違
なかったからである。彼の後から、まるで小犬のように響きの高い下劣な声で、フェルフ

イーチキンの畜生がきやつきやつと笑いだした。わたしの立場がとても滑稽で、笑止千万に思われたのである。

「ちつともおかしかありやしない！」わたしはますますいら立ってゆきながら、フェルフイーチキンにどなりつけた。「悪いのはほかの連中で、ぼくじゃないんだ。ぼくに通知するのを怠ったんじゃないか、それは……それは……それは……もう馬鹿げてる」

「馬鹿げているだけじゃなくて、まだほかに何かあるよ」無邪気にわたしの肩を持ちながら、トルドリユーボフはこうつぶやいた。「きみはあまりおとなし過ぎるよ。これはもう失敬というものだ。むろん、意識したわけじゃないがね。いったいどうしてシーモノフがそんなことを……ふむ！」

「もしぼくがそんな目にあわされたら」フェルフイーチキンが口を入れた。「それこそぼくは……」

「じゃ、きみ、何か注文して、取り寄せたらよかったのに」とズヴェルコフがさえぎった。「それとも、みんなを待たないで、いきなり、食事を頼んだらよかったのさ」

「断わっておくが、ぼくはだれの許可を受けなかったって、勝手にそうしたかもしれないんだ」とわたしは断ち切るようにいった。「ぼくが待ったのは、つまり……」

「諸君、席に着こうじゃないか！」そこへ入って来たシーモノフはこう叫んだ。「用意はすつかりできた。シャンパンはぼくが保証する。とび切り上等に冷えてるよ……だって、ぼくはきみの宿所を知らなかつたんだからね、どこもたずねようがないじゃないか？」と彼はだしぬけにわたしのほうへふり向いたが、今度も妙にわたしを見ないようになしていた。明らかに、何か底意を持っているのだ。してみると、昨日あの後でとつくりと考えたのだらう。

一同は席についた。わたしも腰を下ろした、テーブルは円卓だった。わたしの左手にはトルドリユーボフ、右手にはシーモノフ、ズヴェルコフはむかいに坐った。フェルフィーチキンは彼とならんで、トルドリユーボフの隣りに陣取った。

「ときにきみは、役所……づとめかね？」とズヴェルコフは相変わらず、わたしのお相手を勤めてくれた。わたしががてられているのを見て、彼は本当にわたしをいたわってやらなければならぬ、いわば励ましてやる必要があると、真面目に思いこんだらしい。『いったいあいつはおれにビンでもほうりつけてもらいたい気なのか？』と、わたしは内心憤怒に燃えながら考えた。こういう席に慣れないために、なんだか不自然なほど早くいら立ってきた。

「**局に勤めているよ」わたしは皿をみつめながら、ぶっ切ら棒に答えた。

「へえ……そのほうがきみに、ゆ、有利なかね？ いったいどういうわけで、前の口をや、やめなければならなくなつたんだい？」

「ぼくがや、やめなければならなくなつたのは、前の口がいやになつたからさ」もうほとんど自制力をなくしてしまつて、わたしは相手の三倍も長く言葉を引っ張つた。フェルフィーチキンはぷつと噴きだした。シーモノフは皮肉な目つきでわたしを眺めた。トルドリューボフは食事の手を止めて、さももの珍しげにわたしをじろじろ見廻し始めた。ズヴェルコフはむつとしたが、気のつかないふりをした。

「でーえ、現在の内容は？」

「内容とはなんのことだね？」

「つまり、俸給のことかね？」

「全体、きみはぼくを試験しているのかね！」

でも、わたしはとにかく自分のもらっている俸給額を、すぐに白状してしまつた。わたしはいたく赤面した。

「あまり豊かでないね」とズヴェルコフはもったいらしくいった。

「さよう、それじゃカフエー・レストランで飯を食うわけにゆかないや！」とフェルフィーチキンが厚かましい調子でいい足した。

「ぼくにいわせれば、それはむしろ貧弱なくらいだ」とトルドリユーボフは本気でいった。「きみは実に痩せたね、実に変わったね……あのとき以来……」とズヴェルコフはいい添えたが、それには多少の皮肉も交っていた。彼はわたしの顔や身なりを、一種ずうずうしい憐憫の表情で見廻すのであった。

「そう人をまごつかすのはたくさんだよ」フェルフィーチキンは、ひひひと笑いながら、こう叫んだ。

「きみ、ことわっておくが、ぼくはまごついてなんかいやしないよ」わたしはとうとう堪忍袋の緒を切らした。「いいかね！ ぼくはここで、『カフエー・レストラン』で、自分の金を払って食事をしているんだ。人の金じゃないんだから、それをご承知ねがいたい。ムシユウ・フェルフィーチキン」

「なあーんだって！ われわれのうちでだれが金も払わないで、食事をしているというのかね？ きみはまるで……」フェルフィーチキンは茹で蟹のように真っ赤になり、喰いきそうな目つきでわたしを睨めながら、くっつかかった。

「なあーんでもないよ」少し薬が利きすぎたと、感じながら、わたしはこうやり返した。

「まあ、それよりもつと気の利いた話をしたら、どうかと思うね」

「きみはどうやら、自分の知恵を見せようというつもりらしいね？」

「ご心配はいらないよ。それはこの席じゃまったくよけいなことだから」

「いったいきみはどうしたというんだね、え？　がやがやと小うるさいことばかりいつて、

——え？　まさか気でも狂ったんじやあるまいね、きみのお役じよで勤めているうちにさ
？」

「たくさんだよ、諸君、たくさんだよ！」とズヴェルコフが威を帯びた声で叫んだ。

「なんとという馬鹿げたことだ！」とシーモノフがぼやいた。

「本当に馬鹿げてる。われわれは、愛すべき親友の行を送るために、隔てのない会合を開いたのに、きみはぐずぐず文句ばかりいつて」トルドリユーボフはわたし一人だけのほうへ向き直つて、ぞんざいな調子でこういつた。「きみは昨日、自分から押しかけ会員になつたんだから、一座の興をさままさいでくれたまえ……」

「もうたくさん、もうたくさん！」ズヴェルコフはどなった。「よしてくれられたまえ、諸君、そんなことは場所がらに合わないよ。それより、ぼくが一昨日あやうく結婚し損つた顛末

を、ひとつご披露に及ぼう……」

そこで、この先生が一昨日あやうく結婚しそとなった一件について、いかがわしいお茶番ばなしが始まった。もつとも、結婚らしいことはひと口も出ないで、彼の話には將軍だとか、大佐だとか、侍従武官さえも、うるさいほど飛びだして、しかもズヴェルコフはその中で、牛耳をとっているような形だった。わが意を得たりというような笑い声が、一座に起こった。フェルフィーチキンは変な黄いろい声さえ立てた。

一同はわたしなど見向きもしなかった。わたしは押し潰されたような恰好で、しょんぼりと坐っていた。

『ああ、情けない、これがいったいおれの交わるべき仲間だろうか！』とわたしは考えた。『なんだっておれはこんな連中の前で、馬鹿の役廻りを演じているのだろう！ それにしても、おれはフェルフィーチキンにあまり勝手な口を叩かせ過ぎた。あの馬鹿どもは、おれをここに同席させたので、名誉でも授けたような気でいやがる。ところで、名誉を授けるのはおれのほうで、けつしてやつらじやないんだ。それが、やつらにはわからないんだからな！ 「痩せた！」とか「みなりが！」とかいいやがって、ああ、いまましいズボンだ！ ズヴェルコフのやつ、ついさつきも、膝っこの黄いろいしみに目をつけやがっ

た……いつたいここで何をぐずぐずしていることがあるんだ！ さっそく今すぐテーブルから立ちあがって、帽子を取ると、ひと言も口をきかないで、さっさと行ってしまおう……つまり、軽蔑の念を示すためにだ！ そして、明日は決闘でも申し込むのだ。いまましい畜生めら。なにも七ルーブリの会費なんか惜しむに当たらない。ひよっとしたら、やつら本当にそう考えるかもしれないぞ……くそ喰らえだ……おれは七ルーブリの金なんか惜しくないぞ！ いますぐ出て行くんだ！……』

だが、むろん、わたしはい残った。

わたしはむしやくしやまぎれに、赤葡萄酒ラフイットやシェリー酒をコップでがぶがぶ飲んだ。ふだんあんまり飲まないの、みるみるうちに酔いが廻り、酔いが廻るとともに、いまましさの念がつのつていった。だし抜けに、みんなのやつらを思いきりこっぴどく侮辱して、それからさっさと出て行こうという気持ち、急にむらむらと起こった。うまくきつかけをつかんで、自分の本性を見せてやるのだ。そして、滑稽なやつだけ、頭のいい男だといわせてやろう……そして……そして……ひと口にいえば、あんなやつら、どうともしやがれだ！

わたしはどんよりとした目つきで、ずうずうしく一同を見廻した。けれど、彼らはわた

しのことなど、まるつきり忘れてしまったようなふうだった。彼らは騒々しく、賑やかだった。話をしているのは、いつもズヴェルコフだった。わたしは耳を傾け始めた。ズヴェルコフは、だれかしら、花のようにあでやかな婦人のことをしゃべっていた。彼はとうとうこの婦人に愛の告白をさせたが（それはむろん大ぼらなのである）、この事件でかくべつ力を貸したのは、彼の親友である軽騎兵将校のコーリヤとかいう男で、三千人の農奴をもった公爵だとのことである。

「それにしても、その三千人の農奴をもっているコーリヤという人は、いつころここに顔を見せないね、きみを見送りにさ」わたしはだしぬけに話へ口を入れた。

一同はちよつとしばらくのあいだ口をつぐんだ。

「きみはもう今から酔っぱらっているんだね」トルドリユーボフは、馬鹿にしたようにわたしのほうを尻目にかけてながら、やつとのことこでいやいやわたしの存在を認めることにした。ズヴェルコフは無言のまま、まるでわたしが虫けらかなんぞのように、じろじろひとを見廻していた。わたしは目を伏せた。シーモノフは急いでみんなの盃へシャンパンを注ぎ始めた。

トルドリユーボフは盃を挙げた。すると、わたしを除けてだれも彼も、その例に倣った。

「きみの健康と道中の無事を祈る！」と彼はズヴェルコフにむかって叫んだ。「諸君、われわれの過去と未来を祝して飲もうじやないか、ウラー！」

一同は盃を乾し、ズヴェルコフのところによつていき、抱き合つて接吻した。わたしは身動きもしなかつた、わたしの前には、少しも口もつけない盃が、なみなみとシャンパンを湛えたまま置いてあつた。

「きみはいつたいそれを飲まないつもりかね？」我慢の緒を切らしたトルドリユーボフが、もの凄い剣幕でわたしのほうへ振り向きながら、こうどなりつけた。

「ぼくはまず自分のほうからテール・スピーチをやつて……それから後で乾盃するつもりだよ、トルドリユーボフ君」

「なんていやな野郎だ！」とシーモノフがつぶやいた。

わたしは椅子に腰をかけたまま、ぐつと反り身になって、何か異常な行為を秘かに心がまえながら、まるで熱に浮かされたような気持ちで盃を手にとつたが、まだ何をいうつもりか、自分でもわからなかつたのである。

「謹聴！」^{シランス}フェルフィーチキンがわめいた。「さあ、これから大いに蘊蓄をお傾け遊ばすぞ！」

ズヴェルコフはことの真相を解したらしく、くそ真面目に待ち設けていた。

「ズヴェルコフ中尉殿」とわたしはきり出した。「まずご承知を願っておくが、ぼくは空な美辞麗句や、そういうものをもてあそぶ連中や、いやに胴の締った洒落た上着などが、たまらなくいやなんだ……それが第一の要点で、その次に第二の要点が控えているのだ」

一座は恐ろしくざわついた。

「第二としては、仇つぽい姐ねえさんや、その尻を追い廻す連中が、虫唾の走るほどいやなんだ。ことに後者をもつてしかりとする！ 第三の要点としては、真実と誠意と廉潔とを愛する」わたしはほとんど機械的に言葉をつづけた。というのは、なんだってこんなことをしゃべるのか、われながらわけがわからず、恐怖のあまり身内に氷のような寒さを覚え始めたからである……「ぼくは思想を愛するんだよ。ムシユウ・ズヴェルコフ。ぼくが愛するのは対等関係を基礎とする真の友情であって、けっして……そのぼくが愛するのは……だが、なに、かまうことはない！ ぼくはきみの健康を祝して飲むよ、ムシユウ・ズヴェルコフ。まあ、せいぜいチエルケス女をまよわして、祖国の敵に鉄砲玉を喰らわせたまえ。そして……そして……きみの健康を祝す、ムシユウ・ズヴェルコフ！」

ズヴェルコフは椅子から立ちあがって、わたしに会釈しながらいった。

「きみに深く感謝するよ」

彼は無性に腹を立てて、顔色まで真っ青にしていた。

「畜生！」テールブルを拳固で撲りつけながら、トルドリユーボフは唸るようにいった。

「もう承知ならん、あんなことをいうやつは、びんたを喰らわしてやるのが当たり前だ」とフェルフィーチキンは金切り声を立てた。

「追んだしちまえ！」とシーモノフがつぶやいた。

「もうひと言もいっちゃいけない、諸君。指一本うごかしちゃいけない！」一座の憤懣を制しながら、ズヴェルコフは荘重な声で叫んだ。「諸君の好意は感謝するが、しかしぼくはね、どれだけあの男の言葉を尊重しているか、自分で立派に証明して見せるから」

「フェルフィーチキン君、きみはいまいった言葉に対して、さっそくあすにも、ぼくの満足するような処置をとってもらわなくちゃ！」わたしはものものしくフェルフィーチキンのほうへ振り向いて、声だかにこういった。

「というのは、決闘のことかね？ よろしいとも」と相手は答えた。が、わたしの挑戦はいかにもわたしの風采に不似合いで、ひどく滑稽に見えたに相違ない。一同は腹をかかえて笑い崩れた。フェルフィーチキンもそれに倣ならった。

「そうさ、むろんあんな男は打つちやつとくんた！ だって、もうすっかりべろんべろんに酔っているんだからな！」トルドリユーボフは嘔んで吐きだすようにいった。

「あんな男を仲間に入れるなんて、実にわれながら許すべからざる失態だった！」とまたシーモノフがつぶやく。

『さあ、いまこそやつらにビンを投げつけてやる時だ』とわたしは考えながら、ビンを取り上げた。そして……自分の盃になみなみと注いだ。

『いや、いつそ最後まで尻を据えてやれ！』とわたしは考えつづけた。『諸君、もしぼくが帰ったら、諸君はさぞのうのうすることだろうが、けっして、けっして。わざと意地でも、きみたちなんかまるで眼中にないということを思い知らせるために、最後まで尻を据えて飲んでいてやる。尻を据えて飲んでやるとも。だって、ここは料理屋で、おれは木戸を払っているんだからな。尻を据えて飲んでやるとも。だっておれはきみがたを、将棋の歩ほどにしか考えていないんだからな。歩も歩、本当に存在していない歩なんだ。尻を据えて飲んでやるとも……それどころか、気が向いたら唄でもうたつてやる。そうとも、うたわなくてさ。だって、うたう権利をもっているんだから……ふむ！』

しかし、わたしは歌わなかった。わたしはただだれの顔も見ないように努めていた。思

いつきり独立不羈の態度をとりながら、彼らのほうからさきに話しかけるのを、今か今かと待ち受けていた。けれども、悲しいかな、彼らは話しかけようとしなかった。この瞬間、わたしはどんなに、本当にどんなに彼らと和睦を望んだかしのれない！ 八時も打ち、ついに九時が打った。彼らは食卓から長いすに移った。ズヴェルコフは寝いすの上に長々と寝そべって、片足を小さな円テーブルにのせた。そこへ酒も運ばれた。彼は約束どおり、三本だけ自腹を切ったのである。わたしはむろんよばれなかった。一同は彼をとり巻いて、長いすに陣取った。彼らはほとんど敬虔の色さえ浮かべながら、彼の饒舌を聞いていた。察するところ、彼はみんなに好かれていたらしい。『なんのためだろう？ いったいなんのためだろう？』とわたしは腹の中で考えた。ときどき彼らは酔っぱらいらしい歓喜に駆られて、互いに接吻し合った。彼らは、コーカサスのことや、真の情熱とは何ぞやということだの、ガリビツクのことだの、勤務上有利な場所のことだの、それから軽騎兵のポドハルジェーフスキの収入はどれくらいあるかだの、そんな話をしていった。この軽騎兵を個人的に知っているものは、彼らの中に一人としていなかったのだが、みんなはこの未知の男にしこたま収入があるといって、嬉しがっているのであった。それから、同じくだれ一人見たこともないD公爵令嬢の並み並みならぬ美貌や、優雅なものごしも、噂に上った。

そして、最後には、シェイクスピアが永遠に不朽だということまで行ってしまった。

わたしはさげすむような微笑を浮かべながら、長いすの真正面にあたる部屋の反対側を、テーブルから煖炉のところまで、壁に沿って往ったり来たりした。わたしは彼らなどが相手にしてくれなくとも、平気で澄ましていられるということをし、一生懸命に見せつけようと骨折った。そして、ときおり踵のほうに力を入れながら、わざと靴の音をがたがたさせた。けれど、すべては徒労に終わった。かえって彼らのほうがなんの注意も払わなかったのである。わたしは辛抱づよくも八時から十一時まで、テーブルから煖炉へ、またその反対に煖炉からテーブルへ、彼らのまん前をいつも同じところばかり、こつこつと歩きつづけた。

『おれはただこうして勝手に歩いているんだから、だれもこれを差し止めるわけにはゆかないぞ』部屋へ入って来たボーイは、幾度も立ちどまって、わたしをじろじろ眺めた。あまり頻繁に向きを変えるので、わたしはどうとうめまいがしてきた。ときどき瞬間的に、夢にでもうなされていような気がした。この三時間の間に、わたしは三ど汗をかいて、三どその汗が乾いた。どうかすると、今後十年か二十年、あるいは四十年たっても、わたしは依然として四十年前に体験したこの瞬間、——全生涯を通じて最も穢らわしい、滑稽

な、恐ろしいこの瞬間を思い起こして、嫌悪と屈辱を感じるだろう、——こういつた想念がまるで毒矢のように、深刻な痛みをもたらしながらわたしの心に突き刺さった。これ以上無良心な態度で、われから進んで自分をこんな屈辱に陥れるのは、もはや不可能なわざだった。わたしは十分完全にこれをわきまえていながら、それでも相変わらずテーブルから煖炉へ、それからまたその反対へと、歩きつづけていた。『おお、おれがどんなに優れた感情や思想をもつ力があるか、どんなにおれが発達した頭脳をもっているか、それをきみたちが知ってくれたら！』わたしはときどき心のなかで、敵の一党が陣取っている長いすのほうへ話しかける気持ちで、こんなことを考えるのであった。けれど敵の一党は、まるでわたしなど部屋にいないような態度をとっていた。一ど、たった一どだけ、彼らはわたしのほうへ顔をむけた。それはズヴェルコフがシェイクスピアのことをいい出した時である。わたしはいきなり軽蔑しきったように、からからと高笑いした。いかにもわざとらしく、穢らわしそうな表情で鼻を鳴らしたので、彼らは一時に話をぷつりと切った。そして、ものの二分ばかり、笑いもせずに真面目くさって、わたしがテーブルから煖炉まで壁伝いに歩き廻りながら、彼らに一顧の注意もむけないでいる様子を、じっと観察していた。しかし、結局なんの効果もなかった。彼らはやはり話しかけようともしないで、二分ばかり

りたつたら、またわたしをうつちやってしまった。十一時が打った。

「諸君！」ズヴェルコフが長いすから腰を上げながら、こう叫んだ。「これからみんなであすこへ行くんだ」

「もちろん、もちろんだとも！」と、ほかの連中もこれに和した。

わたしはいきなりズヴェルコフのほうへくると振りむいた。わたしはすっかりへとへとに疲れて、神経が揉みくたになつていたので、たとえわれとわがのどを搔き切つても、とにかく片がつけてしまいたかつた。わたしは熱病にでもかかっているようだった。汗に濡れた髪の毛が、額やこめかみにへばりついたまま、乾いていた。

「ズヴェルコフ！　ぼくはきみに謝罪する」とわたしは断固たる調子できつぱりといった。
「フェルフィーチキン、きみにも謝るよ。そして、諸君一同にも同様だ。ぼくはみんなを侮辱したんだ！」

「ははあ！　決闘は大して嬉しいものじゃないからな！」フェルフィーチキンは毒々しい調子で、齒の間から押しだすようにこう言った。

わたしは心臓をぐさと突かれたような気がした。

「いや、ぼくは決闘を恐れているんじゃないよ、フェルフィーチキン！　ぼくは、明日に

も鬪うのを辞さないよ。ただしそれは、いったん仲直りをした後だ。ぼくはむしろ主張する。だから、きみはそれを拒むわけにゆかないよ。ぼくは決闘を恐れていないということ、きみに証明してやりたい。まず最初にきみが引き金を引くんだ。するとぼくは空へ向けて放すことにするよ」

「自分で勝手な気休めをいつてやがる」とシーモノフが口を挟んだ。

「なに、頭の調子が狂ったんさ！」とトルドリユーボフが応じた。

「まあ、そこを通してくれたまえ、なんだって人の通り道に頑張ってるんだ！……え、いったい何用なんだね？」とズヴェルコフはさげすむように答えた。

彼らはみんな真つ赤な顔をして、目をぎらぎら光らしていた。かなり飲み過ぎたのだ。

「ぼくはきみの友誼を望むんだよ、ズヴェルコフ。ぼくはきみを侮辱したが、しかし……」

「侮辱したって！ きーみが！ ぼーくを！ ねえ、きみ、たとえどんな場合でも、またどんなことがあるうとも、きみがぼくを侮辱することなんかできないよ！」

「もうたくさんだ、どいてくれたまえ！」とトルドリユーボフは力み返った。「さあ、出かけよう」

「オリンピヤはぼくのものだぜ、諸君、ちゃんと約束しておこう！」とズヴェルコフは叫

んだ。

「われわれはあえて争わないよ！ 争わないよ！」と一同は笑いながらいった。

わたしは唾を吐きかけられたような気持ちで、そこにただずんでいた。酔漢の一隊はどやどやと部屋を出て行った。トルドリユーボフは何やら馬鹿げた歌をうたいだした。シーモノフはボーイにチップをやるために、ほんのしばらく後へ残った。わたしは不意にその傍へ寄って行った。

「シーモノフ！ ぼくに六ルーブリ貸してくれたまえ！」わたしはやけ半分にきつぱりといった。

彼はすっかり度胆を抜かれて、妙な鈍い目つきでわたしを眺めた。彼もやはり酔っているたのである。

「いったいきみもぼくらといっしょにあすこへ行くのかい！」

「そうさ！」

「ぼく、金なんか持っていないよ！」と彼は断ち切るようにいって、馬鹿にしたようににやりと笑い、そのまま部屋を出て行った。

わたしはその外套を引つつかんだ。それはもう悪夢にうなされているような気持ちだっ

た。

「シーモノフ！ ぼくはきみが金を持っているのを見たんだよ！ それなのに、なんだつてぼくの頼みを拒絶するんだ？ いったいぼくがやくざ者だともいうのかい？ ぼくの頼みをことわるには、よく気をつけなくちや駄目だよ。もしきみが知っていたら、——なんのためにぼくが無心するのか、それをもしきみが知っていたら、——ぼくの未来も、ぼくのすべての計画も、何もかもこれ一つにかかっているんだよ……」

シーモノフは金をとり出すと、まるでほうりださないうばかりに、それをわたしに渡した。「さあ、取りたまえ、きみがそんなに厚顔無恥な男なら！」と彼は容赦もなくいい棄てて、仲間の跡を追いながら、駆けだした。

わたしはちよつとのま一人きりになった。あたりは狼藉をきわめていた。たべ残した料理、床に散っている盃のかけら、こぼれた酒、煙草の吸殻、頭の中に満ちている酒の酔いと、悪夢のような妄想、胸の中の悩ましい憂愁、そしておまけに、いつさいの様子を見聞きして、不思議そうにわたしの目を覗きこむボーイ。

「あすこへ」とわたしは叫んだ。『やつらがみんな膝をついて、おれの両足を抱きしめながら、友情を哀願するか、それとも……それとも、おれがズヴェルコフに平手打ちを喰ら

わすか、二つに一つだ！』

5

『これがそうだ、これがそうだ、ついに現実との衝突がやって来たのだ！』まっしぐらに階段から駆け下りながら、わたしはこうつぶやいた。『これはもうローマを見棄てて、ブラジルへ去って行く法王どころの騒ぎじゃない。これはもうコモ湖畔の舞踏会なんて呑気な沙汰じゃない！』

『貴様は卑劣漢だ！』という考えがわたしの頭をかすめた。『今これを笑い草にするとすれば』

『かまわない！』わたしは自問自答しながら、こう叫んだ。『いまはもう何もかも駄目になっちゃったんだ！』

彼らはすでに跡かたも見えなくなっていた。けれど、そんなことはどうでもかまわなかった。わたしは彼らの行ききをちゃんと知っていたのだ。

玄関さきには夜稼ぎの辻待ち馬車屋が、粗ラシヤの百姓外套を着て、たった一人しよん

ぼり客待ちをしていた。依然として降りしきる生暖かいようなべた雪を浴びて、全身真っ白になっていた。あたりには水蒸気が立ちこめて、いやに息苦しかった。毛むくじやらの小さな斑馬^{ぶち}も、やはり体じゆう真つ白になって、こほんこほん咳をしていた。わたしはそれをよくおぼえている。わたしはおそまつな櫓に飛び乗ったが、片足のつけた瞬間に、シーモノフからたつたいま、六ルーブリもらったという記憶が、ふいと心に浮かんで来て、わたしはまるで足でも薙がれたような気がした。わたしは櫓の中へ袋のように転がりこんだ。

『いや、これをすっかりとり戻すためには、大活躍をしなくちゃならないぞ！』と、わたしは叫んだ。『しかし、必ずとり戻して見せる。でなければ、明日といわず今晚、その場で死んでしまふんだ。さあ、やれ！』

櫓は走り出した。わたしの頭の中は旋風のように渦巻いた。

『やつらは、おれのまえに膝をついて、友情を求めたりしやしない。それは蜃気楼だ、陋劣な空想だ、穢らわしいロマンチックな夢だ、——例のコモ湖畔の舞踏会と変わりはありません。だから、おれは必ずズヴェルコフに平手打ちを喰らわしてやらなくちゃならないのだ！ ぜひともしなくちゃならないのだ。さあ、これで決まった。おれはいまや

つに平手打ちを喰らわさんがために、櫓を飛ばしているんだ。さあ、急げ！』

馭者は手綱をしやくった。

『入って行くと、いきなり喰らわしてやるんだ。だが、平手打ちの前に、序言といった形で、数言を費す必要はないかな？ ない！ いきなり入って行って、やつつけるんだ。やつらはみんなホールに陣取っているはずだ。やつは、オリンピヤといっしょに、長いすに坐つてるに相違ない。いまましいオリンピヤめ！ あいつはいつか、おれの顔をわらつて、おれを振りやがった。おれはオリンピヤの髪をつかんで、引き倒してやる。そして、ズヴェルコフのやつは両耳を引っ張ってやるんだ！ いや、片耳だけのほうがいい、片耳を引っ張って、やつを部屋じゆう引き廻してやる。やつらはみんながかりで、おれを袋叩きにして、表へ突き出すかもしれない。いや、そのほうが確かなくらいだ。なに、かまうもんか！ なんといったって、おれが一番に平手打ちを喰らわしたんだから、おれに先取権があるわけだ。名誉の法則からいうと、それが全部なんだ。やつはもうそれで恥辱の烙印を押されたんだから、どんなに撲つたところで、決闘によるよりほか、この平手打ちを自分の顔から拭き取るわけにはゆかない。やつはどうしても戦わなくちやならないんだ。いいとも、今晚はやつらにぶん撲らしてやろう。かまうもんか、どうせ忘恩の輩だ！ あ

のトルドリユーボフなんか、特別ひどく撲ることだろうな。あいつは恐ろしい力持ちだから。フェルフィーチキンは横のほうからしがみついて、きつと髪の毛をつかむだろう。たしかに間違いないんだ。しかし、かまうもんか、かまうもんか！ おれはそれを覚悟で出かけたのだ。やつらの羊同然な馬鹿頭でも、今度こそは、この事件の悲劇性を噛みわけらるう！ おれは戸口へ引つ張られて行きながら、やつらがおれの小指だけの値うちもないということ、大声でどなつて聞かせてやるのだ。さあ、急げ、馭者、急げ！』と百姓にどなりつけた。馭者はぎくつと身慄いさえしながら、鞭を一ふり振りあげた。わたしのどなり声があまりに気持ちがよいめいていたのである。

『明日の払暁には決闘するんだ。これはもう、既定の事実だ。役所のほうもおさらばだ。さつきフェルフィーチキンが、お役所という代わりにおやくじよといったつ。だが、ここでピストルを手に入れたものだろう？ なに、くだらんことだ！ 月給を前借りして買ってやる。だが、火薬は？ 弾丸は？ それは介添人の仕事だ。だが、どうしたらそれだけのことが、すっかり夜明けまでに間に合うだろう？ それに、どこから介添人を引つ張って来ようというんだ？ おれには知人なんかありやしない……なに、くだらんことだ！』わたしはなおいつそういきり立ちながら、こう叫んだ。『くだらんことだ！ 往来で行き

当たりばつたりの人間に頼んだら、その男はおれの介添人になる義務があるのだ。それは溺れかかった者を、水から引き出さなければならぬのと同じわけだ。思い切って飛び離れた異常の場合は、当然ゆるされてしかるべきだ。もしおれが明日にも課長をつかまえて、介添人になってくれと頼んだら、課長は単に騎士感情のためだけでも、それを引き受けて、秘密を守らなければならないのだ！ アントン・アントーヌイチ……」

ほかでもない、その瞬間、わたしは世界中のだれよりもはつきりと明瞭に、自分の想像の醜悪きわまりなき愚かしさを感じ、楯の反面を思い浮かべたのである。けれど……

「もつと飛ばすんだ、馭者、もつと飛ばすんだ。この悪党め、うんと飛ばせ！」

「えい、だんな！」と、いかにも田舎出らしく頑丈な馭者はいった。

わたしはとつぜん総身に水を浴びたような気がした。

『だが、いつそ……いつそ……これから真つすぐに家へ帰ったほうが好くないだろうか？

ああ、情けない！ なんだって、ほんとに。なんだっておれは昨日、あんな宴会に出席を申し込んだのだろう！ しかし、駄目だ、あんなことは我慢できない！ まる三時間も、テーブルから燗炉まで散歩をつづけるなんて。いや、あいつらだ。ほかのだれでもないあの連中が、おれにあの散歩の仕返しを受けなくちゃならないのだ！ やつらはおれの顔か

らこの泥を洗いおとす義務がある！ さあ、もつと飛ばせ！」

『だが、もしやつらがおれを警察へ突きだしたらどうしよう！ なに、そんな度胸があるものか！ やつらは外聞の悪い騒動を恐れるに違いない。しかし、もしズヴェルコフがおれを頭から軽蔑して、決闘をはねつけてしまったらどうしよう？ これは間違いなしといつていいくらいだ。しかし、その時はおれも目にも見せてくれる……その時こそおれは、明日あいつらが出発しようという間際に、駅逓へ飛んで行って、やつが馬車へ乗ろうとする時を狙って、やつのお足を引つつかんで、やつのお外套を引つpegがしてやるんだ。やつのお手に喰いついて、歯形をつけてやるんだ。「諸君、見たまえ、人間やけになったら、どんなことを仕出かすかわからないんだから！」とどなってやる。あいつらがおれの頭をぶん撲つたつて、仲間の連中がうしろからかかって来たつて、かまうこたありやしない。おれはそこにい合わせたみんなの者に、こうどなってやるつもりだ。「見たまえ、ここに犬ころみみたいな若造が一匹いる。こいつはおれの痰唾を顔につけたまま、チエルケス女を迷わしに出かけようとしているんだ！」』

むろん、ここまで行ってしまえば、もうなにもかもおさらばだ！ お役所は地球の表面から姿を消してしまう。わたしはふんづかまえられて、裁判を受けたあげく、勤めは追わ

れて、監獄にほうりこまれ、シベリヤへ流刑にされるのだ。それはもういうまでもない！十五年くらい経って、監獄から出してもらったら、わたしは乞食のようなぼろぼろの姿になっても、あくまであいつらの後を付け狙ってやる。そして、どこか県庁所在地の町あたりで、いよいよやつをさがし当てる。やつは細君を持って、幸福に暮らしているのだ。年頃の娘さえあるだろう……そこで、わたしはこういつてやる。

『見ろ、悪党、このおれの落ちこんだ頬と、ぼろぼろの着物を見るがいい！ おれはいっさいのものを失ったのだ。一生の仕事も、幸福も、芸術も、科学も、愛する女も、何もかも失ったのだ。それというのも、みんな貴様のおかげだぞ。さあ、ここにピストルがある、おれはこの中の弾丸をぶつ放しに来たのだ。そして、その上で貴様をゆるしてやる。おれはこの場で空へむけて発砲するんだ。そのあとは、おれの影も、形も、匂いさえもしないように、行きがた知れずになるのだ……』

わたしは涙さえ流して泣きだした。もつとも、こんなことはみんなプーシキンの『シルヴィオ』（短編『その一発』の主人公）か、レールモンツフの『仮面舞踏会』から拝借したものだということを、わたしはその瞬間、正確に知りぬいていたのだ。と、不意に恥ずかしくてたまらなくなった。あまりの恥ずかしさに、わたしは馬を止めさして、櫓から下

り、往來の雪のなかに立った。馭者は呆氣にとられて、溜め息をつきながら、わたしを眺めていた。

『いったいどうしたらよかつたのだろうか？ むこうへ行くわけにもゆかなかつた、——行けば馬鹿げたことになりそうだ。』と、このまますすわけにはゆかない。そんなことをすれば、もうそれこそ……ああ！ どうしてこのまますすまされよう！ あれだけの侮辱を受けた後で！ 『駄目だ』 ともや櫓へ飛びのりながら、わたしはこう叫んだ『これは何かの約束なのだ、——宿命だ！ 飛ばせ、もつと飛ばせ、あそこへ行くんだ！』

わたしは我慢し切れないで、馭者の首を拳固で突いた。

「お前さん、なにするだ。なんだって乱暴なことしなさるだよ？」と百姓はどなつたが、それでも瘦せ馬にびしびし鞭を入れたので、馬は後足で櫓を蹴り始めた。

べた雪は綿のように降りしきつていた。わたしは外套の前をあげつろげた。雪や寒さどころではなかつた。わたしはいよいよ平手打ちの実行を決心したので、ほかのことはもうすっかり忘れつくしていたのだ。そして、これはもう必ず今すぐおつ始まるのだ、これはもうどんな力でも阻止するわけにゆかないのだということ、恐怖の念とともに直感していた。侘びしげな街燈が、まるで葬式のたいまつのように、雪けむりの中で気むずかし

げにまたたいていた。雪はわたしの外套や、上着や、ネクタイの下へ吹きこんで、そこできくしく融けるのであった。わたしは外套をかきあわそうともしなかった。もうどっちにしたって、何もかも駄目になってしまったのではないか！ やつとのもので、めざす家へ乗り込んだ。わたしはほとんど前後を忘れて飛び下りると、階段を駆け登り、手と足とで扉をどんどん鳴らし始めた。わたしの足は、ことに膝のあたりが、ぐったりと力抜けしていた。けれど、わりに早く開けてくれた。まるでわたしの到着を知っていたような具合である（実際シーモノフが、もう一人くるかもしれないと、前触れしておいたのである。この家ではすべて前触れして、十分に大事をとる必要があった。それは当時さかんだった、いわゆる『流行品店』の一つで、いまではもう警察の努力で、とつくに根絶されているが、昼間は本当に流行品店であるけれど、晩になると、紹介を持っている人だけが、お客になって行ける仕組みになっていた）。わたしは早足で暗い店の間を通り抜け、たった一本だけ蠟燭のともっているホールへ入って行った。そして、そこでげんそうに立ちどまった人っ子ひとりいなかっただからである。

「いったいあの連中はどこにいるのだ？」わたしはだれかにこうたずねた。

しかし、彼らはもうむろんいまの間に、めいめいの部屋へ別れて行ったのである……

わたしの前には、ある一人の人間が、愚かしい微笑を浮かべながら、ぼんやりたたずんでいた。それはこの家のお内儀で、わたしのことも多少は知っていたのである。やがて間もなく戸が開いて、もう一人の女が入って来た。

わたしはいっさいなものにも注意を向けなくて、部屋の中を歩き廻っていた。どうやらひとり言ぐらいってはいたらしい。わたしはまるで危い命を救われたような気持ちで、その喜ばしい感じを、自分の全存在で予知していたのである。もし彼らがいたら、わたしは平手打ちを喰らわしたに相違ない。きつときつと喰らわしたに相違ない！　ところが、今は彼らの影も姿もない……何もかも掻き消えて、状況はがらりと変わった！……わたしはあたりを見廻した。まだはつきりと思い合わせる余裕がなかったのである。わたしは機械的に入ってくる女を見やった。いくらかあおぎめてはいるけれども、新鮮な感じのする若々しい顔が、わたしの目にちらりと映った。黒い眉がまっすぐに揃って、真面目そうな目つきは、いくらか驚いたような表情をしていた。わたしはさっそくそれが気に入った。もし彼女がにたにた笑っていたら、わたしはこの女を憎んだに相違ない。わたしは無理に注意を緊張させるようなあんばいで、前よりも少し目をすえながら、その顔を見入り始めた。わたしの考えは、まだすっかりまとまっていなかった。その顔には素朴で善良なもの

があつたけれど、何かしら不思議なほど真面目なところもあつた。つまり、それがために彼女は客を取り損つたので、あの馬鹿者どもはだれ一人この女に気を留めなかつたのだと、わたしは信じて疑わなかつた。とはいうものの、彼女は美人というわけにはゆかなかつた。でも、背は高く、しっかりとよく整つた体格をしていた。身なりは思い切つて質素であつた。何やらいまわしい虫のようなものが、ちくりとわたしの心を刺した。わたしはつかつかと女の傍へ寄つた……

わたしは偶然、鏡のなかを覗いてみた。興奮して取り乱したわたしの顔は、われながら思い切りいやらしく感じられた。頭の毛を蓬々させた、あおぎめた、毒々しい、下司な顔をしている。『なに、かまうものか。おれは結句このほうが嬉しい』とわたしは考えた。『つまり、この女にいやらしく思われるのが嬉しいのだ。おれはそれが愉快なんだ……』

6

……どこか仕切壁のむこうで、まるでだれかにひどく締めつけられて、息がつまりそうになつたというようなふうに、——時計がぎいと軋みながら鳴つた。不自然なほど長い軋

み声の後から、いやらしく細い響きが、思いがけなくせつかちに鳴り渡った、——まるでだれかが急に前へ飛びだしたような感じだった。二時を打ったのだ。わたしはわれに返った。といつても、別に眠っていたわけではなく、ただ半醒半睡の状態で横になっていたのである。

天井が低くて、窮屈な狭くろしい部屋の中には、大きな衣裳戸棚が幅をしめ、おまけにボール箱や、ぼろ切れや、その他ありとあらゆるぼろ服が引き散らされ、しかもほとんどまつ暗であった。部屋の端っこにおかれたテーブルの上で燃えている蠟燭は、もうあやうく消えそうになって、ときどき微かにぱつぱつと燃え立っていた。もう幾分か経ったら、あやめもわかぬ真の闇になるわけである。

わたしはたちまちはつとわれに返った。すべてのことがなんの努力もなしに、たちまちわたしの記憶によみがえった。まるで、もう一度おそいかかってやろうと、待伏せしていたかのである。それに、いかに前後を忘却していても、どうしても忘れ切れないような、何かある一つの点が、記憶のなかに始終のこっていて、そのまわりを夢うつつの妄想が、重苦しく廻転するのであった。しかし、不思議なことがあった。この一日にわたしの身に起こったいっさいのことは、いま目がさめてみると、まるで遠い遠い過去のことのよ

うに思われ、わたし自身はとつくの昔に、そんな境地から抜けだしたような気持ちが出たのである。

頭の中には、炭酸ガスでもこもっているようだった。何かが頭の上をくるくると舞いながら、わたしの神経にさわって、興奮さしたり、不安を呼び起こしたりするよう。憂愁と憤懣の念が、また胸の中に湧き立って、はけ口を求めると、わたしは自分のすぐ傍に、ぱつちりと開いた二つの目を見た。その目はもの珍しげに、執念しゅうねくわたしをじろじろ見廻している。冷たい無関心な、まるで縁もゆかりもないような気むずかしい目つきで、それを見ていると重苦しい気持ちになる。

気むずかしい想念がわたしの脳裡に生まれて、まるでいやな感覚のように全身を這い廻った。それは、古くさい湿気た床下へ入った時の感じに似ていた。この二つの目がやつと今になって、わたしを仔細に見廻そうという気持ちになったのが、なんとなく不自然に思われた。わたしはまる二時間のあいだ、この女とひと言も口をきかなかつたばかりでなく、そんなことはてんで不必要だと思つていたらしい、——そういうことも、記憶に浮かんできた。ついさつきまでは、なぜかこの無言の行がわたしの気に入つてさえいたのである。ところが、いまとつぜん自分の淫蕩が、まるで蜘蛛のように愚かしく、いまわしいものに

思われて来た。それは愛情もなく無恥粗暴な態度で、本当の愛の栄冠となるべき行為から、いきなりことを始めるのだ。わたしたちはこんなふうには長いあいだ、お互いの顔を眺め合っていた。けれど、彼女はわたしの視線を受けながら、目を伏せようとしなければ、その眼ざしを変えもしなかったのです、わたしはどうとうなぜか息苦しくなってきた。

「お前の名はなんというんだい？」わたしは少しも早く^{けり}鼻をつけようと思つて、ひきちぎつたような声でたずねた。

「リーザ」彼女はほとんどささやくように答えたが、なんだかいつこうに無愛想な調子だった。彼女はそのまま目をそむけた。

わたしはしばらく黙っていた。

「今日の天気といつたら……べた雪で……いやになつちまう！」わたしは悩ましげに左手を頭のうしろへ廻して、天井をまじまじと眺めながら、ほとんどひとり言のようにこういつた。

彼女は返事をしなかった。これらはすべて醜悪な感じだった。

「きみはこの者かい？」しばらくたつてから、わたしは心もち女のほうへ首をむけながら、まるで中つ腹の調子でこうたずねた。

「いいえ」

「どこから来たの？」

「リガから」彼女はいやいやそう答えた。

「ドイツ人かい？」

「ロシア人よ」

「前からここへ来てるの？」

「どこへさ？」

「この家へさ」

「二週間まえよ」

彼女の調子はだんだんぶつきら棒になって来た。蠟燭の火はすっかり消えてしまつて、わたしはもう女の顔を見分けることができなかつた。

「お父さんお母さんはいるかい？」

「ええ……いいえ……あるわ」

「どこにいるの？」

「あちらに……リガに」

「いったいどういう人なんだい？」

「べつに……」

「べつにつて、なんだい？ いったい何者で、どういう身分だね？」

「町人なの」

「きみはこれまでずっと両親といっしょに暮らしていたの？」

「ええ」

「年はいくつ？」

「はたち」

「なぜきみは親もとを離れたんだい？」

「べつに、なぜつて……」

このべつには言葉を換えると、うるさい、引っ込んでください、という意味なのであつた。わたしたちは口をつぐんだ。

なぜわたしがそのまま帰つて行かなかつたのか、われながら合点がゆかない。わたし自身もだんだんいやな、悩ましい気持ちになつてきた。きのう一日の間に見聞きしたことが、わたしの意志を無視して、ひとりでにんの秩序もなく、わたしの記憶に次々と浮かんで

きた。わたしは突然ある一つの情景を思い出した。それは今朝せかせかと役所に急いでいた時、ふと往来で見かけたものである。

「きょうあるとこで棺を担ぎ出していたが、あやうく取り落とすところだったよ」わたしはだしぬけに大きな声でこういった。まるつきり話など始める気などはなかったのだが、何げなくふいと言葉が口から出たのである。

「棺ですって？」

「ああ、センナヤ広場でね。穴蔵から運び出していたのさ」

「穴蔵から？」

「穴蔵じゃない、地階からだ……ね、わかるだろう……その、下のほうに住居があるやつさ……怪しい商売の家なのさ……あたりはひどいぬかるみでね……ひまわりの殻だの、ごみだの一杯で……いやな臭いがしてね、胸が悪くなるようだったよ」

沈黙。

「今日あたりの埋葬はいやだなあ！」わたしはまたこう切りだしたが、それはただ黙っていたくなかったからなので。

「なぜいやなんですの？」

「雪としめつぽいんで……」（わたしはあくびをした）

「どうだって同じこったわ」ややしばらく沈黙の後、彼女は急にこういった。

「いや、穢らわしい気がする……（わたしはまたあくびをした。）墓掘どもがきつと口汚くいったらうよ、雪で濡れるものだから、墓穴の中には、きつと水が溜ってたに違いない」
「なぜ墓穴の中に水が溜ってるの？」彼女は一種の好奇心を声にひびかせながら問い返したが、その調子は前よりもつとぞんざいで、ぶつきら棒だった。わたしは急になんとか意地が張りたくなって来た。

「なぜって、底に水が溜ってるよ、かれこれ一尺くらい。こんな日にやヴォルコーヴォの墓地あたりで、乾いた穴なんか一つだって掘ることはできやまいよ」

「どうして？」

「なにがどうしてさ？ あんなぐじやぐじやした場所じゃないか。ここはどこへ行っても、沼地なんだから、水の中へ棺を浸けるわけなのさ。おれは自分でみたよ……何度も……」

（わたしは一度もそんなものを見たことはなかったし、それにヴォルコーヴォの墓地へも一度だって行ったことはなかった、ただ人の話を聞いたばかりである）

「いったいきみはどうだつてかまわないのかい、死ぬってことが？」

「だって、なんのためにわたしが死ぬんですの？」まるで自分の身をかばうように、彼女はこう答えた。

「そりや、いつかは死ぬさ。ちようどさつき話した死人のように、あれと同じ死に方をするのさ。あれもやはり……きみと同じような女だつたんだが……肺病で死んだんだよ」

「商売女は病院で死にそうなものだけだ……」

（この女はもうちゃんと心得ているんだな、とわたしは考えた。それに、淫売とはいわな
いで、商売女という言葉を使った）

「その女は女将に借金があつたのさ」わたしは女とのやりとりのために、ますます意地を
張りながら、こういい返した。

「だから、ほとんど最後の息をひき取るまで、肺病の体をかかえながら、おかみのために
客を取っていたのだ。まわりで辻待ちの馱者が兵隊たちとしゃべりながら、そんな話をし
ていたつけ。きつと以前その女の知り合いだったにちがいない。みんなでげらげら笑つて
いたよ。おまけに、居酒屋で追善のために一杯やるとかいていたよ」（わたしはここで
もかなり尾鱈をつけてしゃべつたのだ）

沈黙、深い沈黙、彼女は身じろぎもしなかった。

「いったい病院で死んだほうが楽だともいうのかい？」

「どっちだっていいのじゃないの？……それに、なんだってわたしが死ぬことに決めてるの？」

彼女はいら立たしげにいい添えた。

「いますぐでなければ、やがてそのうちによ」

「ふむ、そのうちにだって、いやなことさ……」

「もしそう注文どおりにゆかなかつたら？ 現在きみは若くて、綺麗でいきいきしているから、うんと高く買ってもらえるけれど、こんな生活をもう一年もつづけていたら、きみもすつかり変わってしまったて、しなびてくるに決まってる」

「一年やそこいらで？」

「いずれにしても、一年も経つたら、きみの相場は下がってくるよ」わたしは意地悪い喜びを感じながら、言葉をつづけた。

「すると、きみはここからもつと格の下がった、別の家へ鞍替えしなくちゃならない。それから、また一年たつと、もう一つ次の家へかわって行って、だんだんと低みに落ちてゆ

く。七年ばかり経つたら、いよいよセンナヤ広場の穴蔵まで行きついてしまうわけさ。それだけならまだしもだけれど、そのほかに何か悪い病気でも背負いこむとか、それとも胸でも弱くなるとかいうことになったら、それこそ大変だ……また風邪をひくとかなんとか、いろいろあるだろうよ。こんな生活をしていると、病気はなかなか早く癒らないから、とついたら最後、もう離れないかもしれないぜ。こうして、とどのつまりは死んでしまうのだ」

「じゃ、死ぬまでだわ！」彼女はもうすっかり毒々しい調子でこう答えると、急にぴくりと身を動かした。

「だってかわいいそうじゃないか」

「だれが？」

「命がかわいそうなのさ」

沈黙。

「きみには約束した人でもあつたのかい？ え？」

「そんなことをきいて何になさるの？」

「いや、ぼくは何も訊問しているわけじゃない。ぼくがそんなことをきいたって、何にな

るもんかね。なんだって腹を立てるんだ？ むろん、きみにはきみでいやなこともあるだろうさ。だが、ぼくにとつてなんの関係があるというんだ？ ただなんということなしにかわいそうな気がするんだよ」

「だれが？」

「きみがかわいそうなのさ」

「それには及びませんわ……」彼女はほとんど聞きとれないくらいにささやいて、またちよつと身じろぎした。

わたしはそれでまた、急にむらむらとなった。なんということだ？ ひとがこんなに優しくしてやつてるのに、この女は……

「いったいきみは、どんな気でいるんだね？ まつとうな道を踏んでも思っているのかい、え？」

「わたしなんにも考えてやしないわ」

「つまり、それがいけないんだよ、なんにも考えないということがさ。手遅れにならないうちに、早く目をおさまし。まだ遅くはないよ。きみはまだ若くって、器量もいいんだから、恋をすることもできようし、結婚することもできる、幸福な身の上にもなれるという

ものだ……」

「お嫁にいったものが、みんな仕合わせだとも限らないわ」彼女は相変わらずぞんざいな早口で、断ち切るようにこういった。

「そりや、むろん、みんなとはいえないさ。でも、それだってここにいるよりか、ずっと増しだよ。比べものにならないほどいいよ。愛があつたら、仕合わせなんかなくなつて、この世は暮らしてゆけるからね。悲しみのなかだつて、人生はいいものだよ。たとえばどんな暮らしだつて、この娑婆で生きてゆくのはいいものさ。ところが、ここはいつたいなんという有様だ。穢れと悪臭のほかは……なんにもありやしない。ちよっ！」

わたしはさもいやらしそうに顔を背けた。わたしはもう冷静に理屈を捻り廻しているのではなかつた。自分でも自分のいつてることを胸に感じ、熱中してきたのである。わたしは片隅の世界で体験した大切な秘密の思想を、少しも早く披瀝したくてたまらなかつたのだ。何かしらあるものが、忽如としてわたしの内部に燃えあがり、ある目的が『示現』されたのである。

「ぼくが自分でこんな所に来ているからつて、それを咎め立ててもらつちや困る。ぼくはきみのお手本にはなりかねるからな。ことによつたら、きみよりもつとやくぎな人間か

もしれない。もつとも、酔っぱらってこんな所へ舞いこんだのだがね」とわたしはそれでも一応は急いで自己弁護を試みた。「それに、男というものは、てんで女のお手本にならないよ。まるで立場が違うのだからね。ぼくなんか自分で自分を穢したり、傷つけたりしてはいるけれど、そのかわり、だれの奴隷でもないから、どこへ行こうと、何をしようとするつかり自分の自由だ。自分の体から穢れをふり落としたり、もう別人になってしまふんだ。ところが、きみなんか、早い話が、初めつから奴隷にできているんだからな。そうさ、奴隷だとも！ きみは何もかも、自分の自由までも、すっかり人に渡してしまふんだからな。あとであの鎖を引きちぎろうとしたって、もうこんりんぎいだめだ。かえってよけいに堅くからみつくばかりさ。それは実にいまましい呪いの鎖なんだ。ぼくはそれをよく知っている。まだほかのことも話したいと思うけれど、それはもういうまい。おそらくきみにはわからないだろうからね。まあ、それより聞かしてくれ、——きみはきつとおかみに借金があるんだろう？ ね、そら見たまえ！」とわたしはいい足した。そのくせ、彼女はまるで返事をしないで、ただ全身を耳にしながら、無言のまま聞いていたばかりだった。「つまり、それがきみの鎖なんだ！ もうけつして足を抜くことはできやしない。みんながそういうふうに住向けてゆくんだ。なにしろ、悪魔に魂を売ったのも同じことだからな

……」

「……それに、ぼくだって……ことによつたら、やはり同じように不幸な人間かもしれない。そりや、きみなんかにやわからないさ。で、わざと泥沼の中へ這いこむんだよ。やっぱりむしやくしやまぎれにさ。だって、人は憂き晴らしに酒を飲むだろう。ね、だからぼくも憂き晴らしに、こうしてここに來ているのだ、ねえ、ひとつ聞かしてもらおう。いたいここに、どんないいことがあるんだい？ 現にぼくたち二人は……いい仲になったんじゃないか……さつきここでさ。それなのに、二人ともあれからずつと、お互いに口もきかないでさ。きみなんかそのあとで、まるで野獣かなんぞのように、ぼくをじろじろ見廻してんじゃないか。ぼくのほうもやつぱりそのとおりで。いったいこんな愛し方ってあるものだろうか？ いったい人間同士がこんなふうに接触しなくちやならないのかい？ これはもう醜惡以外の何ものでもないよ、そうとも！」

「そうだわ！」と彼女は急いで言葉鋭く相槌を打った。この『そうだわ』をいった性急な調子は、わたしを驚かしたくらいである。してみると、彼女もさきほどわたしをじろじろ見廻していたとき、同じような考えをその頭に宿していたのかもしれない。してみると、彼女も多少は思考の能力を持っているのだろうか？……『しめたぞ、こいつは面白い、こ

「いつはまんざら縁がなくもない」わたしはほとんど揉み手しないばかりに、こう考えた。そうだ、こんな若い女の魂くらい、自分の手に合わないはずがない！……

わたしは何よりも演技の面白みに心を牽かれたのである。

彼女はわたしのほうへ近々と顔をむけた。わたしが闇の中で見透かしたところでは、頬杖をついたらしい。おそらく、わたしの様子を見定めていたのかもしれない。わたしは、彼女の目を見透かすことができないのを、いかにも残念に思った。わたしはその深い息づかいを耳にした。

「きみはなんだって、この土地へ来たんだい？」もういくらか威を帯びた調子で、わたしはこう切りだした。

「ただ、なんということなしに」

「しかし、親の家に暮らしていたら、どんなにいいかしれないじゃないか！ 暖かくて、気ままができてさ。なんといつても自分の巣だからね」

「でも、それほど良くなかったら？」

『うまく調子をつかまないといけないぞ』という考えがわたしの頭に閃いた。『感傷的な持ちかけ方をしたって、大して効果がないらしい』

もつとも、それはただちらと頭をかすめただけである。誓って言うが、女は本当にわたしの興味をそそつたのである。その上、わたしは妙にぐったりして、弱気になっていた。しかも、性わるないたずら気というものは、たやすく真の感情と溶け合うものである。

「だれがそんなことをいうんだい！」とわたしは急いで答えた。「そりや、どんなことだつて、この世にはあるがね。ぼくは確かにそう信じてるんだが、きみはだれかに、ひどい目にあわされたんだろう。だから、きみが世間に対してすまないというよりも、むしろ世間のほうがきみに対して申しわけないんだろう。ぼくはきみの身の上を何一つ知らないけれど、きみのような女は、けつして自分から好きこのんで、こんな所へ落ちてくるはずがないじゃないか……」

「わたしのような女つて、いったいどんな女なの？」彼女はほとんど聞きとれぬくらいの声でささやいたが、それでもわたしは聞き分けた。

「いまましい、おれはお世辞なんか使っているのだ。それは穢らわしいことだ。だが、ひよつとしたら、それでいいのかもしれない……女は黙っていた。」

「実はね、リーザ、ぼくは自分のことを話したいんだよ！もしぼくが小さい時分から、家庭というものを持つていたとすれば、今のような人間にはならなかつたろう。ぼくはこ

のことを始終かんがえるよ。たとえ、どんなに家の中の折合いが悪くても、——やはり両親は他人と違うから、敵にはなりっこないよ。せめて年に一度でも、愛情を示してくれようというものだ。なんてつても、自分の家にいるという気がするからね。ところが、ぼくは家庭というものを知らずに大きくなったのだ。きつとそのためぼくはこんな……情なしになってしまったんだろう」

わたしはまた反応を待っていた。

『どうやらわからないらしいぞ』とわたしは考えた。『それに第一、滑稽だ、——こんなお説教をするなんて』

「もしぼくが父親で、娘でも持っていたとすれば、ぼくは息子よりも娘のほうをかわいがつたろうと思うよ、まったく」わたしは彼女の気をはぐらかさうと思って、わざと知らぬ顔で、脇のほうからちよつと当たりをつけてみた。わたしは正直なところ、思わず赤くなつた。

「それはなぜですか？」と彼女はたずねた。

「はあ、してみると、やっぱり聞いているんだな！」

「わからない、リーザ、ただなんとなしにさ。ねえ、ぼくはある父親を一人知っているが、

その男は厳格な、やかましやのくせに、娘の前へ出ると、いつまでもいつまでも膝をついたまま、その手や足に接吻をして、眺め飽きるということがないんだよ、ほんとうに。娘が夜会でダンスをしていると、その男は五時間も一つところに立ち通しながら、少しも娘から目を放そうとしない。まるで、娘で気が狂ったようなものさ。その気持ちはぼくにもわかるよ！ 夜、遅くなって、娘が疲れて寝入ってしまうと、先生目をさましてさ、寝ている娘に接吻をして、十字を切つてやるために、わざわざ出かけて行くんだ。ご当人は、脂じみたフロックを着て歩き廻っているし、だれのことによって始終けちけちしているくせに、娘のこととなると、なけなしの金をはたいても、贅沢な贈り物を買つてやるのだ。もしその贈り物が気に入ったら、それこそ大喜びなのさ。どこでも父親のほうが母親よりも、よけい娘をかわいがるものだね。だから、娘たちの中には、家で暮らすのが愉快でたまらないというのがいるよ！ ぼくなんか、もし娘があつたら、けつして嫁にやらないだろうと思うよ」

「でも、どうして？」ほんの心持ちにやつと笑いながら、彼女はこうたずねた。

「やきもちが焼けるからさ、まったくの話が。ね、娘がよその男を接吻するなんて、どうしてそんなことができるのだろう？ 他人のほうを、父親よりもよけいに愛するなんて、

そんなことは想像してみただけでも、たまらないじゃないか。むろん、そんなことはばかばかしい話さ。むろん、だれだつてしまいいには正氣づくに決まっている。しかし、ぼくなどは、娘を嫁にやる前に、婿選みの心配だけで、へとへとになつてしまふだろうよ。そして、どの候補者もみんな落第にしてしまふよ。だが、なんといっても、とどのつまりは、娘が自分で好いた男にやつちまうな。ところで、娘が自分で好いた男というのは、父親の目には必ず、一番の屑に見えるものなんだよ。それはもう通り相場だ。そのためになんどの家庭でも、いろいろ面倒が持ちあがるものさ」

「だつて、中には喜んで娘を売る人だつてあるわ。天下晴れて嫁にやるどころの騒ぎじゃありません」
「だつて、中には喜んで娘を売る人だつてあるわ。天下晴れて嫁にやるどころの騒ぎじゃありません」と彼女はだしぬけにこういった。

「はあ！なるほど、そういうわけなのか！」

「それはね、リーザ、神さまもなければ愛情もない、呪われた家庭の話だよ」とわたしは熱くなつてひき取つた。「愛情のないところには、まともな分別もないからね。そりや本当にそうした家庭もあるさ。しかし、ぼくはそんな家庭の話をしているんじゃないよ。そんなことをいうところからみると、きみは家庭であまりいい目を見なかつたんだね。きみは正真正銘の不仕合わせな身の上なんだらう。ふむ……そういうことは、おもに貧乏か

ら起こるものだて」

「じゃ、身分のいい人は仕合わせだとしてもおっしやるの？ 貧乏してたって、正直な人間はちやんとした暮らしをしていますわ」

「ふむ……そう。そうかもしれない。だがね、リーザ、こういうことも考えてごらん。人間は自分の不幸ばかり数え立てて、仕合わせなことは棚に上げておくものだよ。もしそれを本当に計ってみたら、どんな人だつて、それ相当に仕合わせが授かっているものさ。ねえ、家のなかは何もかもうまくいったらどうだろう？ 神さまのおかげで、立派な夫が授かってさ、片時もそばを離れないくらい、ちやほよとかわいがってくれたら！ そういう家庭は素敵じゃないか！ 時によると、不仕合わせとちやんぼんだつてけっこうじゃないか。実際、不幸のないところなんてないんだからね。きみだつて結婚したら、自分でそれがわかるだろうよ。その代わり、好きな男と結婚した当座のことを考えてごらん。それこそ本当の幸福で、時によると、背負い切れないほどの幸福がやって来るんだよ！ いや、そんなことはざらにあるさ。結婚当座は、夫婦喧嘩だつてめでたくけりがつく。女によると、亭主を愛していればいるほど、よけい喧嘩の種をつくるくらいだ。ぼくは事実そんな女を知っているよ。『よくつて、わたしはあんたが、好きで好きでたまらないのよ。好き

なればこそ、苦しめるんだから、あんたもそれを感じなくちゃ駄目』といったようなわけさ。好きなために、わざと相手を苦しめるってことが、きみにはわかるかい？ そんなのは大てい女に多いのだ。そうしておいて、『そのかわりあとでうんと優しくしてかわいがって上げるから。だからいますこしくらい苦しめたって、罪にやならないわ』と腹の中で考えているんだね。家の者もみんなその様子を見て、喜んでくれる。すべてがけっこうで、楽しくて、平和で道理にかなっているのだ……ところが、なかにはまた、嫉妬ぶかい女もいる。男がどこかへ出かけると、——ぼくは現に、そんなのを一人知っていたがね、——矢も楯もたまらなくなつて、よる夜中でも見さかいなく飛び出して、ひよつとあそこにいるのじゃないか、あの家へ行つてるのじやあるまいか、あの女といっしょじやないだろうかと、こつそり様子を見に駆け出すのさ。これなんか始末が悪いよ。当人も、自分で悪いと承知しているくせに、心臓が痺れるような思いをして、いわば呵責の苦しみなのだ。なにしろ惚れているんだからな。何もかも愛情から出ることなのだ。そして、喧嘩をした後の仲直り、自分で謝まつたり、ゆるしてやつたりする気持ちのよさ！ 二人とも急になんともいえないいい気持ちで、——まるでまた初対面の蒔き直しをしたような、も一ど結婚式を仕直したような、二人の恋がまた新しく始まつたような、素晴らしくいい気持ちにな

るのだ。夫婦の間のことというものは、二人が愛し合っている以上、だれだって、——どんな人だって、知るわけにはゆかないものなんだ。たとえ二人の間にどんな諍いが持ちあがったにせよ、親身の母親だって仲裁人に入ってもらわうべきものでもなし、また自分たちもお互い同士のことを他人に話してはいけないのさ。夫婦は自分の仲裁人なんだからね。愛は神秘なんだから、——よしんばどんなことが起ころうとも、すべて他人の目からはかくしておくのが本当なんだよ。そうすると、愛はいつそう神聖な、いつそう美しいものになるのだ。お互い同士の尊敬も増してくるが、この尊敬というやつは、多くものの根柢になるんだからね。もしいったん愛があつて、その愛のために結婚した以上、愛を消滅させなければゆかない！ 愛は本当に持ちこたえられないのか？ 愛が持ちこたえられないなんて場合は、ごくたまにしかありやしない。運よく、正直で優しい夫にぶつ突かったら、愛がなくなる理屈はないだろう？ なるほど、結婚当座のような愛は消えるだろうが、その後でもっと立派な愛がやってくるよ。そうになると、心と心が一つになって、どんなことでも、みんな相談ずくで決めてゆくから、お互い同士に秘密というものがなくなってしまう。やがて、子供が後から後から生まれるようになるのと、どんな苦しい時でも、みんな幸福のように思われるんだ。ただ愛情をもって、しかも男々しい気持ちでいればいいのさ。

そうになると、仕事も楽しみになって、たとえ時には、子供のために食わずにいるようなことがあろうと、それさえちつとも苦にならない。だって、子供らが後でそれを感謝して、親たちを愛してくれるわけだからな。そんなふうにして、こつこつと金を貯めているうちに、子供らもだんだん大きくなって行く。すると、自分は子供らのために手本ともなれば、杖柱ともなっているのだと感ずるだろう。そして、自分は死んでいっても、子供らは自分のもっている感情や思想を、生涯もちつづけてくれるだろう。なぜなら、それは自分から受けついでものだから、自分の姿や面影もうけついでくれるだろう。——こういうことを、しみじみと感ずるようになる。つまり、それは偉大な義務なんだ。こうなったら、父親と母親とは、いつそうびつたりと結びつかないというはずがないじゃないか？ よく人は子供をもつと苦しいというが、そんなことをいうやつはいったいだれだろう？ それこそ天国のような幸福じゃないか！ リーザ、きみは小さな子供が好きかい？ ぼくはとても好きなんだよ。ねえ、——薔薇色をした小つちやな男の子が、母親の乳房を、無心に吸っている。妻が自分の子を抱いてすわっている姿を眺めたら、どんな男だって、妻のほうへ引きつけられずにはいられないだろう！ 薔薇色にふくら肥った赤ん坊が、さもしい気持ちそうに手足を伸ばして、うっとりしている。ぽちやぽちやしたその手足、綺麗な爪、小

つちやな、見るもおかしいほど小つちやな爪、そして目といたら、まるでもう何もかもわかるような表情をしているんだ。それがしきりに乳を吸いながら、かわいい手で母親の乳房を引つ張つて、おもちゃにしている。父親が傍へくると、——急に乳房を離して、体をぐつとうしろにそらしながら、父親の顔を見て笑いだす、それが、さもさもおかしくてたまらないというふうなのだ。それから、またもう一ど乳房を吸い始める。かと思えば、歯が生えかかるころだと、だしぬけに母親の乳首を噛んで、その顔を横目に見やりながら、『どうだ、噛んでやったぞ！』といったような顔をしている。ねえ、夫婦と子供と三人いっしょにいたら、その時は何もかも幸福に思われようじゃないか？ こういう美しい瞬間のためには、かなり多くの過ちも許してやっていいわけだよ。そうだと、リーザ、つまりまず自分が生活の仕方を学んだ上で、それから他人を責めるのが順なんだよ！』

『こういう挿画式の話で、そう、こういう挿画式の話で、お前をつり出してやるといいのだ！』わたしは正直なところ真ごころこめて話したのだけれども、ふとこんなことを腹の中で考えた。そして、急に顔を赤くした。『だが、もしこの女がいきなり大声に笑いだしたら、その時おれはどこへ逃げ出したらいいのだろう？』こう思うと、わたしはじりじりするほど腹が立って来た。話が終わりに近づく頃には、わたしは本当に自分から熱中して

しまったので、今になってみると、妙に自尊心を傷つけられたような気がしてきた。沈黙がいつまでもつづいた。わたしは女を小突いてやりたくさえなかった。

「なんだかあなたは……」彼女はだしぬけにいいだしたが、すぐ言葉を止めた。

けれど、わたしにはもうすっかりわかっていった。彼女の声には、もう何かしら別な感情が慄えていたのである。さっきのようにぞんざいで、強情な突慳貪なものと違って、なんとなくもの柔らかな、羞恥に満ちたものであった。それは、わたし自身がなぜかとつぜん彼女に対して気恥ずかしいような、すまないような気のするほど、しとやかな羞恥の感情であった。

「なんだね？」とわたしは優しい好奇の念を抱きながらたずねた。

「だって、あなたは……」

「なんだよ？」

「あなたはなんだか？……まるで本でも読んでるような話し方をするんですもの」と彼女はいった。すると、なんとなく冷笑的な調子が、またもその声のなかに響いた。

この言葉は手ひどくわたしの自尊心を傷つけた。わたしはまるで違った言葉を期待していたのである。

彼女はわざと冷笑の仮面をかぶったのだ。それは羞恥心の強い純な心をもった人が、普通いよいよという時に持ちだす奥の手なのである。そういう人たちは、どんなに粗野な態度で、厚かましく自分の心をかき廻されても、誇りの念が強いために、最後のどんづまりまでそれに屈しようと思わず、他人の前に自分の感情をさらけ出すことを恐れるものである。——それをわたしは悟らなかつたのだ。彼女がもじもじしながら、やっと思い切つてあの冷やかしを口にだした、いかにも臆病らしい様子から見ても、わたしは悟らなければならぬはずだつた。けれどわたしはそれを悟らなかつたのである。毒々しい感情がわたしの心を捉えつくしていたのだ。

『まあ、待つてゐるがいい』とわたしは考えた。

7

「ええ、よしてくれ、リーザ、当のぼくが人ごとながらいまわしくつて堪らないのに、本がどうのこうのと、いつてる場合じゃないよ。それに、けつして人ごとじゃありやしない。これはみんな、すっかり、いまぼくの心の中で、ひとりでに目をさましたことなんだよ……」

：いったい、いったい、きみ自身こんな所にいるのが、いまわしくはないのかい？ いや、
どうも習慣の力は恐ろしいものらしいからな！ 習慣ってやつは、人間をどんなものにする
かしれやしない。いったいきみは生涯をとらないで、永久に美しくって、いつまでも
ここに置いてもらえるなどと、真面目にそんなことを考えているのかい？ この家だつて
穢らしいに相違ないが、ぼくはそんなことなど改めていおうと思わない……ただこのこ
とについて、現在のきみの生活について、こういうことをいいたいのだ、——きみはいま
若くて、綺麗で、体もいいし、魂も感情ももっているが、それでもね、うち明けた話、ぼ
くがついさつき目をさました時なんか、きみとここにこうしているのが、けがらわしくて
たまらなくなつたんだよ！ 酔つた勢いででもなければ、こんなところへやって来られるも
のじゃないさ。もしきみがほかの所にいて、世間なみの暮らしをしていたら、ぼくはきみ
に岡惚れするどころじゃない、心の底から惚れ込んでしまつて、言葉をかけてもらえなく
とも、きみの目つきを見るだけで、うちようてんになつたに相違ない。門の外できみの出
入りを待伏せして、いつまでもきみの前に膝をついているだろう。きみを自分の花嫁のよ
うに考えて、しかもそれを名誉と思つたに違いない。きみの身の上について、何か不純な
ことを考えるだけでも、恐ろしいような気がしただろう。ところが、この家にいる以上、

ぼくがひとこえ口笛を鳴らしさえすれば、きみはいやでも応でもぼくの後からついて来なければならぬのだ。ぼくはもうきみの心もちなんか問題にしやしない、ただきみを自分の意に従わせるばかりだ。どんな貧乏百姓が働き手に雇われて行っても、それだつて自分をすっかり奴隷の境涯におとすわけじゃない。決まった期限つてもものがあることを承知しているからな。ところが、きみにはどんな期限があると思う？　いったいきみはここで何を切り売りしているか、まあ考えてもみるがいい。いったい何を自分で縛っているのか知っているかい？　魂だ、魂だよ。きみは自分の魂に対して、なんの権利も持つてやしない。体といつしよに魂まで縛られているんだ！　きみは自分の愛情をありとあらゆる酔っぱらいの嘲弄にまかせているのだ！　愛！　実際これは人生のすべてだよ。実際、それはダイヤモンドにも等しい処女の宝なんだよ。この愛というものは！　だつて、この愛を獲得するためには、自分の命まで投げ出して、死地に飛び込む者さえあるくらいだ。ところが、きみはいま自分の愛を、いくらに値ぶみされていると思う？　きみという人間はすっかり魂ごと買われてしまつているんだから、もうこうなれば、きみに愛を求めるときもなにもしやしない。愛なんかなくなつて、何から何まで自由になるんだからな。まったく処女にとつてこれよりひどい侮辱はないんだよ、きみにはそれがわかるかい？　そうだ、ぼく

は噂に聞いたが、きみたちは馬鹿だもんだから、勤めをしながら色男を持つことを許してもらって、それを慰めに行っているそうじゃないか。そんなことはほんの子供だましのごまかしで、きみたちを愚弄した仕打ちなんだよ。それを、きみたちは真まに受けてるんだからな！ いったいその男は、色男なるものは、本当にきみを愛しているのだろうか、ぼくはそんなことを信じない。いつ何なんどき時ときほかのお客に呼びつけられるかもしれないのに、それを承知しながら、心からかわいがれるはずがないじゃないか。そんなことができたら、それは破廉恥漢だ！ いったいそれは、きみを爪の垢ほどでも尊敬しているかい？ そんな男ときみとの間にどんな共通点があるのだ？ なに、それはきみを馬鹿にして、きみの身の皮を剥ぐだけのことさ、——それがいわゆる色男の愛情なのさ！ まだぶん撲らないだけでも取り柄だが、ひよつとしたら、ぶん撲るかもしれないな。もしきみにそういう男があるのなら、末は夫婦になるつもりかどうか、ひとつきいてみるがいい。そうしたら、それはきみに面と向かって、笑いのめすくらいが落ちだ。悪くしたら唾をひっかけるか、撲りつけるかもしれない、——ところが、そのご当人だって、欠けたびた銭ぐらいの値打ちしかありやしないのだ。いったいきみは何がありがたくってこんなところで自分の一生を台なしにしまったのか、まあ考えてごらん。コーヒーをふんだんに飲まして

くれたり、おいしいものをたら腹くわしてくれるからかい？　だが、それはなんのために食わしてくれるのだと思う？　地道な女なら、そんなご馳走はのどを通らないかもしれないんだよ。だって、なんのためにご馳走してくれるかっていうことが、ちゃんとわかってるからだ。きみは今ここに借金がある。いや、いつまでも借金があるだろう。その借金は永久に抜けることがなくなつて、とどのつまりは、客が唾もひっかけてくれないようなことになつてしまう。そういう時は間もなくやつてくる。若さを頼りにするわけにやゆかないよ。そういう時は、馱馬車くらいの速さでやつてくるよ。すると、きみはここから叩き出されるのだ。いや、ただいきなり叩き出すのじゃなくつて、その前に永い間、いじめたり、小言をいったり、悪口をついたりするに相違ない、——きみが自分の健康を女将おかみに捧げて、自分の若さも魂も女将のために台なしにされてしまったのも忘れて、まるできみが女将の身代を破産させて、赤裸にしたあげく、路頭に迷わしたようなことをいうのだ。だれか肩を持つてくれるなんて、当てにするものじゃないよ。朋輩連中だって女将の御意に入ろうと思つて、やつぱりきみにくつてかかるだろうよ。なにしろこの社会では、みんなが奴隷同然になつて、良心も同情もとつくの昔に無くしているんだからね。こんな奴隷になり切つた連中が口にする罵詈雑言以上に、穢らわしい下司な、癩にさわるものは、こ

の世にまたとないくらいだ。しかも、きみはこの家に何もかもすっかり注ぎこんでしまうのだ。健康も、若さも、美しさも、希望も、——何もかも無条件でほうり出してしまふのだ。だから、二十二くらい年には、まるで三十四、五の年増に見えてくる。でも、病気になるなければまだしもので、そりや神さまにお礼をいってもいいくらいだ。きみはもしかしたら、仕事もしないでぶらぶらしていられるなんて、そんなことを今ごろ考えているかもしれないね！　ところが、これより苦しい、懲役人のような働きは、この世にまたと二つありやしない。また昔だつてありやしなかつた。心臓だつて、あまり涙を流しつくしたものだから、まるで空になつたろうと思われるほどじゃないか。きみがここから追いつ出されてゆく時だつて、一言半句も言葉を返すことができなくて、まるで悪いことをした者のように、しおしおと出て行かなくちやならないんだ。それから、きみはどこかほかの家へ住み替えるが、やがて第三の家へ移り、更にまたどこかへ転々して、最後にはセンナヤ広場に転落するだろう。そこへ行つたら、もうのべつきみをぶん撲るようになるだろう。これがあの土地のお愛想なんだからな。あすこじやお客だつて、なぐらずにかわいがる術すべを知らないんだよ。きみはあすこがお話にならないほどひどいのを、本当にしないでらうね。まあ、いつか行つてごらん、自分の目で見たらわかるだろうよ。現にぼくも一ど正月

休みの時に、一軒の戸口で、ある女を見かけたことがある。その女はあまり喧ましく泣き立てるといので、朋輩たちの手で外へ突き出されたのだ。少しばかり凍えさせてやれというわけさ。そして、戸をびっしやり締め切ったのだ。まだ朝の九時頃だったが、その女はもうぐでんぐでんに酔って、髪を蓬々に振り乱し、半裸体からだは一面にぶたれた痕だらけなのだ。そのくせ真っ白に塗り立てて、目には黒い隈がついているんだが、鼻からも齒からも血がたらたら流れている。たった今、どこかの辻待ち馭者が鞭を一本くらわしたからだ。女は石段に腰を下ろしたが、その手には何かしら魚の干物を握っているのだ。

そして泣き泣き自分の『身の上』をくどくど訴えながら、例の干物で石段を叩きつけている。家の入口には馭者連がたかっているし、酔っぱらいの兵隊どもが面白がって、からかっているのだ。きみは自分もそんなふうになるってことを、本当にしないかい？ ぼくだつて本当にしたくはないんだが、その干物を持った女にしてからが、十年か八年くらい前には、まるで天使のように生き生きした、純潔無垢の姿で、どこからかここへやって来てさ、悪いことなど少しも知らず、ひと言ひと言に顔を赤くしていたのかもしれない、——それは、だれにだつてわかるものじゃないよ。ことによつたら、きみと同じように気位の高い、傲然とすました女で、ほかの連中とは似ても似つかない、まるで女王さまのような

様子をしていたかもしれない。そして、自分に愛し愛される男は、それこそ素晴らしい幸福を受けるのだと、自分でも思い込んでいたに相違ない。ところが、ごらん、結果はどういうことになったろう？ その女が酔っぱらって、髪をふり乱したまま、例の干物で汚い階段をこつこつ叩いている瞬間に、ふと両親の家に暮らしていた清浄無垢な昔の時代を思い出したら、まあいったいどんな気がするだろう。まだ学校へかよっている時分のこと、隣りの息子が途中で待ち伏せしてさ、一生彼女を愛しつづけて、彼女のためには、命も惜しくないと誓う。こうして、二人は永久に互いに愛し合って、大人になったらすぐさま結婚しようかと相談を決めた。その時分の思い出なのさ！ いや、リーザ、もしきみがどこかあのへんの穴蔵の隅つこで、さつき話した女のように少しも早く肺病で死んでしまったら、それはきみの幸福だよ。本当に幸福というものだ。きみは病院へ行くといったね。そりや病院へやってくれたらけっこうだが、もし女将がまだきみという人間に用があるといったら？ 肺病はどうも特別な病気でね、熱病などとは違うから、こいつにかかった人間は、最後のどんづまりまで望みを棄てないで、わたしは達者だといいながら、自分で自分を慰めるものなんだ。そこがまた女将にはもつけの幸いなさ。心配ご無用、それはまさにその通りなんだ。ねえ、魂も売り渡したし、おまけに借金までしているんだから、つまると

ころ、ぐうの音も出せやしない。そこでいよいよ最後になると、みんなきみを棄てて、つぽを向いてしまう。だって、そうなれば、逆さに振ったって鼻血も出ないんだからな。それどころか早く斃くたばつてくれないで、よけいな場所ふさぎをするというんで、かえってきみのほうを責めるくらいさ。水がほしいたって、それさえなかなかよこしやしない。

『このあまめ、いつになったら斃くたばりやがるんだ。のべつ喰り通して、おちおち寝さしてもくれやしない。お客様だつて気持ちを悪くなさるよ』などと悪態をつけて、やっとお情けに飲ましてくれるという始末さ。そりや確かな話だ、ぼくは自分で、こういうのを洩れ聞いたことがあるんだから。こうして今にも死にかかった人間を、穴蔵のなかでも一番けがらわしい隅っこへ押し込んでしまう、——そこは薄暗くつてじめじめしているのさ。そのときみはたった一人、横になつたまま、どんなことを考えるのだろうか？ いよいよ息をひき取ると、縁もゆかりもない人が寄り集まつて、じれったそうにぶつぶついながら、死骸の始末をするという段取りだ。だれ一人きみのためにお祈りをする者もなければ、きみのために溜め息ひとつつく者もない。ただ少しも早く厄介払いさえすればいいんだ。粗末な棺桶を買つて、ちようどきようぼくのみた不仕合わせな女のように、さっさと担ぎ出される。そして居酒屋へ追善のために一杯ひっかけに行くのが落ちだ。墓場はじとじとし

てぬかるみだらけ、それにべた雪が降ってしようという寸法さ、——なにも、きみなんかのために、お天気だつて遠慮する手はないからね。『さあ、下ろした、ヴァニューハ、やつぱりこうした「身の成行き」なんだな。あまめ、ここまで来ても、やつぱり逆さに落ちて行きやがった。繩を縮めろよ、このど畜生め』『なに、このままだつていいよ』『何がいいんだい？ だつて、横つ倒しになつてゐるでねえか。これだつてやつぱり人間にや違ひなかつたんだぜ、そうじゃねえか？ さあ、これでよしと、土をかけた』こういう調子で、いつまでもきみなんかのことで、とやかくいう気にもならないのさ。あお味がかつた湿っぽいねば土を、急いで上からかぶせると、そのまま居酒屋へ行つちまう……これでこの世におけるきみの思い出も、幕になつてしまふんだ。これがほかの人間なら、子供らや、両親や、亭主などが、墓詣りの一つもしてくるのだが、きみには涙をこぼしてくる者も、溜め息一つつく者もないし、思い出を語ってくれる者もありやしない。いつまで経つてもだれ一人、それこそ広い世界にだれ一人として、きみの墓に詣るものはないだろうよ。きみの名は地球の表面から消えてしまつて、——きみという人間は、まるで生まれたこともないような具合なんだ！ あたりは一面の泥と沼地で、每晚死人が墓から起きあがつてくる時刻に、棺の蓋をとんとたたきながら、『どうか、みなさん、ほんのちよつとでも明

るい世界へ出してください！ わたしは生きてはいましたけれど、本当の暮らしを見たことがないんです。わたしの暮らしは、雑巾のようにくたくたに使われて、センナヤ広場の居酒屋で、酒といっしょに吞まれてしまったのです。どうか、みなさん、もう一度あかるい世の中で暮らさしてください！……』と、わめきたいくらいのものさ」

こういつているうちに、わたしはだんだん悲痛な感激にとらわれて、しまいには喉が痙攣を起こしそうになって来た。と……不意にわたしは言葉を止めて、慍えたように腰を持ちあげた。そして、恐る恐る首をかしげ、胸をどきどきさせながら、聞き耳を立て始めた。わたしがこんなにどきまぎしたのは、わけがあったのだ。

わたしはもうだいぶん前から、自分が女の魂を顛倒させ、その胸をずたずたにひき裂いたのを、おぼろげながら感じていた。しかも、それを確信すればするほど、少しも早く、できるだけ正確に、目的を達したくなかった。それは一種の演技、役者の演技に似た本能が、わたしを夢中にさせたのである。もつともただの演技ばかりでもないのだが……

わたしは自分の話振りがぎごちなくて、いかにもわざとらしく、書物くさいところさえあるのを、自分でも知っていた。ひと口にいえば、わたしは『まるで本でも読んでいるよな』ふうでなければ、話の仕方を知らなかったのである。しかし、わたしがまごついた

のはそのせいではない。わたしは相手がわかってくれるのを予感していたばかりでなく、この書物くさいところがかえって仕事を撈らしてくれるかもしれないと、ひそかに自負していたくらいである。けれども、いま目的を達したときに、わたしは突然おじけづいたのである。ああ、わたしは今まで一度もただの一度も、これほどの絶望を見たことがない！

女は俯伏しになったまま、ひしとばかりに枕に顔を押しあてて、両手でその枕をかかえていた。胸が破れそうな気がしたのだ。その若々しい全身は、まるで痙攣でも起こしたように、ぴくぴくと引つつつていた。じつと押しこらえていた慟哭は、彼女の胸を圧迫して、はり裂けそうにしていたが、やがて不意に魂ぎるような悲鳴と号泣になって、外へほとばしり出たのである。そのとき、彼女は更に激しく枕に顔をすりつけた。彼女はこの場合、たとえ一人でも生きて人間に、自分の苦悶や涙を見てもらいたくなくかつたのだ。彼女はしきりに枕を噛みしめていたが、とうとう自分の手を血の出るほど噛みやぶってしまった（わたしはそれを後でみつけた）。それかと思うと、ふり乱した髪に指を突っ込んで、一生懸命息を殺し、歯をくいしばりながら、そのままの姿勢でじつと静まり返っていた。わたしは何やら彼女に話しかけて、気を鎮めるようになだめかけたが、それは遠慮すべきだと感じた。やがて突然、自分のほうがなにか一種の悪寒、というより、ほとんど恐怖に近

いものを感じながら、手さぐりで飛び出すが早いかな、そこそこに逃げて行こうとした。部屋の中は暗かった。どんなにあわてても、手早く支度をすませることができなかった。ふとわたしはマツチ箱と、まだ使わない新しい蝋燭のついた燭台をさぐり当てた。蝋燭の火が室内を照らすが早いかな、リーザは不意に跳ね起きて、坐り直した。そして、妙にひん曲がった顔をして、半ば気ちがいめいた微笑を浮かべながら、ほとんど無意識にわたしをみつめた。わたしはその傍に腰を下ろして、女の手をとった。彼女はわれに返って、いきなりわたしに飛びかかり、わたしの体を抱きしめようとしたが、それだけの勇氣もなくて、静かに頭こうべを垂れた。

「ねえ、リーザ、ぼくは役にも立たないことに……どうか堪忍してくれ」とわたしはいいかけたが、彼女が恐ろしい力でわたしの手を握りしめたので、わたしは見当ちがいのことをいつているところづき、そのまま口をつぐんだ。

「これがぼくの住所だ、リーザ。遊びにおいでよ」

「行きますわ……」彼女はやはり頭を挙げようとししないで、きつぱりとこうささやいた。

「それじゃもう行くよ、ご機嫌よう……さよなら」

わたしは立ちあがった。彼女も同様に立ちあがったが、とつぜん真っ赤になって、びく

りと身を慄わせると、椅子の上においてあった肩掛けを引つつかんで、口までかくれるほど身にまとった。それがすむと、彼女はまたなんとなく病的な微笑を洩らして、顔を赤らめながら、妙な目つきでわたしを眺めた。わたしの心は痛んだ。わたしは急いでこの場を立ちのき、姿をくらまそうと思った。

「待つてちようだいな」もう出口の扉まで来た時、彼女はだしぬけにわたしの外套を引きながら、こういった。そして、せかせかと蠟燭をそこに置くと、駆け出すように行つてしまった。——察するところ、何かあるものを思い出したか、それともわたしにもつて来て見せようという気らしい。駆け出しながら、彼女は顔を真っ赤にして、目をきらきら輝かし、唇には微笑さえ浮かべた、——いったいなにごとだろう？ わたしは待つともなしに、待つていた。まもなく彼女は引き返したが、その眼ぎしはなにかのゆるしでも乞うようであった。概してその顔も目つきも、さきほどのような気難しそうな、容易に人を信じない、強情な表情とはちがっていた。いま彼女の目つきは、まるで哀願するような、軟かみを帯びていると同時に、いかにも信じ切つたような、優しい、おずおずしたところがあった。それは、子供が自分の大好きな人に、物をねだるような目つきだった。その目は明るい鳶色をして、愛情をも陰鬱な憎しみをも映すことのできる、生き生きした美しい目であった。

まるでわたしが説明なしに、なんでもわかる一段えらい人間だと思っ
ているらしく、彼女は少しも説明がかったことをいわないで、一枚の紙
きれをわたしに差しのべた。この瞬間、彼女の顔はなんともいえないほど無邪気な、ほとんど子供のような得意の色に輝き渡っていた。わたしは拵けて見た。それは、どこかの医学生か、ないしはそれに類した男から、彼女に宛てた手紙で、恐ろしく仰々しい華やかな文句を連ねてはいたけれど、並みはずれて馬鹿丁寧な恋のうち明けだった。今では文句を一々思い出せないが、乙に気取った文章の間から、こしらえものでない真実の感情が覗いていたことだけは、はつきりおぼえている。わたしが読み終わつたとき、好奇心に燃える子供のよう
に性急な彼女の視線に出会つた。彼女は吸いつけられたようにわたしの顔を見据えて、わたしが何をいい出すかと、じりじりしながら待つていた。彼女は早口に言葉すくなく、しかしなんとなく嬉しそうな、誇らしげな調子で、わたしに説明して聞かせた。それによると、彼女はどこかの家庭で催された舞踏会に出席したのである。それは「本当に、本当にいい人ばかりで、ちゃんと家庭を持つている人たちですの、そして、まだなんにも知らない、それこそまったくなんにも知らないんですの」なぜって、彼女自身もここではまだほんの新参しんまいで、ただ一時こうしているばかり……けっしていつまでも腰を据えようと腹を決めたわけではない、前借を

払い次第、きつとここから出て行くつもりだから……と彼女はいった。——そこで、この舞踏会にその学生も来ていたので、一晚じゆう彼女と踊ったり話したりしたのだ。聞いてみれば、彼はやはりリガに住んでいて、子供の時から彼女と知り合いの間柄で、いつしよに遊んでいたとのことである。しかし、それはもうずっと前の話であった。学生は彼女の両親も知っているけれど、あのことについてはなんにも、なんにも、本当になんにも知らないし、そんな疑いさえ持つてはいないのだ！　ところが、舞踏会の翌日（つまり今から三日前に）、この学生は、彼女といっしよに舞踏会に行った女友だちを介して、この手紙を届けたのである……」そして……いえ、まあ、それつきりなんですの」

彼女は話し終わった時に、なんとなく恥ずかしげに、そのきらきら光る目を伏せた。

あわれな女、彼女はこの学生の手紙を、まるで宝物のように、大事にしまっていたのである。そして、自分のような女でも真面目に真剣に愛してくれたり、慇懃な調子で話しかけたりする人もあるということを、わたしに知らさないうちは帰したくないと思って、この唯一の宝物を取りに、わざわざ駆け出して行ったのだ。疑いもなく、この手紙はなんの実も結ばずに、このままずっと手函の中にしまいこまれる運命をもっているに違いない。しかし、そんなことはどちらでも同じなのだ。彼女はこの手紙を自分の誇りとして、自分

の身のあかしとして、一生涯たからものように大事に保存することだろう。わたしはそれを信じて疑わない。で、現に今もこんな時に自分のほうから思い出して、この手紙を持ちだしたわけである。つまり、無邪気にそれをわたしに自慢して、自分の価値回復をしてもらいたかったのである。わたしにそれを見せて、褒めてもらいたかったのである。わたしはなんにもいわないで、彼女の手を握ると、そのまま外へ出た。わたしはこの場を遁れたくてたまらなかつたのだ……べた雪が依然として、綿屑のように降りしきっているのかまわず、わたしは家までずつと歩いて帰った。わたしは押し潰されたようにへとへとに疲れて、しかも何やら解^げしかねるような気分になっていた。しかし、真実は早くもその疑惑の中から輝いていたのだ。いまわしい真実よ！

8

もつとも、わたしはそうすぐにこの真実をみとめようとはしなかつた。幾時間か鉛のよう^うに深い眠りを貪った後、朝になって目をさますと、わたしはすぐさま昨日のことを残らず思い返してみ、昨夜リーザに対してとつたセンチメンタルな態度や、その他すべて

『あの時の恐怖や憐憫』に、驚きの念さえも感じたものである。『よくも、まあ、あんな女々しい神経衰弱の発作にやられたものだ、ちえつ、いまましい！』と、わたしは自分で解決を下した。『それに、なんだっておれはあの女に所書きなんか渡したんだろう？

もしやって来たたら、どうするつもりだ？ だが、或いはやってくるのもいいかもしれない。かまうもんか……』しかし、いまわたしにとって肝腎な、何よりも重大な問題は、明らかにこんなことではなかった。何をさておいても大至急、ズヴェルコフやシーモノフに、わたしという人間の価値評価を回復させなければならぬのだ。それこそつまり、最もかんじんな問題なのだ。リーザのことなどは、その朝あまりあたふたしたために、まるで忘れてしまったくらいである。

何よりまっさきに、昨日シーモノフに借りた金を、急いで返さなければならぬ。わたしは思い切った手段に訴えることにした。ほかではない、アントン・アントーヌイチから大枚十五ルーブリ借りようというのだ。まるで誂えたように。課長はこの朝上々の機嫌だったので、二つ返事で貸してくれた、それが嬉しくてたまらなかつたので、わたしは借用証文に署名しながら、いかにも磊落そうな態度で、昨日、「友だちといっしょにオテル・ド・パリでひと散財やつたのです。実は友だちの送別会をしたのですが、これはいつてみ

ると、竹馬の友なんでして、なかなか道楽者のわがまま息子なんです。——そりやむろん、家柄はいいし、財産は相当もっているし、華々しい前途を約束されているのです。才気縦横で愛嬌があるものですから、ああいったふうの婦人連と、ね、おわかりでしょう、色事の一つもしようという男なんです。みんな『半ダース』ばかりもよけいに飲みすごして、それから……』といった調子で、ざつくばらんのうち明け話をしたものだ。ところが、心配することはないもので、きわめて軽妙に、造作もなく、自由に言葉がするすると口を出てくれた。

家へ帰ると、わたしはさつそくシーモノフに手紙を書いた。

わたしは今でもこの手紙のことを思い出すと、紳士的に胸襟を開いた虚心坦懐な調子に、われながら心からほればれするくらいである。要領がよくて、上品で、しかも、これが最もかんじんな点なのだが、ひと言としてよけいな言葉を使っていない、——わたしは万事自分を悪者にしてしまったのだ。わたしは『もし小生に弁解などということが許されるならば』という前置きで自己弁護を試みた。曰く、今までまったく飲酒の習慣がなかったために、オテル・ド・パリで五時から六時まで、みんなを待ってる間に、つい一杯ひっかけたところ（そういうことにしてしまっただ）たちまち酩酊してしまっただのである。わた

しは主として、シーモノフにむかつて謝罪した上、ほかの仲間一同、ことにズヴェルコフに、この釈明を伝えるように頼んだ。『今さら夢うつつのごとく思い起こせば』小生はズヴェルコフに、侮辱を加えたような気がする、そう書いた後で、わたしは自分で諸君のところへ出向くべきはずなのだけれども、頭が痛いし、それに何よりも気が咎めるから、——こんなにつけ足したものである。ことにわたしは自分の文章に現われた『一種の軽妙な味』、というより、むしろ磊落な調子に、われながら満足を禁じ得なかつた（もつとも、この磊落さは、けつして儀礼を失してはいないのだ）。このことはどんな理屈にも優つて、わたしが『昨日の穢らわしい出来事』に対して、かなり独立独歩の見方をしていているということ、彼らに一読たちまち悟らせるだけの効果を有していた。なんといつても、わたしはおそらく諸君が考えていられるように、それほどすっかり完全にまいってはいないのだ。それどころか、自己を尊敬する紳士にふさわしい態度で、冷静にいつさいの事態を観照している。『若いうちには、それくらいのことにはありがちだ』といったようなわけである。

『おまけに、この軽妙洒脱さは、まるで王侯の文章にも比すべきじゃないか』自分の手紙を読み返しながら、わたしはほれぼれとしてしまった。『それというのも、おれが頭脳の発達した教養人だからさ！　もしほかのやつがおれの立場におかれたら、どうして窮地を

滑り抜けたらいいか、とほうにくれてしまつたらうが、おれはこのとおりうまく体たいをかわして、また勝手な太平楽を並べている。それもこれもみんな、おれが「教養のある頭腦の發達した現代人」だからなのさ。——しかし、ことによつたら、昨日あんなことが起こつたのも、本当に酒のせいかもしれないぞ。ふむ……だが、ちがう。酒のせいじゃない。おれは五時から六時まで彼らを待っている間に、ウォート力なんかで飲まなかつたんだからな。おれはシーモノフに嘘をついたのだ。ずうずうしく嘘をついたのだ。しかし、今だつて別に良心は咎めない……』

ええ、面倒臭い！ とにかくうまくごまかしたのだ、それが肝腎かなめなところだ。

わたしは封筒の中に六ルーブリ入れて、きちんと封をした後、アポロンに頼んで、シーモノフのとこへ届けてもらうことにした。手紙に金が封入してあることを知ると、アポロンは急に慇懃な態度になって、使いの役を承知した。夕方、わたしは散歩に出かけた。まだ昨日以来、頭痛がして、めまいを感じた。けれども、だんだん時刻が移つて、夕闇が濃くなればなるほど、わたしの受ける印象はますます変転し、こぐらかつていった。そして、想念もそれにつれてゆくのであった。わたしの内部で、情感と良心の底にひそんでいたあのものが、いつまで経つても消え失せなかつた、——消え失せようとしなかつたのだ。そ

して、焼きつくような憂悶となつて、外部に現われるのであつた。わたしはメシチャンスカヤ街だのサドーヴァヤだのユスーポフ公園だの、おもに人通りの多い商店街をさまよい歩いた。わたしはいつもたそがれ時に、こういった街々を散歩するのが、かくべつ好きなのであつた。つまり、商人や、職人、その他あらゆる種類の通行人が、毒々しいほどいら立たしげな顔をして、その日の職場から自分の家へ帰つて行きながら、ぞろぞろと群れをなして往来している、そういう時刻が好きなのである。わたしはこの貧乏くさい雑沓の光景や、この赤裸々な散文的情調が気に入つたのだ。この日はこうした街上の混雑が、普段よりも一倍わたしをいらいらさした。わたしはどうしても自分で自分の心を自由にして、まとまりをつけることができなかつた。何やら心の中から、一種の痛みを伴いながら、絶えずぐんぐんと押し上げて来て、いつかな鎮まろうとしなかつた。すっかり混乱しきつた気持ちになつて、わたしは家へ帰つて来た。まるで何かの犯罪が重石おもしのように、わたしの魂にのしかかつているようなあんばいだつた。

リーザがやつてくる、この考えがのべつわたしをくるしめていた。不思議なことには、昨日のさまざまな記憶の中で、彼女に関する記憶だけが、なんだか特別にすっかり独立した形で、わたしを苦しめるのであつた。そのほかのことは、夕方までに綺麗さっぱり忘れ

てしまつて、かまうものか、という気持ちになつていた。そして、相変わらず、シーモフに宛てた自分の手紙に大満足であつた。ところが、どうしたものか、家へ歸つたとたん、その満足感はなくなつてしまつた。まるでリーザ一人のことで、心を悩ましていたよ
うな形である。『もしあれが来たらどうしよう？』わたしはひつきりなしに、こう考えて
いた。『ふん、どうするものか、かまわない、勝手にくるがいい！ ふむ。ただあの女に
見られるのがいやだな、たとえばおれの暮らしぶりなんかを。ゆうべおれはあの女の前で、
素晴らしい英雄になつて見せたのに……いま……ふむ！ だが、それはおれがこんなに身
をおとしたのが悪いのだ。家の中はまるで赤貧洗うがごとしじゃないか。それに、おれは
昨日こんな身なりで、勇敢にも宴会へ出かけたんだからな！ この模造皮張りの長いすだ
つて、中から腸はらわたが覗のぞいている始末だ！ それに、部屋着だつて、満足に体を包むこともで
きやしない！ ひどいぼろぼろだ……あの女はこれをことごとく見て取るわけだ。それに、
アポロンにも見参する。アポロンの畜生は、きつとあの女に不作法を働くに違いない。あ
いつはおれにいやがらせをしようと思つて、あの女に喰つてかかることだろう。ところが、
おれはいうまでもなく、いつもの癖でびくびくして、あの女の前でちよこちよこ走り廻つ
たり、部屋着の裾をかき合わしたり、にたにた笑つたり、嘘をついたりするに相違ない。

うう、なんていやなこった！ だが、一番いやなのは、そんな問題じゃない！ ここには何かもつと重要な、もつと穢らわしい、もつと陋劣なことがあるんだ！ そうだ、陋劣なことだ！ それにまたしても、またしてもあの破廉恥な虚偽の仮面をかぶらなくちやならない！……』

この考えに行きあたると、わたしは思わずかつとなった。

『なんだつて破廉恥なのだ？ どんな破廉恥なのだ？ おれはきのう誠心誠意、話したのじゃないか。おれ自身にも本当の感情が湧いていたのを、いつまでも覚えていてる。おれはまったくあの女の心に高潔な感情を呼び起こそうと思ったのだ……あの女が泣いたのはいいことだ。それはよき効果をもたらすだろうな……』

が、それでも、わたしはどうしても気が落ちつかなかつた。

家へ帰ってから、やがてもう九時過ぎになったので、どう考えてみてもリーザがやってくる気づかいはないと承知しながら、やつぱり一晩じゆう、彼女のことをちらちら頭に浮かんだ。それに第一、いつも必ず、同じ恰好をした彼女の姿が思い起こされる。つまり、昨夜の邂逅を通じて、ある一つの瞬間がとくにはつきりと浮かび出すのであった。それは、わたしがマッチを擦って部屋を照らすと、受難者のような目つきをした、あお白い、ひん

曲がった彼女の顔が目映った瞬間である。この瞬間、彼女の顔にはなんとというみじみな、なんとという不自然な、なんとという歪んだ微笑が浮かんでいたことか！けれど、まだその時は、自分が十五年たった後までも、みじめな、歪んだ、役にも立たぬ微笑を浮かべているこの瞬間のリーザを、依然として思い出そうなどは、夢にも想像しなかつたのである。翌日になると、わたしはもうそうしたいっさいを疲れた神経のせいにして、くだらないことだ、むしろ誇張にすぎないと考えるだけの余裕が、心にできていた。わたしはいつも自分のこうした弱点を意識していたので、どうかすると、それをひどく恐れていたのだ。

『いつもおれは誇張してばかりいる、そのためにろくなことはないのだ』とわたしは二六時中、心のなかでくり返していた。しかし、それにしても、『それにしてもリーザはやっぱり来るかもしれないぞ』これがそのとき、わたしのあらゆる考察のしめ括りとなるリフレインだった。わたしは不安のあまり時々癩癩を起すほどであった。『やってくる！必ずやってくる！』わたしは部屋のなかを駆けずり廻りながら、こう叫んだものである。

『今日でなければ、明日はやってくる。必ずさがしだすに相違ない！あの純潔なるハートをもった連中のロマンチズムときたら、いまいましいっちゃありやしない！あの穢らわしいセンチメンタルな魂をもった連中の浅薄さ、愚劣さ！陋劣さ！ふん、どうし

てこれがわからないのだろう、これがわからないはずはないように思えるんだがなあ？…
…』けれど、ここでわたし自身も言葉を止めざるを得なかった。しかも非常な困惑を感じながら。

『なんという無造作なこつたろう』とわたしは何かのついでにこう考えた。『人間の魂をすぐさま思いどおりに転換させるには、なんと僅かな言葉でこと足りるのだろうか、なんと僅かな牧歌情調を注入するだけで十分なのだろう（それに、牧歌情調も付け焼刃の、書物くさい、こしらえものでたくさんなのだ）。それがつまり処女性というやつだ！これがつまり白紙の心というやつだ！』

ときどき、自分で彼女のところへ出かけて行き、『何もかもぶちまけた上』、わたしのところへやって来ないように頼もうか、という考えが頭に浮かんだ。けれど、その時こう考えるが早いか、わたしの心中には猛烈な毒念が込みあげて来て、もしリーザがふと偶然にわたしの傍にい合わせたら、あの『いまいましい』あまをべしやんにやつつけて、思うさま恥をかかせ、唾を吐きかけ、ぶん撲ったあげく、追っ払ってしまったろうと思われるほどだった！

けれど、一日たち、二日たち、三日と過ぎても、——彼女はやって来なかった。それで、

わたしも安心し始めた。ことに九時過ぎた後は、すっかり元気づいて浮かれだし、時にはかなり甘い空想さえ始めるのであった。『おれは、早い話が、リーザが時おり家へやって来て、おれの話の話を聞くということによって、リーザを救ってやることになるのだ、——おれは彼女を教育し、頭脳を発達させてやる。そのうちに、とうとう、彼女がおれに恋している、しかし熱烈に恋しているということに、おれもいつか気がついてくる。しかし、おれは悟らないような振りをしているのだ（もつとも、なぜそんな振りをするのか、自分でも知らない。おそらく、ただ美的感覚のためだろう）。とどのつまり、彼女はいかにもきまり悪そうに、可憐な風情で慄え慄え泣きながら、おれの足もとに身を投げて、あなたはわたしの命の親です、わたしは世界中の何よりも、あなたを愛しています、と告白する。おれは驚きもするけれど、しかし……こういつてやる、リーザ、おれがお前の愛に気がつかなかったなんて、お前はまあそんなことを考えているのかい？ おれは何もかも見透していた、察していた。けれど、おれは自分のほうからさきに、お前の愛情を望むことをはばかりかっていたのだ。というのは、お前に義理をかけていたので、お前が恩返しのもつりでも、わがとおれの愛に答えなければと、自己強制をしやしないかと、それを恐れていたのだ。自分で無理に、おそらくはありもしない感情を呼び起こすかもしれないだろう、だがおれ

はそんなことなど望まない。だって、それは……専制というものだからね……それはあまりに心ない業だからね（まあ、ひと口に言えば、わたしはこのところで恐ろしく西欧ばりの、ジオルジュ・サンド好みの、筆紙につくし難いほど高潔典雅な文句を、だから並べ立てたわけである……）。しかし今は、いまこそお前はおれのものだ、お前はおれの創造したものだ、お前は純で美しい、お前はおれの美しい妻なのだ』

はばかりことなく悪びれず入っておいで

お前は立派な女あるじだ！

それからわれわれは二人楽しく暮らして、外国旅行へ出かけたなり、そのほかいろいろさまざまなことをするのだ。ひと口に言えばわたしはわれながら胸くそが悪くなって、とどのつまり、自分で自分にペロりと舌を出してやった。

『それに、あいつ、あの「すべたあま」、出してもらえないんだ』とわたしは考えた。

『ああいうところでは、あんまり自由に外へ出さないらしいからな。ことに晩なんかおさらだ（わたしはどういうわけか、彼女がきつと夕方、しかも七時にくるに違いないよう

な気がしたのだ)。もつとも、あの女の話では、まだすっかり籠の鳥になりきってるわけじゃなくって、なにか特別扱いになつてゐるそうだ。ふむ！ してみると、やってくるはずだ、きつとやつて来やがる！』

でも、この時アポロンが例の無造作な仕草でわたしの気を紛らしてくれたから、まだしも助かった。こいつはわたしの堪忍袋の緒を切らすのだ！ これはわたしの癌であり、神の送られたもうた鞭なのだ。わたしたち二人はこの数年間たがいにしなぎを削り通したので、わたしはこの男が憎くてたまらなかつた。本当にどんなに憎く思ったかわからないほどである！ わたしは生まれてこの方、この男くらい憎いと思つた人間はほかに一人もない、どうかすると矢も楯もたまらないようなことがある。彼はかなり年輩のもつたいぶつた男で、多少は仕立の内職もしているのであつた。しかし、なぜこの男が法外と思われるほどわたしを軽蔑するのか、一も二もなくひとを高めから見くだすのか、ほとほと合点がゆかない。もつとも、彼はだれでもみんな高めから見くだす癖があつた。ただ白っぽい眉をした顔や、つるりと綺麗に撫でつけた頭や、精進油をてかてか塗つて、鶏冠とさかのように梳き上げた前髪や、V字形に下唇を突き出したしかつめらしい口もとや——これだけのものをひと目みただけで、こいつはかつて一度も自己に疑いをさし挾んだことのない人間だなど、

即座に直感することができるといふほどである。それはとてつもない術学者ペダントであつた。しかも、わたしが今まで逢つたなかでも最大のペダントで、おまけにマケドニヤのアレクサンドル大王にのみふさわしいような自尊心の持ち主なのであつた。彼は自分の服のボタン一つ一つに惚れこんでいた。自分の爪一つ一つに惚れこんでいた、——実際、間違ひなく惚れこんでいたのだ。彼の様子はまさしくそのとおりだつた！ わたしに対する態度は完全な専制主義で、めつたに口なごきかなかつた。もしわたしの顔を見なければならぬことがあると、自信にみちた莊重な確固たる目つきに、必ず冷笑を湛えて眺めるのだ。そのために、わたしは時々むらむらと癩癩を起こすのであつた。受持ちの仕事をするのでも、なにかわたしに大したお情けでもかけるようなあんばいなのである。もつとも、彼はわたしのためにほとんど何一つしなかつたし、また何かしなければならぬ義務があるとさえ思つていなかった。彼がわたしを世界一の馬鹿者と心得ていたのは、疑いの余地もないことだつた。だから、『わたしを傍へかかえておいたのは』ただだ毎月給金がもらえるからというだけの理由にすぎない。彼は『なんにもしないために』七ループリの月給でわたしのところへ来るのを承知したのである。彼のためには、わたしも多くの罪業をゆるしてもらえらう。どうかすると、憎悪の念が極端に嵩じて、彼の足音を聞いただけでも、おもわず瘧

嚙がおこりそうになるくらいだった。なによりも胸くそがわるいのは、この男の舌つたるいひそひそ声であった。彼の舌は普通よりも長すぎるか、或いは何かそういったようなふうなので、いつも舌を纏らして、しゅっしゅっというような発音をした。彼はそれが恐ろしく自慢で、そのために少なからず尊厳を増す、とても思っているらしかった。いつも両手を背中に組み、目を伏せて、小さな声で同じ緩急を保ちながら話すのだ。ことに、仕切り板のむこうになつて自分の部屋で、聖詩編を読みだすときなど、わたしはよけいに疝が立つてくるのであった。この朗誦のために、わたしはどれくらい彼とやりあつたかしかない。しかし、彼は毎晩、まるで死者を慕つてでもいるかのように、低いなだらかな声で節つけて朗読するのが、おそろしく好きだった。面白いことには、彼は結局いま聖詩編読みに備われて、葬式まわりを商売にするようになった。またそれといっしょに、鼠退治と靴墨づくりもやっているのだ。けれど、その当時、わたしは彼を追っ払うことができなかった。まるでこの男がわたしの存在と、化学的に溶け合っているような具合なのだ。それに彼自身も、わたしの傍を離れることなど、こんりんざい、承知しなかつたに相違ない。わたしは サンプル・ガルニ 家具付貸間などに住むことができなかった。わたしの住居はわたしの隠れ家であり、わたしの殻であり、わたしの筐であつて、その中へわたしは全人類を避けて隠れ棲

んでいたのだ。ところで、アポロンはどういうわけか知らないが、この住居の付属物みたいに思われて、そのためにわたしはまるまる七年間、この男を追い出すわけにゆかなかつたのである。

たとえば、彼の給料にしても、たとえ二日なり三日なりでも、待たしておくことはできなかった。そんなことをしようものなら、彼はそれこそ大変な騒ぎを引き起こして、わたしの身の置き場もないようにしてしまうだろう。けれど、この二、三日というもの、わたしはありとあらゆる人間にむかって腹を立てていたのです、どういうわけか、またなんのためか知らないけれども、アポロンのやつに罰をくわして、もう二週間ばかり給金の支払いを延ばしてやろうと決心した。わたしはもうとうから二年ばかりの間、このことを計画していたのだ、——ほかにわけはない、ただ彼がわたしに対してああえらそうな顔ができた義理ではないのだから、わたしだつてその気にさえなれば、いつでも給金を渡してやらなればかりだということを、思い知らせてやるためにすぎないのだ。わたしはこの話を彼にしまいと腹を決めた。つまり、彼の傲慢を懲らしめるために、むこうからさきに給金の話を切りださせようというのである。もしむこうから切りだしたら、わたしは引出しの中から七ルーブリそつくりとり出して、その金はちゃんと手もとにあるのだが、わざとしまつ

であるのだということを見せてやろう。そのわけは『ただ給金を渡すのがいやなんだ、いやなんだ、いやなんだ。いやだというわけは、そうしたいからなのだ』なぜといって、『おれは主人だから、そうしたいと思えば、自分の勝手になる』からだ。あいつが礼儀作法を知らぬがさつ者だからだ。もしあいつが丁重に頼みこめば、おれも我を折って渡さないものでもない。さもなければ、二週間待たつて、三週間待たつて、まるひと月待たつて……

けれど、わたしがどんなに意地を張つてみても、結局はやはり彼の勝利だった。わたしは四日と持ちこたえることができなかつた。彼はまず第一段として、いつもこういう場合に使う手を用いた、というのは、こういったような場合が、今まであつたからである。やつてみたからである（しかも、断つておくが、わたしはこういうことを前からすっかり知っていたのだ。やつての卑怯な戦術を暗記するほど知りぬいていたのだ）。ほかでもない、まず手初めとして、おそろしく厳格な視線をわたしにそそいで、それを幾分間かぶつづけにそらさないでいるのだ。ことにわたしに会つた時とか、わたしの外出を見送る時などがそうなのである。もしわたしがそれを持ちこたえて、その視線に気のつかないような振りをしていたら、彼は依然として無言のまま次の拷問にかかる。たとえば、出しぬけに

これというわけもないのに、わたしが歩きまわるか本を読むかしている時など、静かにふわっとわたしの部屋へ入って来て、戸口のところに立ちどまり、片手を背中へ廻し、片足をちよつとうしろへ引いて、じつとわたしを見つめにかかる。その目つきは厳格というよりも、完全に軽蔑を表わしているのだ。わたしが不意に何用かとたずねると、彼はまるで返事もしないで、ひきつづきさらに何秒間か、穴のあくほどわたしの顔を見つめた後、なんだか特別へんなふう唇を引きしめて、きわめて意味深長な顔つきで、くるりと廻れ右をすると、しずかに部屋を出て行くのである。それから二時間もたつと、またやって来て、わたしの前に姿を現わすのだ。よくわたしは腹立ちまぎれに、もう何用かなどとたずねないで、いきなり自分のほうから威のある表情できつと首を上げ、同じように穴のあくほど彼の顔を見つめてやる。こうして、わたしたちはものの二分間も、互いの顔を睨み合っているのだ。そのうちに彼は結局、えらそうに重々しく廻れ右をして出て行くと、二時間ばかり鳴りを潜めているというわけである。

もしそれでもわたしが性根を直さないで、謀反をつづけていたら、彼はとつぜんわたしを見つめながら、溜め息をつきはじめる。まるでこの溜め息でもって、わたしの底知れぬ墮落の度を量るように、長い深い溜め息をつくのである。むろん、とどのつまりは、完

全に彼の勝利でおわつてしまう。わたしは気ががいのように、見当ちがいのことをわめき立てるけれども、結局、義務の履行を強制させられたものだ。

しかし、この時は例の『厳格な視線』の機動演習が始まるか始まらないかに、わたしはさつそく前後を忘れてしまつて、狂気のごとく彼に喰つてかかった。それでなくても、わたしの神経はあまりにいら立つていたのである。

「待て！」とわたしはかつとなつて叫んだ。それは彼が片手を背中に廻したまま、無言に廻れ右をして、ゆつくりと自分の部屋へ歸つて行こうとした瞬間である。「待て！ 歸つて来い、歸つて来い、貴様にいうことがある！」きつとわたしが不自然なほど大きな声でわめいたからだろう、彼はまた向き直つて、多少おどろいたような顔つきで、わたしをじろじろ見まわし始めた。でも、相変わらずひと言も口をきかない。これがわたしの癩癩を破裂させた。

「なんだつて貴様は断わりもなしにひとの部屋へ入つて来て、そんなにおれの顔をじろじろ見るんだ、返答しろ！」

けれども、彼は三十秒ばかりわたしの顔を落ちつき払つて見つめた後、またもや廻れ右をしようとした。

「待てというに！」と、わたしはその傍へ駆け寄りながらどなった。「動くんじゃないぞ！　そうだ。さあ、今度は返事をしろ、なぜ貴様は入って来て見るんだ？」

「もし今なにかお言いつけになることでもありませんたら、それをいたすのがわたくしの勤めでございますからな」やっぱりしばらく無言の後、彼はひよいと眉を上げ、落ちついて右から左の肩へ首を曲げながら、例のしゅっしゅっという調子で、しずかに、なだらかにこう答えた。——それがすべて、あきれ返るほど落ちつき払っているのだ。

「そんなことじゃない、今そんなことをたずねているんじゃない、この業つくばりめ！」わたしは憎悪に体を慄わせながらわめいた。「では、なんのために貴様がここへ来るのか、おれが自分で教えてやろう、業つくばりめ。貴様はおれが給金を渡さないと見て取りながら、気位が高くておれに頭を下げて頼むことができなものだから、そのために馬鹿げた目つきでおれをいやがらせて、困らせにやって来るんだ。そして、それがどんなに馬鹿げているかということ、夢にも考えてみようと思わないんだ、この業つくばりめ、ばかげてる、ばかげてる、ばかげてる、ばかげてる、ばかげてる、ばかげてる！」

彼はまた無言のまま廻れ右をしかけたが、わたしはそれをひつつかまえた。

「いいか！」とわたしはどなった。ここに金がある。そら見ろ、これだ！（わたしは机の

中から金を取り出した）「七ルーブリちゃんど耳を揃えて持つてゐるんだ。しかし、貴様に渡しやしない、わーたーしやしないとも。貴様がちゃんと頭をさげて、作法どおりおれに詫びをいわない限り、渡さないとも。わかつたか！」

「そんなことはこんりんぎいしませんよ！」なにか不自然なほど思いあがつた調子で、彼はこう答えた。

「させなくつてさ！」とわたしはどなった。「誓つてさせて見せる！」

「何もわたくしがあなたにお詫びをいうことなんかありませんよ」まるでわたしのどなり声などには気もつかぬ様子で、彼は言葉をつづけた。「だって、あなたはわたくしを『業つくばり』などと、悪あつこ口くちなすつたじやありませんか。これなんか、わたくしはいつだつて警察へ行つて、侮辱罪の訴えをすることができませんからな！」

「行くがいい！ 訴えるがいい！」とわたしは猛り立った。「すぐ行け、今すぐ、これからすぐ！ なんといつたつて、貴様は業つくばりだ！ 業つくばりだ！ 業つくばりだとも！」

けれども、彼はわたしをじろりと見ただけで、くるりと廻れ右をすると、もうわたしの返せ戻せという叫びに耳もかさず、あとを振り向きもしないで、ふわふわと自分の部屋へ

引き上げて行つた。

『リーザというものささいなかつたら、こんなことはいっさいなくてすんだらうに！』とわたしは腹のなかで、こう一人ぎめにした。それから、一分ばかりじつと立っていた後で、ものものしい勝ち誇つたような態度を持ちながらも、烈しく胸をときめかしつつ、ゆるゆると仕切り板の陰にいる彼のところへ足を運んだ。

「アポロン！」とわたしは低い声で句切り句切りいったが、それでも息ぎれがしていた。

「今すぐ一分の猶予もなしに、警察署長を呼びに行つて来い！」

彼はもう今の間に自分のテーブルにむかつて腰をおろし、眼鏡をかけて何か縫い物に取りかかっていた。けれど、わたしの命令を聞くと、いきなりぷつと噴きだした。

「すぐ、今すぐ行つて来い！ 行かなければ、どんなことになるかしれやしないぞ」

「本当にあなたは正気じゃいらつしやいませんよ」彼は顔を上げないで、依然として糸を針めどに通しながら、例のしゅつしゅつという声でゆつくりとこういった。「それに、自分で自分を訴えに警察へ出かけるなんて、どこの世界にそんな人がありましよう？ もしおどかしなら、いくら力みなすつても駄目でございますよ。なんにもなりやしませんからね」

「行け！」わたしは相手の肩をつかみながら、金切り声を上げた。わたしは今にも彼を撲りつけそうな気がした。

しかし、わたしは夢にも気がつかなかつたが、この瞬間、控え室の戸がとつぜん静かに開いて、だれかそつと入って来た。そして、そのまま立ちどまって、げげんそうにわたしたちを見まわしていたのである。わたしはちらと一目みると、恥ずかしさに夢中になって、自分の部屋へ駆け込んだ。そして、両手で髪の毛を引っつかみ、壁に頭を凭せながら、その姿勢のまま息を殺した。

二分ばかり経つと、アポロンのゆっくりした足音が聞こえた。

「あすここどこかの女が、あなたに会いたいといっておりますよ」特別いかつい目でわたしを見ながら、彼はこう取りついで、わきへ片より、リーザを通した。彼は立ち去ろうとしないで、嘲るようにわたしたちを見まわしていた。

「行け！ 早く行け！」とわたしはへどもどしながら命令した。この瞬間、わたしの部屋の時計がいきむように、じいっと、いった後、七時を報じた。

はばかりることなく悪びれず入つておいで

お前は立派な女あるじだ！

同じネクラソフの長詩より

わたしは度胆を抜かれて、まるで叩きのめされたような表情で、見ぐるしくへどもどしながら、彼女の前に立つていた。そして、ぼろぼろした綿入れの部屋着の前を一生懸命に掻きあわせながら、にたにた笑いをしていたらしい、——それはついこの間、意気銷沈していたとき、心ひそかに想像していたのと、寸分の相違もない図であった。アポロンは、わたしたちの傍に二分ばかり突っ立つていた後で、引っ込んでいったけれど、わたしはそれがために別段らくにはならなかった。何よりいけないことには、彼女までが急に恐ろしくへどもどしてしまった。それはわたしにも思いがけないくらいであった。むろん、わたしの顔をじつと見ながらのことである。

「坐りたまえ」とわたしは機械的にいって、彼女のためにテーブルのそばへ椅子を引き寄

せ、自分でも長いすに腰をおろした。彼女は目をまん丸に見ひらいてわたしを見つめながら、すぐにおとなしく腰をかけた。明らかにすぐに、この場でわたしから何か期待しているふうであった。この無邪気な期待ぶりがわたしをかつとさせた。けれど、わたしは自制した。

こういう時にこそ、何もかも当たり前のような顔をして、努めてなんにも気のつかないように振る舞うべきはずなのに、この女は……で、わたしは漠然とながらこう考えた、そんなことをすると、うんとひどい報いを受けなくちやならないぞ。

「とんだところをきみに見られちゃったね、リーザ」こんなふうな切り出し方をしちやいけないと承知しているくせに、わたしは吃り吃り切り切りだした。

「いや、いや、何か変なことを考えてくれちゃ困るよ！」相手がとつぜん顔をあからめたのを見て、わたしはこう叫んだ。「ぼくは自分の貧乏なことなんか、別に恥ずかしがっちゃいないんだから……それどころか、ぼくは自分の貧乏なのを、誇りくらいに考えてるんだ。ぼくは貧乏だけれども、高潔なんだよ……貧乏だって、高潔でいることはできるものだからな」と、わたしはへどもどしながらいった。「もつとも……お茶はほしくない？」
「いいえ……」と彼女はいいかけた。

「待ちたまえ！」

わたしは跳りあがって、アポロンのところへ駆け出した。どこへでもいいから、一時逃げこまずにいられなかつたのだ。

「アポロン」ずっと始終手の中に握りしめていた七ルーブリを、彼の前にほうり出しながら、わたしは熱病やみのような早口でこうささやいた。「これがお前の給金だ。いいかい、これをお前にやるよ。しかしその代わり、お前はおれを助けてくれなくちゃいけないぜ。今すぐ料理屋へ行つて、お茶とビスケットを十枚取つて来てくれ。もしいやだといつたら、お前はおれを不仕合わせな人間にすることになるんだ！ お前はあれがどんな女か知らないけれど……もうこれ以上いわん！ お前は何か変なことを考えているのかもしれないが……しかし、それはあの女が何ものか知らないからだ……」

アポロンはもうちゃんと仕事の前に腰をおろして、眼鏡まで掛けていたが、針を置こうともせず、まず無言のまま金をじろりと横目に見た。それから、わたしには一顧の注意も払おうとしないで、まるで返事さえせずに、めどに通しかけの糸をひきつづきひねくつていた。わたしは [a, la Napoleon] (ナポレオン式に) 腕組みして彼の前に立つたまま、三分間ばかり待つていた。そのくせ自分もおおい顔をしていたのだ。こめかみは汗でじつ

とりとしていた。わたしはそれを感じた。しかし、ありがたいことに、彼はわたしを見ているうちに気の毒になって来たらしい。糸を通し終わると、おもむろに腰を持ちあげ、おもむろに椅子を押しつけ、おもむろに眼鏡をはずし、おもむろに金を数えたのち、さて肩越しに「ちやんと一人前とつてくるんですか？」とたずね、ゆつくりと部屋を出て行った。わたしはリーザのほうへひつ返しながら、ふとこんなことを考えた、いつそのまま、部屋着姿のまま、足の向くほうへ逃げ出したらどうだろう。あとは野となれ山となれだ。

わたしは腰をおろした。彼女は心配そうにわたしを眺めた。しばらくのあいだ、ふたりは押し黙っていた。

「あいつを叩き殺してくれろ！」わたしは出しぬけにこうどなりながら、力まかせに拳固でテーブルを撲りつけた。その拍子にインキ壺からインキがぱつとはねかえった。

「まあ、あなたどうなすったの！」彼女はぎくくつとして、こう叫んだ。

「あいつを叩き殺してやる、叩き殺してやる！」わたしはテーブルをとんとん撲りつけながら、黄いろい声でこうわめいた。すっかり前後を忘れてはいたものの、それと同時に、こんなに前後を忘れるのは実に馬鹿げているということ、はつきりわきまえていたのである。

「リーザ、あの業つくばりがおれにどんなことをするか、きみは知らないだろう。あいつはおれの厄病神なんだ……あいつは今ビスケットを買いに行ったのだが、あいつは……」
こういつた途端に、わたしはいきなりわつと泣き出した。それはヒステリーの発作だった。わたしはしゃくり泣きの合間合間に、恥ずかしくてたまらなかったが、もうそれを抑えることができなかった。

彼女はびつくりしてしまった。

「あなたどうなすつたの！ あなたどうなすつたの！」わたしのまわりをうろうろしながら、彼女はこんなことを叫ぶのであった。

「水を、水を飲ましてくれ、ほら、あすこにある！」とわたしは弱々しい声でつぶやいた。もつとも、水など飲まなくても平気だし、弱々しい声でつぶやかなくてもすむということを、腹の中では意識していたのである。しかし、わたしは体裁をつくろうために、いわゆる芝居をしたのである。もつとも、発作は本物だったけれど。

彼女はとほうにくれたようにわたしの顔を見ながら、水をさし出した。このとき、アポロンが茶を持ってきた。わたしは不意にこのありふれた平凡な茶が、ああいうことがあった後では、おそろしく不体裁なみじめなもののように思われ、ぱっと赤くなった。リーザ

はぎよつとした顔つきさえしながら、アポロンを見やった。彼はわたしたちを見むきもしないで、さっさと出て行った。

「リーザ、きみはぼくを軽蔑しているね？」相手が何を考えているか知ろうとして、焦躁に全身を慄わせ、穴のあくほど彼女の顔を見つめながら、わたしはこういったものである。彼女はどぎまぎして、返事ひとつする勇氣さえなかった。

「お茶でも飲みたまえ！」とわたしは毒々しい調子でいった。わたしは自分で自分に癩癩を起こしていたのだが、その当たるさきはむろん彼女に決まっている。彼女に対する恐ろしい憎悪の念が、とつぜんわたしの心中に煮えたぎった。もういきなり殺してしまいかねないほどであった。その仕返しに、わたしはずつとしまいまでひと口もものをいってやるまいと、腹の中で誓ったものである。

『何もかもこの女のせいなんだ』とわたしは考えた。

わたしたちの沈黙はもう五分ばかりもつづいた。茶はテーブルの上に置きっぱなしになつていた。わたしたちはそれに手を触れようとしなかった。しまいには、わたしはわざと飲まないことにして、それで彼女をいっそういづらくしてやろう、と考えるまでにいたつた。彼女のほうからさきにつけるのは、具合が悪いに決まっている。彼女は幾度かも

の悲しげな、げげんそうな目つきでわたしを眺めた。わたしは頑固におしだまっていた。おもに苦しみを嘗めたのは、むろんわたしだった。なぜなら、自分の意地わるな馬鹿馬鹿しさを、完全に意識していたからである。しかし、そのくせ、どうしても自分を抑えつけることができなかった。

「わたしはあそこから……すつかり……出てしまいたいんですの」なんとかして沈黙を打ち切ろうと思つて、彼女はこういいかけた。けれど、憐れな女よ！ ほかのことならともかく、この話を、しかもこういう馬鹿げた瞬間に、それでなくともわたしののような愚かな人間に、いい出すのが間違つていたのだ。わたしでさえ彼女の気の利かなさと、要もない真つ正直さがかわいそうになり、胸が痛いような気がしたくらいである。何かしら醜悪なあるものが、すぐさま憐憫の情を押し潰してしまった。それどころか、よけいにわたしをけしかけて、何もかもどうともなつてしまえ！ という気にさせたのである。またさらに五分間たつた。

「お邪魔じやなかったでしょうか？」彼女は聞こえるか聞こえないかに、おずおずとこう口を切りながら、腰を持ちあげにかかった。

けれども、自尊心を傷つけられた憤りが、初めて彼女の心に燃えあがったのを見ると、

わたしは憎悪の念に、いきなりぶるぶる慄え出して、さっそく水が堰を切ったようにまくし立てた。

「いったいきみはなんのためにぼくのとこへ来たんだい？ どうかお願いだから、聞かせてもらおうじゃないか」自分の言葉の、論理的な順序さえ考え合わそうとしないで、わたしは息を切らしながら言い出した。わたしは何もかも一気にいってしまったので、何から切り出したらいいかということさえ、気にならなかった。

「きみはなんのためにやって来たんだ？ 返事したまえ！ 返事したまえ！」ほとんどわれを忘れて、わたしはこう叫んだ。「ね、なんのためにやって来たのか、おれのほうからいってあげよう。きみがやって来たのは、あるときぼくが哀れっぼい言葉をしゃべったからだ。ね、それできみは感傷的な気持ちになって、また『哀れっぼい言葉』が聞きたくなつたのさ。それなら、いって上げよう。いいかい、ぼくはあの時きみをからかってやったんだよ。今だってからかかってるんだ。何をわなわな慄えているんだね？ そうだ、からかってやったのさ！ ちょうどあのまえの食事のときに、ぼくは人に侮辱されたんだ。ほら、あるときぼくより前にやって来た連中さ、ぼくはそのなかの一人を、——ある将校をぶん撲ってやろうと思つて、あの家へ乗り込んだが、取り逃がして、やり損ったものだから、

だれかにそのむしやくしや腹を持って行って、うつぷんを晴らさなくちやいられなかった。そこへ運わるく、きみがひつかかったわけだ。で、ぼくはきみをからかって、胸をせいせいさせたのさ。ぼくはばかにされたから、自分でもだれかをばかにしてやりたかった。さうざん顔に泥を塗られたから、こつちもえらいところを見せてやりたくなったのだ……こういう次第だったのに、きみはもうぼくがあの時わざわざきみを救いに行ったのだ、なんて考えたんだろう、え？ きみそう思っただろう？ そう思っただろう？」

わたしは、ことによつたら彼女が面くらつて、こまかいところまで呑み込めないかもしれぬと察していたが、また同時に、ことの真相は立派に理解するに相違ない、とも信じていた。はたしてそのとおりであった。彼女は麻布ぬののように真つ青になつて、何かいいたさうにしたけれど、唇が病的にひつ吊つたばかりである。彼女はまるで斧で足を払われたやうに、へたへたと椅子に腰をおろした。それからずっとしまいまで、口をぼかんと開けて、目を見ひらき、たとえがたない恐怖に身をふるわせながら、わたしのいうことを聞いていた。無恥な露骨さ、わたしの言葉の無恥な露骨さが、彼女を圧倒してしまつたのである……

「救うんだって！」わたしは椅子から跳りあがり、彼女の前で部屋の中をあちこち走りな

がら、こう言葉をつづけた。「いったいなにから救うんだ！ それに、こういうぼくだつて、きみにも劣るくらいかもしれないだよ。なんだってきみはあのととき、ぼくがきみにお説教をしていた時、いきなりぼくに面とむかつて、『お前さんはまた何しに家へやって来たの？ お談義でも聞かせにかい？』ときめつけてくれなかったのだ？ 権力だ、あのとときぼくには権力が入り用だったんだ、芝居が必要だったんだ、きみの涙、きみの屈辱、きみのヒステリイを絞り取りたかったのだ、——あのとときぼくに入り用だったのはこれなのさ！ 実は、ぼくはあのととき自分からして持ち切れなかったのだ。ぼくは意気地なしだもんだから、すぐにぎよつとしてしまったのだ。そして、なんのためかつくづく合点がゆかないけれど、うっかりきみに所書きなんか渡してしまった。でね、その後でまた家まで帰りつかないうちに、その所書きをやったばかりに、ありつただけの悪口雑言を並べて、きみを罵倒したものさ。ぼくはもうきみを憎んでいた。それはあのととききに嘘をついたからだよ。だって、ぼくはちよつと言葉を弄んで、頭の中で空想してみたただけで、本当はどういうことを望んでいたか、それがきみにわかるかね？ ほかでもない、きみなんか消えてなくなれということだ！ ぼくには落ちつきというものが必要なんだ！ ぼくは人から迷惑をかけられないためには、今すぐ世界じゅうを一コペイカに売り飛ばしたって平

気だ。世界が破滅するのと、このぼくが茶を飲めないのと、どっちが一大事かと思う？

その答、——世界は破滅しても、ぼくはいつでも茶を飲まなくちやいけないんだ。きみはそれを知っていたかね、どうだね？ まあ、こういうわけで、ぼくは自分が穢らわしい卑怯者で、利己主義のなまけ者だつてことを、自分で承知しているのだ。現にこの二、三日というもの、きみがやって来はしないかと、おっかなくってふるえていた始末だ。この二、三日、ぼくがなにを心配していたか、きみわかるかね？ ほかでもない、あの時はきみの前で天晴れ英雄だったのに、思いがけなくこの破れた部屋着をきた、乞食のようないまわしい姿を、きみに見られるということなんだ。ぼくはさつき、貧乏を恥じないといったろう。ところが、教えてあげよう、恥じているんだ。何より一番に恥ずかしいんだ。何より一番に恐ろしいんだ。それは、盗みをしたより、もつといけない。なぜって、ぼくは虚栄心が強いものだから、まるで身の皮を剥ぎ取られたように、空気が触れただけでも痛いらだ。きみはいつたい察しがつかなかつたのかい？ ぼくが意地の悪い犬のように、アポロンに、喰つてかかつていた時、きみにこの部屋着姿を見られたので、一生それを恨みに思う人間なんだよ。ついこのあいだ英雄であり、救い主であった男が、疥癬やみで毛むくじやらの犬ころみみたいに、自分の下男に喰つてかかっていると、相手のほうは主人を冷や

かしてるんだからな！ それから、さつきぼくがまるで恥をかかされた女みたいに、きみの前でこらえじょうなくこぼした涙のことだって、永久にきみを恨みに思うよ！ また今きみに白状しているということだって、やはり永久にきみを恨みに思うだろうよ！ そうだ、きみは一人でこういういっさいのことに責任をもたなくちやならない。なぜって、きみがそこへ運わるく来合わせたからだ。なぜって、ぼくが陋劣だからだ。なぜって、この地上に棲む下等な虫けらの中でも、いちばん穢らわしい、一ばん滑稽な、一ばんけち臭い、一ばん馬鹿な、一ばん嫉妬ぶかい虫けらだからだ。ほかのやつらだって、けっしてぼくよりよかあないけれど、しかしどういうわけか知らないが、ほかのやつらはけっしてはにかまないんだ。ところが、ぼくは一生涯、くだらない有象無象に小づき廻されている。それがぼくの特性なんだ！ きみがそれをわかってくれなくたって、ぼくにはなんのかけかまもない問題だよ！ それに、きみなんかぼくにいったいどんな関係がある？ え、きみがあの社会で破滅しようとしまいと、そんなことがぼくにどんな関係があるんだい？ それに、きみはわかるかい、——ぼくがこれをすっかり白状した時に、きみがここにいて聞いてしまったものだから、そのためにぼくはきみをどんなに憎むかしれないぜ。だって、人間がこんなふうに洗い浚いしやべるのは、一生に一度しかないことだよ。おまけにヒス

テリイの状態でさ！……この上きみになんの用がある！ これだけいったのに、なんだってまたぼくの前に突っ立ったまま、帰ろうともしないで、ひとを苦しめるんだい？」

けれど、そのとき不意に奇妙なことが起こった。

わたしはなんでもすべて書物式にものを考えたり、空想したりする習慣がついてしまつて、自分が以前空想の中で創作したようなふうには、現実のことを想像する癖があつたので、その時もこの奇妙な状況をすぐに悟ることができなかつたくらいである。それはほかでもない、わたしのために圧倒的な侮辱を受けたリーザは、わたしが想像したよりも、ずっと多くのことを理解したのである。彼女はいま見聞きたいっさいのことから、真心から愛する女がいつも真つさきに悟ることを悟つたのだ。つまり、わたし自身が不仕合わせな人間だということである。

彼女の顔に現われた恐怖と侮辱感、まず悲痛な驚きに代わつた。わたしが自分を穢らわしい卑劣漢などと罵つて、さめざめと涙を流しはじめたとき（わたしはこの長ぜりふの初めから終わりまで、泣き泣きしゃべつたのである）、彼女の顔ぜんたいが痙攣にひん曲がつた。彼女は立ちあがつて、わたしを押しとめようとしたのである。やがてわたしが話し終わつたとき、彼女が気に止めたのは、「なぜお前はここにいるのだ、なぜ帰らないの

だ！」というわたしの叫びではなく、わたし自身これを口に出すのが、さぞかし苦しいに相違ないということだった。それに、彼女はかわいそうなほどいじめつけられた女で、わたしより無限に劣った人間だと、自分から思い込んでいたのだから、侮辱を感じたり腹を立てたりするわけがない。彼女はなにか抑えきれない衝動に駆られたように、とつぜん椅子から跳りあがった。わたしのほうへ飛びつきたそうな気持ちを、全身にあらわしつつも、やはりまだおさおさして、その場を動くのをためらいながら、わたしのほうへ両手をさし伸べた……と、わたしも胸の中がひっくりかえったような気がした。そのとき彼女はやにわにわたしに飛びかかって、両手でわたしの頸を抱きしめながら、泣き入ったのである。わたしもやはり我慢しきれないで、かつて覚えぬほど烈しく慟哭した。

「ぼくは善良な人間に……なれないのだ……人がならしてくれないのだ！」わたしはやつとのことでこういうと、長いすのところまで辿りつき、その上へ俯伏しにぶつ倒れたまま、十五分ばかり本物のヒステリイを起こして、慟哭をつづけたのである。彼女はひとわたしに寄り添って、わたしの体を抱きかかえたまま、その抱擁の中で麻痺したかのように思われた。

しかし、それにしても困ったことには、ヒステリイもやがては収まる時が来なければな

らなかつた。で（わたしはあえてこのいまわしい真実を書く）、長いすの上に俯伏して、やくぎな革のクツシヨンにぐつと顔を突つ込んでいたわたしは、今さら頭を上げて、リーザの顔をまともに見るのがきまり悪いということを、われともなしに少しづつ遠廻りしながら、とはいえ抑え難い力をもって、感じ始めたのである。何が恥ずかしかつたのか？

それは知らないけれども、わたしは恥ずかしかつた。またこういう考えも、わたしの混乱しきつた頭にうかんで来た、——思えば、いまわたしたちの役割は根本的に変わってしまつて、今度は彼女のほうが英雄で、わたしはちやうど四日前のあの夜のリーザと同じように、みじめな圧倒されつくした人間にすぎなくなつたのだ……こういう考えが、長いすの上で俯伏しになつているあいだに、わたしの頭へ浮かんで来たのである！

ああ！ なんとということだ！ はたしてわたしはあのととき彼女を羨ましく思つたらうか？

わからない、いまだにやはり解決がつかない。ましてその時はもちろん、今よりもつとわかるはずがなかつたのである。だれにもあれ、他人に対する権力と暴虐行為なしには、わたしは一日も生きてゆけない人間なのだ……けれど……けれども、理屈では何ひとつ説明できるものでないから、したがつて、理屈など捏ねてみたつて始まらない。

とはいえ、わたしは自分を制して、頭を上げた。実際、いつかは上げずにはすまないのだ……すると、わたしは今でもそう信じているが、つまり、彼女の顔を見るのが恥ずかしかったそのためだろうが、そのときわたしの心に、突然べつな感情に火がついて、ぱっと燃えあがった……それは支配欲と領有欲である。わたしの目は情欲にぎらぎらと輝いた。わたしはぎゅっと彼女の手を握りしめた。その瞬間、わたしはどんなに彼女を憎み、どんなに彼女に心ひかれたことだろう！ この二つの感情は互いに油をそそぎ合うのであった。それはほとんど復讐に似かよっていた！……彼女の顔には初めげんそうな、というより、恐怖の色さえ浮かんだが、それはほんの一瞬の間だった。彼女はうちようてんになって、情熱こめてわたしを抱きしめたのである……

10

十五分ばかり経ってから、わたしはいら立たしい焦躁の念に駆り立てられながら、部屋の中をあちこち走り廻っていた。そして、のべつ衝立の傍へ寄っては、隙間からリーザを覗いて見るのであった。彼女は寝台に頭をもたせて、床ゆかの上にぺったり坐っていた。きつ

と泣いていたに相違ない。しかし、それでも帰って行こうとしない。それがわたしをじりじりさせたのである。今度こそ彼女は何もかもすっかりわかったのだ。わたしは徹底的に彼女を侮辱したのである。けれども……今さらくたくだしく話したってしようがない。彼女は、わたしの情欲の発作が復讐にほかならぬことを、彼女にとって新しい屈辱にほかならぬことを、悟ったのである。さきほどまでわたしのいだいていたほとんど対象のない憎悪に、今度は彼女に対する個人的な羨望にみちた憎悪が加わった。それを彼女は悟ったのである……もつとも、彼女がこういうことをすっかり明瞭に悟ったと、断言するわけではない。が、その代わりわたしが穢らわしい人間で、第一、彼女を愛する力がないということ、完全に了解したのであった。

諸君はそれに対して、そんなことはあり得ない、お前のように意地悪で馬鹿な人間があるなんて、信じ得られない話だといわれるだろう。それはわたしも覚悟している。それどころか、彼女を愛さないということは、少なくとも、その愛情を尊重しないということは、信じられない話だ、とこうつけ添えられるかもしれない。が、どうして信じられないのだろうか？ 第一に、わたしはもう愛することさえ、できなくなった人間なのだ。なぜなら、くり返して申し上げるが、わたしにとって愛するということは、暴君のごとく振舞って、

精神的に優越権を握ることだからである。わたしは生涯これよりほかの愛を、想像することもできなかつた。そして、今では、愛とはすなわち、相手に対して暴君のごとく振舞う権利、しかも相手からよろこんで捧げられた権利であると、こんなふうにときどき考えるまでにいたつたのである。わたしは自分の地下生活者の空想の中でも、愛というものを争闘とよりほか想像したことがなかつた。で、いつも愛を憎悪からはじめて、精神的な征服でおわるのであつた。しかもそのあとで、自分の征服した対象をどう始末したらいいか、見当もつかないようなことになるのだ。それに、わたしはすっかり自分を精神的に腐敗させ、完全に『生きた生活』から遠ざかつてしまったために、ついさきほども彼女にむかつて、お前は『哀れっぽい言葉』を聞こうと思つて、おれのところへやって来たのだなどと責めつけて、恥をかかしたくらいなのだから、なにもこの場合、信じ得られないことなどあるはずがないではないか。あれはわたしのほうで察しがつかなかつたのだ。彼女が訪ねて来たのは、けつして哀れっぽい言葉など聞きたいためではなく、わたしを愛するためだつたのだ。なぜならば、女にとっては愛の中にこそいっさいの復活が含まれているからである。あらゆる破滅からの救いと更生とが秘められているからである。これよりほかに復活の現われはないではないか。もつとも、わたしは部屋の中を走り廻つて衝立の間隙に

に覗いてみたとき、あまり彼女を憎んではいなかった。ただ彼女のここにいるということが、たまらなかつただけである。わたしは彼女が姿を消してくれるのを望んでいた。わたしは『平安』を願ったのだ、一人で地下の世界に残ることを望んだのだ。『生きた生活』は、長く遠ざかっていたために、息をするのも苦しいほどわたしを圧迫したのである。

しかし、幾分か過ぎた。彼女はまるで気でも遠くなったように、やはり身を起こそうとしなかつた。わたしは厚かましくも、彼女の注意を促すために、そつと衝立をノックした……彼女は急にびくつとして、いきなり躍りあがると、まるでわたしを遁れてどこかへ逃げだそうとでもするように、肩掛けや帽子や外套をさがしに飛んで行った……二分ばかり経つてから、彼女は静かに衝立の陰から出て、重苦しい目つきでわたしを眺めた。わたしは毒々しくにたりと笑つたが、それは無理にとつてつけたようで、お体裁にすぎなかつた。わたしは彼女の視線を避けて、顔をそむけた。

「さよなら」彼女は戸口へ足を向けながら、そういった。

わたしはとつぜん彼女のそばへ駆け寄つて、その手を取り、掌を開かせてその中へ押しこみ……そしてまた指を握らせた。それからすぐに顔をそむけて、反対の隅へ飛びのいた。少なくとも、自分の目で見ないためなので……

わたしは今すぐ、この場で、自分がこんなことをしたのは、われを忘れて、なにげなく、あわててへまな真似をしたのだと書いて、嘘をつきたいくらいに思うのだ。が、しかし嘘をつくのはいやだから、まっ正直にいつてしまおうが、わたしが彼女の指を開いて、金なんか握らせたのは……意地の悪い皮肉なのである。これはわたしが部屋の中を走り廻って、衝立の陰を窺っている間に、ふと思ひ浮かべたことなのだ。しかし、これだけは間違いないということが出来る——わたしはこんな残酷な真似をわざわざやるにはやったけれど、本心からではなく、低劣な頭脳から出たことなのだ。それはまったく付け焼刃の、わざと頭の中でこしらえ上げた、書物式なものだったので、わたし自身が一分と持ちこたえることができなかったくらいである、——初め自分の目で見たくないので、片隅に飛びのいたけれど、やがて羞恥と絶望の念をいだきながら、リーザの後から駆けだした。わたしは玄関へ出る戸を開けて、じっと耳を澄まし始めた。

「リーザ！ リーザ！」とわたしは階段へ向かって叫んだ。が、それは思い切りの悪い小さな声であった……

返事はなかった。下のほうの段で、彼女の足音が聞こえるような気がした。

「リーザ！」とわたしはもう少し大きな声で叫んだ。

返事はない。けれど、その瞬間、表へ出る固いガラス戸がぎいと重々しく軋んで、それから窮屈そうにがたんと鳴る音が、下のほうから聞こえて来た。鈍い反響が、階段づたいに昇つて来た。

彼女は去つた。わたしはもの思いに沈みながら、部屋へ歸つた。たまらなく重苦しい気持ちであつた。

わたしは彼女の坐つていた椅子に近いテーブルのそばに立ちどまり、無意味に目の前を見つめていた。一分ばかり経つたとき、わたしは不意に愕然と身を慄わせた。まん前のテーブルの上に、わたしはある物を見つけた……ひと口にいえば、揉みくたになつた青い五ルーブリ札さつを見つけたのだ。ついさつき彼女の手に握らせたのと同じものである。これはあの紙幣に相違ない。ほかに札があるはずがない。第一、ほかにそんなものが家の中になかつたのだ。してみると、彼女はわたしが隅っこへ飛びのいた間に、素早く掌からテーブルの上へほうり出したのだ。

どうしたことだ？　彼女がこうするということとは、わたしも期待してよかつたのではないか。本当に期待することができたろうか？　いや、わたしは徹底的なエゴイストで、実地に人間を尊敬することがまるでなかつたので、彼女がこうするかもしれないということ

を、想像することさえできなかつたのである。これだけはわたしも我慢しきれなかつた。ちよつと一とき考えた後、わたしはまるで気がいののように、あわてふためいてありあわせのものを肩にひっかけ、一目散に彼女の後を追つて駆け出した。わたしが表へ駆け出したとき、彼女はまだ二百歩と離れてはいなかつた。

あたりは静かだつた。雪は霏々としてほとんど垂直に降りながら、歩道にも、車道にも、柔かいクツションを敷きつめていた。往来の人はひとりもなく、もの音ひとつ聞こえなかつた。街燈はさも侘しげに空しくまたたいていた。わたしは二百歩ばかり走つて、四つ角のところまで駆けつけたとき、歩みを止めた。いったいどっちへ行つたのだろう？ そして、なんのためにわたしは彼女を追っているのだろう？

なんのためだろう？ 彼女のまえに倒れ、慚愧の涙を流してしゃくり上げながら、彼女の足を接吻して、ゆるしを乞うためか！ わたしはまったくそうするつもりだったのである。わたしの胸は張り裂けそうであつた。いつまで経つても、わたしは永久にこの時のことを、平気な心持ちで、追憶することはできないだろう。しかし、——なんのために？ という疑問が、わたしの心に起こつた。わたしはきよう彼女の足を接吻したがために、さつそくあすにも彼女を憎むようなことが、はたしてないといえようか？ いったいわたし

は彼女に幸福を与えることができるだろうか？ いったいわたしは以前百ペンも経験したように、きょうもまた自分の真価を認識したのではなかったろうか？ いったいわたしは彼女を苦しめないつもりだろうか？

わたしは雪の中に立って、どんよりした靄のなかを見すかしながら、こんなことを考えた。

『いつこのほうがよくなるだろうか？ さきざきもこのほうがよくなるだろうか？』その後で、もう家へ帰ってから、わたしはこんな妄想をつづけていた。妄想で生々しい心の痛みを消しながら。『もし彼女が永久に侮辱をいだきながら去って行ったら、いつそのほうがよくなるだろうか？ 侮辱というやつ、——これは実際、一種の浄化作用なんだからな。これは何より辛辣、痛烈な意識なんだからな！ おれは明日にもさっそくあの女の魂を穢して、あの女の心を疲憊させるかもしれないんだ。ところが、こうすれば、侮辱はけつしてあの女の心の中で消えることがない。そして、どんなにいまわしい穢れがああ……ふむ……ことによったら、赦罪の力によって、といったほうがいいかもしれない……だが、しかし、そのためにあの女がらくになるとでもいうのか？』

まったく真面目な話、今度はもうわたしが諸君に一つの質問を提出するが、安価な幸福と高められた苦悩と、いったいどちらがいいだろう？ さあ、答えてみたまえ、どちらがいいか？

その晩、心の痛みにほとんど生きてこちもなく、自分の住居にひきこもったまま、わたしはこんなことを空想したのである。この時くらい無量の苦痛と悔恨とに悩まされたことは、いまだかつてなかったほどである。けれど、わたしが自分の家から駆け出したとき、途中からおめおめ引つ返さないということについては、はたしてなんの疑いもなかったろうか？ それ以来、わたしはついに一度もリーザに逢わないし、彼女の噂さえも聞かない。もう一ついい足しておくが、わたしはその当時、気やみのためにほとんど病気しないばかりの有様だったが、にもかかわらず、侮辱と憎悪の利益に関する自分の警句に、長いあいだ得意を感じていたものである。

それから幾年も経った今でさえ、このいつさいの顛末を思い起こすと、なんともいえないほどいやな気持ちになる。今でも思い出していやなことはいろいろあるが、しかし……もうそろそろこの『手記』を閉じたほうがよくなさるうか？ ことよつたら、こんなものを書きはじめたのが、そもそも間違いだったのかもしれない。少なくとも、わたしはこ

の物語を書いている間じゆう、ずっと恥ずかしい気がしていた。して見ると、これはもはや文学ではなく、懲治の手段である。まあ、早い話が、わたしは片隅で精神的に腐蝕しながら、金がないのと、生きたものから絶縁してしまったのと、地下の世界で一生懸命に毒念を貯えていたのとで、自分で自分の生活を消耗した、などというような長たらしい話は、——まったくのところ、くそ面白くもないに決まっている。小説には主人公というものがある。ところが、この中にはわざと計画したように、主人公らしいものとはまるで正反対の性質ばかり、一々丹念に寄せ集めてあるではないか。それに第一、こんなことは不快な印象を読者に与える。それというのも、われわれがみんな実生活から絶縁して、生活というものを忘れてしまったからだ。みんな大なり小なり、精神的に跛行しているからだ。あまり絶縁してしまったものだから、どうかすると『生きた生活』に対して一種の嫌悪を感じるほどである。そのために、生きた生活のことを思い出させられるのが、我慢できないのである。実際、われわれはやまい膏肓に入つて、ほんとうの『生きた生活』をほとんど労働かお勤めのように感じ、いつそ書物式のほうがいいなどと、みんな内心かんがえるほどになったのである。いったいわれわれは何を時々へんに蠢動するのだろうか、なんだって気まぐれを起こすのだろうか、何が望みなのだろうか？ 自分でもなんだかわからないのだ。

もしわれわれの気まぐれな望みをかなえてもらったら、かえって困るくらいなのだ。まあ、ものはためし、まあ、たとえば、われわれにも少し独立性を与えて、われわれの手から繩を解き、活動の範囲を拡めて、監督をゆるめて見たまえ。そうすれば、われわれは……うけ合っておくが、われわれはすぐものとおり監督してもらいたい、と頼むに決まっているのだ。おそらく、諸君はわたしのこの言い草に腹を立てて、地だんだを踏みながら、どなりつけることだろう。曰く、『きみは自分ひとりだけのことをいいたまえ。自分の地下生活のみじめな話だけしておけばいいので、われわれ一同なんて僭越なことはよしてもらおう』だが、失礼ながら、諸君、わたしはなにもこの一同よばわりを、いいわけの道具に使おうなどと思っていない。わたしひとりだけのことをいわしていただけば、わたしはただ生まれてこの方ずっと始終、諸君が半分までも徹底させる勇気のなかったことを、極端にまで徹底させただけなのである。諸君は自分の臆病を分別のよきにして、自分で自分をごまかしながら、それを気休めにしてきたのだ。だから、わたしのほうがまだしも諸君に比べれば、もつと「生き生きしている」ことになるだろう。まあ、もう少し目を開けてよく見たまえ！ 実際、今どこに本当の生きたものが生活しているか、その生きたものはいったいなにもので、なんと呼ばれているか、それさえわれわれは知らないのではな

いか！ かりにわれわれから書物を取り上げてみるがいい、われわれはすぐにまごついて、とほうにくれてしまうに違いない、——早い話が、どこへ合体したらいいか、何を準拠にしたらいいか、何を愛し何を憎んだものか、何を尊敬し何を軽蔑したものか、いつさいおさきまつくらになつてしまふだろう。それどころか、われわれは人間であることさえ、——本当に自分自身の肉体と血とをもつた人間であることさえ荷厄介にして、それを恥に思い、恥辱と考えながら、なにかしら今までなかつた一般人になろうと、一心に隙を狙っているのだ。われわれは死産児で、しかもずっと前から、生きた父親から生まれたのではないのだ。しかも、それがだんだんよけいに御意に召してくるのだ。好みに合ってくるわけである。やがて遠からず、なんとかして、観念から生まれることを考え出すだろう。が、もうたくさんだ、——わたしはもう『地下の世界』から書き送るのがいやになつた……

とはいうものの、この逆説家の『手記』はこれだけで終わったのではない。彼は我慢しきれないで、またさきを書きつづけたのである。しかし、やはりもうこのへんでとめてもよからうと思う。

青空文庫情報

底本：「ドストエーフスキイ全集 5」河出書房新社

1970（昭和45）年1月20日初版発行

1979（昭和54）年4月20日13版発行

※「トルドリユーボフ」と「トリドリユーボフ」の混在は、底本通りです。

入力：阿部哲也

校正：荒木恵一

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

地下生活者の手記

З а п и с к и и з п о д п о л ь я

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 フョードル・ドストエーフスキイ

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>